

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

楽しく逝こうぜ？

【作者名】

piGUNaM]

【あらすじ】

リリカルなのはに転生!?じゃあクレイジーダイヤモンドをもらっぜい!!この世で一番優しいスタンド能力『クレイジーダイヤモンド』を引っさげた少年のラブコメディ!! リスナーのツ!!コメントがツ!!作者のツ!!スタンドパワーにツ!!なりますッ!! この小説は作者の人生2作目です。ノリで書くので頭空っぽにしてご鑑賞ください。 作者は豆腐メンタルです。 にじファン アットノベルスから引越しました。 TINAMI様にも掲載させてもらってます。 1話1話の長さはバラバラですがよろしく願います。

第1話 え？原作知識の終わり？

どうも!!モニターの向こうの紳士、淑女の諸君!!

俺は『橘禅』(たちばなせん)ってもんです!!

……誰に言っただ?俺?……まあいいか……

イキナリですが私、俗に言っ『転生者』ってやつをやっております。

いやいや本当ですってッ!!ちよ、ヨーグルト投げないでッ!

ち、ちゃんと神様にも会いましたよ?

話をしてみると部下の書類ミスで俺の書類は燃えるゴミ行き

現世のMYhomeにゴデコトラ突撃

ポックリ昇天

「こっちのミスだからリリカルなのは世界に転生させてやる。特典もやっから楽しめやコラ」と神様

「リリカルは良く分かんないけど、スタンドに憧れてた!!クレイジーダイヤモンドをギボンヌo」

「おkーんじゃ炒ってこい」

中華なべのような場所から振り回されて飛んでいく我が体

「普通はおちるんじゃなああああいいいい!!」

そして海鳴に生まれました!!(キング・クリムゾン!!)

現在小学3年生です!!

学校は聖祥小学校なんてお坊ちゃま校ではなく、海鳴第2小学校つとここに通っています……私立なんか入れるかぁ!!ポケェ!!

まあリリカルの内容が良くわかんなかったから、原作には絡むつもりはなかったんですよ。

なにせ最後に見たアニメでフェイトって子が出てきた辺りから見ませんので……巻き込まれたら何があるか……中途半端にせず全部見しておくべきだったと後悔しました。

まあ、原作に関わらなければ普通の世界と変わりませんし……

それよりかお袋から料理を教わっている時間が大事だったんで、構いやしなかったんですわ……そんなこんなでお袋から料理を教わりつつ、日常を楽しんでいたんですが……今更なところで原作組に遭遇ですよ？

いやはや、只今目の前で、ジュエルシードが絶賛暴走中ですもん……お袋に頼まれた買い物(マロニーちゃん)を済ませて帰ろうとしたらあら不思議!?

なぜか結界の中にいました……上空を白と黒の服を着た二人の女の子が舞っております。

時折、金色と桃色の光が色んな所で弾けてるぜ。

……ありやどうみてもなのはさんとフェイトさんですね。

まさかいきなり、俺の知っている原作の最後の辺りとは……確かこの時にフェイトが怪我すんだっけ？

しかも手のひらがズタズタになるほどの大怪我だったような……

……ハア……原作には関わりたくなかったんだが、仕方ねえか……怪我すんのを知っていて放置するわけにもいかねえし。

「……いつちよ、この世で一番『優しい』能力つてえのを見せてやりませんか!!!」

俺は買い物袋を道の端に置いて、クレイジーダイヤモンドを心の中で喚び出す。

すると、スタンドが出現する時のドンツという腹に響く様な低音と共に、俺がずつと憧れていたスタンド、『クレイジーダイヤモンド』が俺の横に悠然と現われる。

やっぱこの見た目、厳つくてカッコイイぜえ!!

そのまま『クレイジーダイヤモンド』の超脚力で飛び上がり一気にジュエルシードが暴走している現場のビルに向かって、俺の身体がブツ飛ぶ。

これも密かに憧れてたんだよ!!!

俺は初めて感じる股をヒュウツと抜ける様な感覚に心を踊らせて笑顔を浮かべる。

どれ、いっちょテンションの上がる掛け声でも出しておきますか。

「イエエーハーハー!!!」

どこぞの銀河一速いガラクタ宇宙船の船長の様にシャウトして、俺はビルの屋上で必死にジュエルシードを抑えている女の子の元へ飛んでいった。

.....

「フェイトーダメだ危ない!!」

アルフの制止もろくに聞かず、私はジュエルシードを掴み取る。

するとジュエルシードから強い光が放たれ、魔力が唸りをあげだした。

暴走する魔力を上から抑えつける様に、私は魔力を放出していく。

「くじゅっ……」

その場に座り込み、魔法陣を展開させる。

このままじゃ次元震が発生してこの世界が滅びてしまう。

何とか強引にでも封印しないと!!

「止まれ……っ!!」

全く収まる気配の無い魔力の奔流に、私は顔を顰めながら声を出してしまっ。

でも、私の力を飲み込むように光が激しさを増してほとばしる魔力が私に牙を剥く。

「止まれ……止まれ!」

私のバリアジャケットの手袋が破れて血が吹き出る。

痛みで手を離しそうになったけど、我慢しながら封印作業を続けていく。

「ぐっ……っ……あ!」

でも……ついに手が離れて、ジュエルシードの魔力が再び活性化する。

私はジュエルシードから無尽蔵に溢れる魔力波に当てられてその場から動けなかった。

「フェイト!?しっかりして!!」

「フェイトちゃん!!」

私の使い魔であり、大切な存在でもあるアルフとジュエルシードを争奪している白い魔導師の子……高町なのはが悲鳴を上げていた。

目の前にあるジュエルシードの力は増大し、もはや封印は不可能

だ。

この至近距離にいれば私は確実に次元震に巻き込まれてしまう。

「……………ッ…!!」

痛む手を庇いながらジュエルシールドから放たれる魔力波に耐えようと体に力を入れる。

……………ごめんなさい…お母さん…

「フェイトオオoooooooooooo!!!」

だけど、アルフの悲痛な叫びが響いた瞬間……

「イエエーハーハー!!!」

自分と同年くらい歳の少年が、異形の巨人を連れて私とジュエルシールドの間に割り込んだ。

「……………えっ」

正しく気の抜けた声が出てしまう。

いきなり現れた少年は私の方を見向きもせず、ジュエルシールドを指さして巨人に命令を下していた。

『『クレイジーダイヤモンド』!!!』

『『ニャーニャー』』

ドガア!!

少年の声に呼応した巨人はその野太い腕からは考えられない速度でジュエルシードを殴りつけた。

その音を聞いてハッと意識を戻した私は少年に呼びかける。

ジュエルシードは殴っても、物理的な衝撃を与えても意味は無いッ

!!

このままじゃ彼も巻き込まれてしまうッ!!

「だ、ダメ!!逃げt……」

でも……私が逃げるように声を掛けようとしたら……

「その石を、『封印されていた状態まで治して戻す』!!」

キュウイイイン!!!……カラン……「ロ……

目の前で『奇妙な奇跡』が起きた。

「て……」

巨人が殴ったジュエルシードは少年の声と共に封印状態まで戻っていた。

さつきまで暴れていた筈の魔力の流れも完全に止まっている。

いきなりの事態に私は呆然としてしまった。

私だけじゃなくて、離れたところにいるアルフと白い女の子もポカンとしてる。

……え?何が起こったの?

「……ハッ!? フェイト!? フェイトオ!!!」

アルフが駆け寄ってきて抱きしめてくれる。
手が痛いけど我慢しなきゃ……

「ああ!! 手がこんなに……」

私のを広げてみてアルフが涙を零した。

アルフは私と精神リンクで繋がっているから、私の痛みも辛さも伝わっちゃう。

……ゴメンね、アルフ。

私は心の中でアルフに謝罪しながら、アルフを安心させようと無理に笑顔を見せる。

「大丈夫……これ、ぐらいなら……時間がたてば……」

「いやいやいや、大丈夫じゃねーですよそれ?」

でも、私がアルフに心配しないでと言おうとしたら、さっきの男の子が巨人を引き連れて私とアルフの傍に歩んできた。

彼の傍に立つ巨人は……只、何も言わずに彼に付き従っていた。

何も語らない巨人の顔はハート型の甲冑みたいな鎧に覆われていて、背中には頭に向けてパイプがたくさん通ってる。

それだけでも、この巨人が人間や使い魔とは違う存在なのは分かった。

しかも……その巨人の向こう側は少々透けて景色が見えている。今まで見たことも無い不思議な存在だった。

凄い威圧感がある見た目だけど……甲冑の隙間から見える目には……私には、凄く『優しい』光が灯っていた様な気がした。

……私を助けてくれたんだよね？……お、お礼を言わなきゃ……
ってああ!? アルフ!? 威嚇しちゃ駄目だよ!!
私の使い魔のアルフは歯を剥き出しにして彼を睨んでる。
確かに、行き成り現われただけじゃなく、暴走状態のジュエルシードを只殴っただけで封じてしまった少年だ。
アルフが威嚇するのも分かるけど、私を助けてくれた恩人というのも事実。

私は、彼を警戒するよりもお礼を言わなくちゃいけない。

「……フェイトを助けてくれたのは感謝してるけどさ……何か用かい!?」

でも、私が止める前に、アルフは威嚇するように少年に叫んでしまった。

「いやさ、とりあえずこれをどーぞ(ぽいつ)」

だが、彼はアルフの威嚇を気にした様子も無く、軽い感じで右手に持っていたジュエルシードを放ってくる。

「あ、あわわわわわ!!」

アルフが何とか取ってくれたけど、私は手を怪我してるから動けなかった。

い、今の内にお礼を言わなきゃ!!

「あ、あの!! ありがとう(じゅ)れいま……」

「ああ〜ちょい待ち?」

でも、お礼を言おうとしたら遮られてしまった。

何だろっ？

「ほれっ『クレイジーダイヤモンド』」

困惑している私を他所に、彼の声を受けたさっきの巨人が私の頭に手を触れようと手を伸ばしてくる。

突然のことでビックリしたけど触られた感じは嫌なものじゃなくて……何故か、とっても暖かいものだった。

すると突然、私の手のひらの怪我が治っていく。

しかも、手のひらだけじゃなく、体の他の傷も一緒に消えていった。呆然としていてもその現象は止まらなく、体の調子までも良くなっってしまった。

……これはッ!?

「フ、フェイト!? 手の怪我が!」

アルフが驚いているけど私にもワケがわからない。

困惑している私達をよそに、目の前の男の子は一仕事やり遂げた顔で額の汗を拭う仕草をしていた。

「うっし、人助け完了ってな。戻れ『クレイジーダイヤモンド』」

『……………(スウウッ)』

そして彼の言葉を受けた巨人……『くれいじーだいやもんど』と呼ばれた巨人は、彼の身体の中に吸い込まれる様にその存在が掻き消えてしまった。

「……………あなたは一体？」

好奇心なのか、警戒心だったのかは判らない。

気づいたら、私は目の前に居る奇妙な少年に質問していた。

「あ？俺か？……あゝ俺は通りすがりの『スタンド使い』さ」

彼の口から語られたのは、私達が知っている魔導師という言葉では無かった。

それこそ聞いた事も無い単語だった。

スタ……ン……ド？……何だろう？聞いたこと無い……レアスキルなのかな？

でも、彼からは全然魔力を感じないし……魔導師じゃない？

「まあ、無茶も程ほどにしとけよお？そこにゃ、お前さんをすんごく心配してくれる奴がいるんだからよ……そんじゃあな」

私が彼の力について首を捻っていると彼はいたずらを咎めるような軽い感じで私に注意してくれた。

彼はそれだけ答えてアルフの方を指差すと背を向けてビルの端へ向かっていく。

彼の背中だけしか見えなくなり、私は突然、胸が苦しくなった。

……もう会えないのかな？……なんで私を助けてくれたの？

さっきの力は何なの？……もっと……彼のことを知りたい。

どんな人なのか知りたい。

今まで感じたことのないそんな感情が私に渦巻いてくる……会えないなんて……嫌だ、そんなの……

……そう思っていたら……

「……名前」

「んあ？」

私の弦きが聞こえた彼は不思議そうな顔で振り返ってくる。

「な、名前を!!……教えてください!!私はフェイト!!フェイト・テスト
ロツサです!!」

いつの間にか、私の口は動いていた。

私の声に男の子は驚いた顔をしたけど直ぐにニカッと笑って答えてくれた。

「俺は橘禪!!スタンドの名は『クレイジーダイヤモンド』だ!!」

.....

ん?なにやらフェイトさんの顔が赤いですね?……フラグったか?

いや、そんなわけ無いさ、hahaha落ち着けい!!橘禪!!c o o
1になれ!!c o o 1になれ!!(大事なことなので二回ry)
確かに馴染めてるがそんな簡単にフラグ立ったらニコポ、ナデポは
いらんだろつ。

「まあ、アレが何かは知らんが、あんまり無茶すんなよ?」

俺は状況が良く分からない様な喋り方で謎だらけの美少女、フェイトに注意する。

とりあえず、ここは知らないフリをして切り抜けよう。

「は、はい」

「アンタ、フェイトを助けてくれてありがとうね!!」

と横から犬耳と尻尾を生やした美女、アルフが笑顔で話しかけてくる。

さっきまでは警戒心MAXだったのにな……怪我、治したのが良かったのかねえ？

まあでも友好的になってくれて良かったぜ。

俺はアルフの言葉に手をヒラヒラと振りながら言葉を紡ぐ。

「なあ〜に、成り行きで助けたようなもんだから気にしないでくれよ、オネーサン。それと俺んことは禅でいいぜ?」

「あいよ、よろしくねゼン! アタシはアルフってんだツ!! 呼び捨てで呼んでくれていいよツ!!」

俺の言葉に更に気を良くしたのか、アルフから呼び捨ての許可を頂いてしまった。

むふ、こんな美女の名前と申し出なら喜んで受けちゃうぜ。

と和気藹々に話したらフェイトもスツ飛んできた。

……今、魔法使ってませんか? フェイトさんや?

こっからさっきフェイトが居た場所までそこそこ距離が開いてたんですけど?

「じ、じゃあ!! 私も……フ、フェイトって呼んでください!!」

彼女、フェイトは恥ずかしいのか俯きそつな感じでそう言ってきた。

何が「じゃあ」なのか毛頭わかりませんが……まあ呼んでいいって言うってんだから呼ばせてもらうか。

「アイアイ、よろしくなフェイト。俺も禅でいいからよ」

「う、うん……よろしくね……ゼ、ゼン…」

……顔真っ赤にして上目遣いでどもるとか可愛いよ、ぬk……フェイト可愛いよ

まあ、とりあえずフェイトも助けられたことだし良かった……あれ？結構長い事ここに居たけど……今思えば門限やばくね？

焦りそうなテンションを抑えて、ちらりと時計に目をやれば……。さあ〜て……お袋がブチ切れる前に帰りますか(汗)

「ん、んじゃあ……またどこかでな!!」

急いで帰らねばならないので俺はそう言って二人に手を振る。

正直な話しました会つかもわからねえし、縁があればって感じだけだな。

「ああ!!またね!!」

「う、うん……ゼン。ま、またね」

アルフは豪快に、フェイトはチョコンと手を振って飛び去った……よし、俺も……

「あ、あのお〜〜?」

……あ……

フェイト達が飛び去ったのを確認した俺は、家の門限に間に合う様に『クレイジーダイヤモンド』を使って帰ろうとしたんだが……視線

をちよいと横に向けるとあら不思議。

魔砲少女（笑）高町なのはさんのおでましですたい……肩にフェレットのユーノ君装備で。

確かこの子ってアレだよな？

とんでもなくこんぶとなビーム撃ちながら「リリカルマジ狩る」してる子だよ……。

「あれ？なんか馬鹿にされた気がするの……ちょっといいですか？」

魔砲少女（笑）は妙に光の無い目で槍の様な杖を俺に向けてくる。

……悪意は無いんだろうけど、無自覚でその杖こちらに向けんのやめてくださいませんか？

勘が鋭すぎですたいお嬢はん。

俺は心中を悟られてんじゃないだろうかという不安を押し殺して、目の前のハイライトが消えたのはに向き直る。

「……え〜と、なんでせつっ？」

「ちよ〜っとお話したいんですけど……」

……まずうい!!物凄くまずういぞ!!このままじゃ面倒事に巻き込まれる。

確かなのはもジュエルシードを集めていたはずだ。

俺がさつき『クレイジーダイヤモンド』でジュエルシードを治したのを見ていたんだし……ヘタすれば手伝わされるかも知れねえ。

今回は後味悪かったから助けにはいったけど、さすがにそれだきや勘弁だ!!

確かアニメじゃ夜中でも探してたし……夜更かしはお肌の天敵なのよ。

「あ〜……そいつは断るぜい、スベイベー？」

バ、馬鹿な!!?このパワー!!ク、クレイジーダイヤモンドを越えてや
が……る……
そこで俺の一日は終了しますた。

ちくせう。

1

第2話 招待すつからしかと喰え!!

あの萌えるフェイトと魔砲少女(笑)高町なのはとの遭遇から3日

...

今日は土曜日!!学校は休 みだ!!

しかし家の両親は平日と同じ時間に起きないと飯を片付けちまうんで、俺は7時にはいつも起床してるんだわ。

いつもどおり寝巻きの甚平のまま階段を降り、歯を磨いて顔を洗いいりびングに行き、先に起きてる両親に挨拶をする。

「親父、お袋、おはよー」

「おお、禅、おはよう」

わが父『橘信吾(たちばな・しんご)』はコーヒー片手にテーブルに広げた新聞を見ながら挨拶をしてくる。

…外見は第3部のジョセフ・ジョースターの髪と髭を黒くし、少々若返らせた感じ……最初見たときはえれえビックリしたもんだ。

仕事は家の近くで自動車とバイクの整備工場兼カスタムショップをやってる。

整備だけでなく、若者向けのカスタムやペイントも行っているので客層は幅広いし、従業員の兄ちゃんやおっちゃん達も優しい人ばかりだから俺はよく遊びに行ってる。

店の従業員についてはまた後日にも話すとしよう。

今は朝飯が大事なんでね。

「おはよう。朝ごはん、もつすぐできるからね」

フライパン片手に返事してくれんのは3日前に俺を再起不能にした母上様『橘香苗(たちばな・かなえ)』。

黒い髪をまつすぐ伸ばした大和撫子の代表格みたいなお人だ。仕事は専業主婦だが、時々親父の工場の事務仕事なんかも手伝っている。

普段は優しくして自慢のお袋なんだが……。

食べ物で粗末にすると(3日前のマロニーちゃん置き去り事件)某凶戦士の如く暴れる橘家の最終兵器でもある……ディ・モールト(非常に)パワフルなお人だ。

い、いかん!!あのときは忘れよう…思い出すと、未だに体の震えがとまりませんや…。

親父は席についてガクブルしている俺を見て同情の視線を送ってくる……親父エ…。

ま、まあ概ね、これがうちの橘家の朝の風景ですわ。

後一人、親父の父親『橘茂(たちはな・しげる)』って俺からすりゃ爺ちゃんがいるんだけど爺ちゃんはなぜか一人で暮らしてる。

親父とは不仲ってわけじゃねえけども一人の方が性に合ってるらしい。

定年を迎えた今でも仕事をしてる……というか、自動車、バイクなんかの解体屋の社長様だ。

爺ちゃんについてもまた今度にしますか……。

席について、お袋が作ってくれた朝飯を食っていると親父が声を掛けてきた。

「禅、前もって言うておいたが、今日は父さんと母さんは仕事で帰れないから明日の昼までは一人だぞ?」

今日は二人とも仕事を立て込んでおり、仕事先に一泊するそつだ。

「うう…ったことは時たまにあるので俺は慣れっこだ。」

「りよ〜か〜い。」

「…まあお前に心配はいらんか…」

「ふふふ、禅は私たちの息子ですもの。大丈夫ですよ…もしなにかあってもお義父さんがいらっしやいますし……」

「ふふ、そうだな。禅のしっかりしたところは君の血を引いてるからだろうな」

「もつ、あなたったら」

……あるえ？

いつの間にか、俺の心配から両親のイチャコラ 時間タイムに早代わり…
いつまでも新婚さんかい。

なぜか、バターとチーズのトーストが甘く感じたのです……。

……

「よしっやりますか」

両親が出勤した後、俺は5歳から日課にしているある訓練のために、家の倉庫にきている。

まあ何の訓練かというところ……

「コオオオオオ……オーバードライヴ波紋疾走!!!」

呼吸を整えて出した掛け声を合図に身体に巡るエネルギーを集めるようイメージすると、俺の右手に青ターコイズブルー緑に揺らめく『波紋』が表れた。

そう!!あ・の波紋です!!

実は5歳の誕生日に神から手紙がきたんだわ。

それで内容は『クレイジーダイヤモンド』だけじゃ特典としては少ないらしく、ちょっと改良した波紋の修行法を頭にいれてくれたんで修行をし始めたんですわ。

んで、波紋の何が改良されたかということ、波紋を流した物質を空中で固定できるようになっていた。

これを使えば空中闊歩ができるのさ!!

飛ぶ手段がない俺としては非常にありがたいこつて……。

俺自身、リリカルなのはは無印の途中までしか知らないため、これからの備えに波紋を覚えるのは大事だと思い、毎日訓練はかささず行っているわけですよ。

……まあ、その知識も3日前で終わっちゃったけどね。

俺はそのまま出せる一通りの波紋を使い分けつつ持続力を上げる特訓を中心的に行いながら、お昼の時間まで過ごした。

.....

日課の訓練を終えて、今は散歩中です!!

今日は天気もいいので、サンドイッチを作ってある神社を目指す。
長い長い階段を登り終えるとそこには……

「くおん」

すすきん……じゃなくて狐がいます。はい。

「よぉ〜久遠。今日も一緒に食うか？」

「くおん」

尻尾をパタパタと振るこのチャーミングで可愛らしくそれでいて愛らしい狐の名前は久遠。

神社に住み着く狐だ。

この神社の巫女さんである神咲那美さんが飼い主で、とても愛嬌ある俺の癒しマスコットのような奴である。

前に一度おすそ分けでサンドイッチ（パンとタマゴがミックスされて、甘い）をやったら懐かれたんだが………餌付けじゃね？

まあそんな感じで、学校が休みの時には大体ここに寄って一緒にパンやらおにぎりをパクついてる仲さ。

「今日はチーズとトマトを挟んだサンドイッチだぜい!!」

「くう〜」

飛び跳ねてパンを待つ久遠の前にパンを置いてやる。

そうすると、久遠はせっせと食べ出したので、俺も一緒に石段に座ってサンドイッチにパクつく。

食欲を満たしきって食べ終えたら、俺は何時もの様に久遠を膝の上に乗せて撫でてやる。

俺の撫でを受け入れてとても気持ちよさそうにお腹を向けて寝っ転がっている可愛すぎる久遠。

水筒に入れた紅茶を飲んで、木の葉のせせらぎをBGMに久遠を愛でる。

…ああ…実に優雅なひと時だぜえ……。

「きもちいいなあ〜久遠……………」

「くう〜ん」

俺に腹を撫でられてぐったりとしながら甘える様な声を出す久遠に俺は笑顔が自然と出てきた。

そしてそのまま夕食の買い物をする時間まで、俺はしばらく久遠と戯れていた……。

キング・クリムゾン!!

そして夕方、神社を後にして夕食の買い物にスーパーに来たんだが、なにやら見覚えのある金髪の子を見つけましたとです。

はい……………どう見てもフェイトさんです。本当にありが(ry
んん!!さて…偶然を装って(いや、本当に偶然なんだけど)声を掛けますか。

俺は手でメガホンの形を作って買い物籠を持ってウロウロしているフェイトに呼び掛ける。

「お〜い!!フェイト……」

だが、俺の声は途中から小さくなり、最後は呆然とした感じになっ
ちまった。

え？

おかしいな？僕の目が悪くなったのかな？

(; .)

(;) ヽ ヽ ヽ ヽ

(; .) (; .) (; .) (; .)

(;) ヽ ヽ ヽ ヽ ヽ ヽ ヽ ヽ ヽ ヽ ヽ ヽ ヽ ヽ

(;)

(;) (;) !!

目、目があー!! ツじゃなくて!!

み、見間違いじゃネエ!! 何度見ても、どう見てもあれは!!

フェイトの持つ籠には、大量の黄色くて四角い箱が.....
どう見てもキャロリーメイトです。本当にありがとうございます。

.....あれが食事か？あれが？.....許せネエなあ。

そんなことを考えてると、俺の声に気づいたらしいフェイトが驚き
と嬉しさが混じった顔でこっちに来る。

「ゼン!! こんちち」

ガッ!!

俺はフェイトに近づき、無言で両肩を握って正面から見つめる。
それこそ劇画並の真剣さを持って。

「えッ!? ゼ、ゼン?」

フェイトは突然掴みかかった俺の行動に頬を染めて驚いているが、俺から目を離さないでいた。

「……………フェイト」

俺はかなり、近年まれに見る程の真剣な顔でフェイトを真正面から見つめる。

「ゼ、ゼン? ……あ、あの……………はっ」

フェイトはフルフルと震えながらもゆっくりと目を瞑っていった。
そして、そんなフェイトに俺はゆっくりと顔を近づけて……………。

「それ、全部戻して来い」

スタープラチナ・ザ・ワールド!! 時間は止まる!!

「……………ふえ？」

なんか呆けた声を出してるが、そんなことは知ったこっちゃござい
ません。

「今すぐ、早急に、可及的速やかに、その籠の中身を戻してきなさい。
どう〜ゆ〜あんだすたん？」

「で、でもこれは晩ごはん……………」

「いいから戻して来おい!! hurry!! hurry!! hurry!! hurry!!
!!!」

「ひゃ、ひゃい!!」

「プーン!!」

とでも擬音が出るような速度でフェイトはキャロリーメイトを戻
しにいった。

あんなものを食ってばかりじゃ体壊す!! いや、料理好きとして黙っ
ちゃあいらねえぜ!!

そんで、キャロリーメイトを戻してきたフェイトと合流して晩飯の
材料を3人分買って外に出る。

さて、仲間外れは可哀想だし……………。

俺は今だに呆然としたワケが判らないといった表情のフェイトに振り返る。

「おーい、フェイト。ちょっとアルフを呼んでくれい」

「……え？アルフを？」

「そ。今日はお前とアルフには家で飯を食っていつてもらっから」

俺はフェイトに軽い調子で晩御飯の招待をした。

今日は親父達もいねえし別にいいだろ。

俺の言葉に暫く首を傾げてキョトンとしてたけど……。

「え？え!?ええええー!」

少しして理解してくれたのが、ワタワタと慌て始めた。

フェイトを無視してそのまま引っ張って家までの道を歩いていたら……。

「フェイトッ!どうしたんだい!?なにかあっ……ってゼンじゃないか!」

結構な速度で走ってきたアルフと合流した。

そおいや、念話つてのがあるんだっけ？

とりあえず、気づいてないから偶然ってことでいいか。

「よお、アルフ。元気そつだな」

「え?……あ、ああ……元気だけど?……どうしたんだい?フェイトを引っ張ってさ?」

俺が余りにも普通に挨拶するもんで、アルフは生返事しかできなかったみてえだ。

「いやな？ フェイトが晩飯って言うてカロリーメイトを大量に買ってるのが許せ無くてな……代わりに俺が夕食を作ってやるうと思っただ。そんで、仲間外れは悪いと思ってアルフを呼んでもらおうと思っただらちようど今アルフとあったってわけよ」

「あっそうなのかい？ いや〜そいつはありがたいね……え？ ……今、俺が……アンタ、料理できんのかいッ!？」

なんか、アルフはびっくらこいたって感じでオーバリアクションに驚いてる。

ちよいちよい失礼な。

見た目で判断してもらっちゃあ困りますぜ？

「まあな。「これでもソコソコのモンは作れるぜ」」

「ふ〜ん……でも、本当にありがたいよ!! フェイトってば栄養食品ばっか食べてるからアタシも心配で……」

「ア、アルフッ!? そ、そんなこと言わなくても……あっ……」

フェイトは恥ずかしかったのが、アルフの言葉で顔を俯かせちまってる。

それがほっとけなかった俺は俯いてるフェイトの頭をなるべく優しく撫でながら話しかける。

「そいつぁいかな……今日は美味いもん作ってやっからよ、楽しみにしときなっ?」

ううゝむ……サラッサラの金髪がとても触り心地いいぜえ…なんか特別なシャンプーでも使ってるのかね？

「う、うん……ありがとう……ぜ」

「よおしー！そんなじゃ、行くつかッ！いやゝ楽しみだねえー！」

盛り上がっているアルフと若干頬が赤いフェイトを連れて俺は帰宅した。

……………

ジューツジューツ

どろじょうもなくて食欲を掻き立てるバターとケチャップの香りが換気扇では収まらずにリビングまで流れていく。

「……………「くろっ……ぜ、ぜーん!!ま、まだなのかい!?もう我慢できないよー……」」

漂ってくる匂いに我慢の限界に近づいたのか、テーブル席に座りながらアルフは喉を鳴らして催促してくる。

ちなみにこの催促は五回目でいい。

「ア、アルフ？少し落ち着いて……」

「でもさ、フェイト!!アタシは狼が素体なんだよ!鼻が良く効く分、こんなイイ匂いがしちゃ……もう我慢の限界だよーッ!!」

「ダー!!もっ少し待ってな!!すぐ持ってくからよ!!」

今、ラストの仕上げで卵巻いてんだからよ。

これ、結構神経使うのよ。

「はやくはやくー!!」

どんだけ我慢がきかねんだよ。 ったく…

……現在我が家のリビングには、アルフとフェイトが座っている。俺が調理している最初の内に、アルフからキッチン越しに二人がどういう人物か話を聞いていた。

一応アニメは見たが、3日前に会ったときは名前しか言われてなかったので一応聞いておく事にしたわけだ。

アルフが語ったのは、アルフがフェイトの使い魔ということ、狼が素体ということ、そしてフェイトがとても強い魔導師ということだけだ。

なんでジュエルシードを集めてるかはフェイトもアルフも話しちゃくれなかった。

恐らく込み入った事情があるんだろう。

……アルフが寝めちぎってる時はフェイトの顔が恥ずかしさで、真っ赤だったがな。

だが、今じゃアルフはキッチンから漂う匂いに我慢できないのか、ヨダレがこれでもかとお出ている。

フェイトも落ち着かないのかソワソワ、キョロキョロとリビングを見渡していた。

そんなに他の家が珍しいのかね？

「さあ!!」旨味あれ!!

「うまつ!!うまつ!!うんまあ〜いッ!!!」

「ア、アルフ!!卵がすくく伸びるよオ!?!とってもおいしい!!」

アルフは満面の笑みでオムライスにがつついていく。

ちゃんとサラダも食べてるので嬉しい限りだ。

一方のフェイトは伸びる卵に驚きながらも、顔は綻んでる。ケケケ、隠し玉のチーズが効いてるな。

「へっへっへそうかそうか。まだまだあるからガッツリ喰え!!遠慮すんなよあ!!」

ガツガツガツガツ!!

はむっ、もきゅもきゅもきゅもきゅもきゅ

どっちの音がわかりやすいのお……

二人共、俺の料理を気に入ってくれたようだ。

よきかな、よきかな。

俺は、いや俺達はそのまます人で賑やかな晩飯を堪能して、今日の疲れを癒す。

.....

「今日はありがとね!!ゼン!!とってもうまかったよ!!」

「うん。本当にありがとっ、ゼン」

暫くまったりした後二人は帰ると言うので、俺は玄関まで見送りにきていた。

二人の顔はとてもニッコリとしている。

うんうん、自分の作った料理で誰かの笑顔が生まれるってのは良いモンだな。

「なに、気にすんなや。俺としても自分の料理を「美味しい」っていつてもらえんのは嬉しいからよ」

「ううん。それでもありがとっね……今日の飯は本当に美味しかったから……」

「そうだよ!!フェイトも久しぶりにちゃんとご飯食べてくれたし、ゼンには本当に感謝してるよ!!」

フェイトもアルフも本当に嬉しそうな顔で俺に礼を言ってくれる。

…なんか…こっ、正面きって礼を言われっ…ケツがムズムズするぜ。

「おっーありがとよー…そういやあ、二人はどこに住んでんだ？」

恥ずかしさから逃げる為に軽く話題を逸らして聞いてみると、二人が住んでるのはすぐ近くのマンションだった。

…よし、後は親父達に許可をもらってからだな…

「まあ、また来いやー今度はケーキでも作ってやっからよー」

「ホ、ホントかい!? ……また来ようよ、フェイトー!」

「え!? で、でも迷惑になっちゃうよ……!」

フェイトは俺をチラチラと見ながら戸惑っている。

遠慮しなくていいんだがなあ……

「別に迷惑だとか思わなくていいぜ? 俺が二人に食って欲しいだけなんだからよ」

「ほら!! ゼンもこう言ってるんだし!!」

アルフの押し強さと俺の援護もあってか、フェイトは戸惑いながらも頷いてくれた。

「……う、うん……じゃあ、ま、またね? ゼン」

「まったねー!! ゼン!! 次も楽しみにしてるよ!!」

おkおk、次もまた旨いモン作ってやんよ。

「ああ、いつでも来な!」

手を振りながら二人はマンションに帰っていった。

二人を見送った俺は片付けをして、やることもないので明日に備えて寝ることにした。

部屋に戻り、愛用の甚平を着て、布団に入る。

手元のリモコンでコンポの電源を入れ、近所迷惑にならない程度の音量で癒し系の曲を流す。

これで寝る準備は万端だ。

第3話くたこ焼きがない!?かわりに竜巻て・・・H

U・ZA・KE・N・NA

フエイト達が家に食事に来てから数日、あれからはめつきりと会わなくなつた俺はいつも通りの日常を過ごしています。

とりあえず、ちゃんと飯食ってるか心配です……が、たまにマンションを訪ねてもタイミングが悪いのか、全然会えねえんだよなあ。

まあそんな感じで会えないなら会えないで仕方ないと思い、俺は普通の生活をエンジョイしまくってたんだ。

今日も今日とていつもの様に家で波紋の練習をしてたんだが、またもやお袋に買出しを頼まれて現在買い物袋片手に帰宅中。

そう、帰宅してたんだ。

が、ふと海沿いの公園にたまに来ていた屋台のTA・KO・YA・KIが食べなくなつてしまったので俺は進路を海側公園に向けた。

これが中々リーズナブルで味も良いと評判が高いんだよ。

極めつけは焼いてる店主がおっさんとかじゃなく別嬪なお姉さま、性格が姉御肌ってんで人気のお店でもある(男性客の大半は彼女狙い)

「うう〜ん…あの外はカリッと中はトロ〜リな生地は何使ってたんだろう？」

ちなみに俺が急に行こうとしたのは、あの生地の材料さえ判れば家でもおいしいTA・KO・YA・KIを作れるという考えが浮かんできたのが真相だったりする。

俺は味の探求と、生地の特秘解明をするのに、wktkしながら胸を躍らせて公園に着いたんだが……。

「来てない……………だと？」

公園にはいつも鉢巻を巻いて仁王立ちしているお姉さんがいなかった。

周りを見渡しても、何時もだらしのない顔でたこ焼きを頬張ってるオッサンも、人っ子一人いない。

恐らく今日は休みなのか、もしくは別の場所に行っちゃまったんだろ
う。

なんせ色々な場所に現われる神出鬼没な屋台だし。

「oh〜ジーザス!!……しゃあねえ、帰んべ」

屋台が無い以上ここにいても仕方ないので無駄足を踏んだことに
落ち込みながら公園の出口へ踵を返すと……。

海側からどでかい竜巻が7本上がっていたが、俺は何だ竜巻か、と
何時もの如くスルーしていく。

まあ、海鳴ではよくある事なので気にしな……い? ……TA・TU・

MA・KII・?

え?

「はあああああ!!!!?」

俺はもう一度海側に目を向けて、普通にシャウトしてしまった。

な、なんだありゃ!?まさか原作イベントか!?

いくらなんでも自然現象の竜巻って言葉で片付けるにや無理がありすぎる大きさだ。

しかも7本同時なんて絶対にあり得んツ!!

「と、とにかく確認してみねえとツ!!『クレイジーダイヤモンド』ツ!!」

俺は急いで『クレイジーダイヤモンド』を呼び出し、視力を拡大しながら共有して竜巻の様子を見てみる。

『クレイジーダイヤモンド』の目は双眼鏡の倍率の比じゃねえから数キロ先だろうがクツキリハツキリと見える。

カチツカチツカチツ

大体ではあるが感覚的に視力を3倍くらいまで上げると、竜巻の周辺がはつきり見えてきた。

いや……見えてきたのはいいんだけどよ。

「……何じゃありゃあ……」

拡大した先に見えた光景に固まるしかなかったです。はい。

そこには襲い来る竜巻に弄ばれているフェイトがいた。

アルフもいるがアルフも同じ様に襲いかかってくる竜巻に吹き飛ばされている。

系？（二度目）

「…………fuck!! あんなモンに一人で喧嘩売る奴があるか!!」

二人の余りの無謀さに思わず悪態が出てきちゃった。

竜巻は二人の力を上回ってるようで、フェイトもアルフも完全に良いように弄ばれていた。

しかし、そこに新たな影が2つほど来て二人に合流してきたではないか。

1人は初めて見る茶色の民族衣装を着た少年、そしてもう1人は……アラヤだ、魔砲少女（笑）だ。

増援みてえだが、彼等もフェイト達と同じ様に梃子搦っている。あぁっ!? 民族衣装の少年が捕まった!? クソ!!

視界の先で戦っている4人の内、民族衣装の様な格好の少年が竜巻の中に引き込まれちゃった。

俺も向かいたいが、向こうは海の上……俺じゃあ飛べねえから逆に足手まといになっちゃう……「ここで指啜えて見るしかできねえのか？」

「畜生!! せめて『足場』に使えるモンがありゃ……ん？」

俺は辺りを見渡して何か使えるもんがねえか探してたんだが、ふと、自分の手元を見てみると……。

「……………」

「……………」

「じ、じれしかねえ!!」

灯台元暗しってのはこのことで俺が向こうに行く手段は他ならぬ俺の手元にあった。

俺は急いでスーパールの袋から『ソイツ』を取り出して片手に持ち、竜巻の踊る方角を睨む。

待ってるよ、フェイト！アルフ！今行くからなあ!!

「コオオオオオオ……波紋を練る!! いったちよ行くか!! 『クレイジードイヤモンド』!!」

体内で波紋を練り上げながら、俺は『クレイジードイヤモンド』の脚力で弾き飛んで海の向こうを目指す。

頼むから俺が行くまで持ち堪えてくれよ。

俺は心中で神様に祈りながら、向こうで戦ってる4人を助けに向かう。

.....

「邪魔を……するなあ!!」

アルフは襲いかかってくる水の戒めを壊してさっき現われた白い魔導師の子に攻撃しようとした。

白い魔導師の子はいきなり向かってきたアルフにオロオロしていたけど、彼女とアルフの間にもう1人の男の子が入ってシールドを張る。

そのまま男の子はシールドを張りながらアルフに向かって叫んだ。

「ち、違う!! 僕たちは戦いに来たんじゃない!! 早くジュエルシールドを

止めないと融合して手のつけられないことになる!!だから加勢に来たんだ!!」

「なっ!?!」

彼の言葉にアルフと私は少し混乱するが、竜巻は私達の事なんてお構い無しに、無防備なアルフに襲ってきた。

でも男の子はその言葉通り、アルフの後ろから迫っていた水の鞭を竜巻ごとチェーンバンドで縛ってアルフを守る。

その空いた空間を縫って白い魔導師の子が私の近くまで飛んできた。

「フェイトちゃん!手伝って!ジュエルシードを止めよう!」

彼女は困惑する私に構わずに、自分のデバイスをバルディッシュに向かい合わせて……。

『power charge』

『trasferencia completade』

彼女のデバイス……レイジングハートから桃色の魔力がバルディッシュを伝わって私に流れ込んでくる。

彼女は自分の魔力を、消耗した私に分けてくれたんだ。

「えへへ……2人できつちり半分!」

私と彼女は頷きあって竜巻を見据える。

飛び交っている水の鞭の隙を伺っていると男の子とアルフがバンドで竜巻と鞭を縛るのを手伝ってくれた。

「ユーノくとアルフさんが止めてくれている今のうちに!! 2人で
せーので一気に封印!!」

彼女はそう言って砲撃のチャージを始めた。

確かにあれは私1人の手には負えない……今だけでも協力しなく
ちゃ。

考えを纏めた私もバルディッシュに魔力を送り込んで、急いで砲撃
の準備に入る。

「ディバインバスター、フルパワー。いけるね?」

『a l l r i g h t ・ m y m a s t e r r』

ミチミチ……ブチイイイイツ!!!

「うあっ?」

「くうっ?」

でも、彼女と私が砲撃をしようと構えた瞬間、男の子とアルフのバ
インドが干切れてしまった。

二つのチェーンバインドの戒めが解けた竜巻は勢いを取り戻して
7本の竜巻すべてが一箇所に集まって行く。

集まって?……まさかッ!?

最悪の予感が頭を過ぎったが、その時にはもう遅すぎた。

「ああ?!」

「しまった!!」

戒めが解けた7つのジュエルシールドは、融合して巨大な竜巻になっ

てしまった。

竜巻はいくつもの水を纏った鞭を持ってうねっている。

再びユーノとアルフがバインドをしたがすぐに干切れてしまう……さっきよりも力が跳ね上がっている。

「このままじゃヤバイ!!」

「どうするさね!?!」

「い、急いで封印しなきゃ!!」

私の隣に居た彼女がレイジングハートを竜巻に向けると危険を感じたのか、水を纏った鞭が私たちを襲う。

私たちは全員バラバラに散って、捉えようとしてくる水の鞭から逃げるように飛び回る。

「う、これじゃあ、打てないよ!?!」

彼女が何とかしてデバイスを竜巻に向けようとしている傍で、男の子に向かって水の鞭が3本飛来した。

それを察知した男の子は3本の水の鞭に対して咄嗟にシールドを張って鞭を防ぐ。

「つく!? (パライイイインッ!!) うわあああ!?!」

しかし、あっけなくシールドが割れて、シールドが無くなった男の子は鞭に絡めとられて竜巻の中へ引き込まれていく。そのまま竜巻の中心部の中に捕らわれてしまった。

「ユーノくさ!?!」

魔導師の子が切迫した表情で男の子のもとに向かおうとした時、その隙について後ろから鞭が襲ってきた。

「あぶない!!」

「えっ!? きゃああああああ!!?」

私は叫んだけど、彼女は振り向いたと同時に鞭の直撃を受けて、さっきの男の子と同じ様に水の中に捕らわれてしまう。

「ごんのおおおお!!」

激昂したアルフが水の鞭に魔力を纏った拳をぶつけると、その衝撃で水は弾け、鞭は消えた。

「どんなもんだい!!」

アルフはそう言って竜巻から離れようとしたけど、海の中からまた水の鞭が現われてアルフの後ろから襲いかかる。

ダメ!! また来てる!!

「アルフ!! 後ろ!!」

私の声に反応したアルフだったけど、後ろから襲ってきた鞭には対応できずに捕らえられてしまう。

「うわああああ!!?」

アルフも水の中に取り込まれてしまった……私一人じゃどうすることもできない。

「くっ!!」のままじゃ!!……」

「失礼!時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ!」

すると、焦る私の前に執務官を名乗る管理局の男の子が現れた。

「あなたは……」

「事情は後だ!!あれを止めるぞ!!」

「でも、どうやって?……」

まるで嵐の様に水の鞭を振り回す竜巻に注意しながら私は彼に問い掛ける。

でも、彼は歯噛みする様に唸り声を上げるだけだった。

私達2人じゃ、有効な打開策は無いのは明白だ。

「……とりあえず彼女らを救い出す。力を貸してくれ!!」

管理局の男の子……クロノが私に頼んでくる。

確かに私達だけでは手に負えない。

まずは皆を助けないと!!

「うん。あれの封印は……あの子と一緒にじゃないとできない」

7つ分のジュエルシードのパワーには私一人では太刀打ちできない。

クロノと私は着かず離れずの距離を保ちながら、竜巻に向かって飛ぶ。

『フォトン・ランサー』

竜巻に向けて魔力弾を放つが竜巻はバリアを張って防いでしまう。
マズイ!? さっきよりもドンドン力が上がってる!!

「くっ、バリアを張れるのか!? だったら!!」

クロノが集中してたくさんの魔力刃を生み出す。

彼が魔力刃を生成している間、私は彼に迫る水の鞭をフォトンランサーで何とか迎撃していた。

急いで!!

「……ぶちぬけ!! スティンガーブレイド!!」

そして、彼の合図で大量に生み出された魔力刃が一斉に竜巻を攻撃した。

飛来した魔力刃のいくつかはバリアを貫いてなのはたちを捕えている水に届く。

だけど、ダメだ。

彼女達を救い出すにはパワーが足りず、傷を作った程度だった。

再生しない事だけが、この場で唯一の救いだった。

「くっ……ここまで強力とは!!」

『plasma smasher』

「プラズマ・スラッシャー!!」

私も砲撃を放ったけど、バリアで防がれてしまう。

私の砲撃でもそう簡単には突破できない!!

そして遂に砲撃を放った反動で動けない隙について鞭が私を襲ってきた。

「危ない!!」

咄嗟にクロノが私を庇ってシールドを張ってくれたけど、シールドは突破されクロノも捕まってしまった。

「あああ……」

あとは私しか残っていない……ひとりではどうにもできない……もう駄目だ……。

フェイトの心と戦意は折れかけ、その隙をついた鞭が獲物を捕らえんと飛来していく。

傍に味方が居ない状況に追い込まれたフェイトは……それをぼおつと見つめる事しかできなかった。

なぜかこの時フェイトの心には数日前に自分を助け、自分の怪我を治してくれた不思議な少年の事が浮かんできていた。

自分の食生活を心配して、暖かい、美味しいご飯を振舞ってくれた少年が……彼がまた助けしてくれるんじゃないか？

そんなありもしない都合の良い幻想が頭に……心に浮かんでくる。自分のピンチに颯爽と駆けつけるヒーローの様に……そんな小さな希望がフェイトの口を無意識に動かしていた。

「……………助けて……………ゼン……………」

だが、呟いた言葉に返事は無く水の鞭は無常にもフェイトに襲い掛かる……。

「ワインでやれないのが残念無念!!波紋カッター!!!」

ヒュイイイイイン!!!

スパパアツ!!!

だが当たるはずの鞭は突如響いた声と共に無数に切り裂かれ、海に落ちていった。

「……………え?」

目の前で起きた出来事に私は思考が着いてこなかった。

私に迫っていた無数の鞭はいきなり飛んできた青と緑が混ざった綺麗な光を纏う薄い円盤に切り落とされて力を失っていく。

……………一体誰があれを?

「……………やれやれ……………どうにか間に合ったぜい……………」

突然、私の後ろからほっとするような声が響いてくる。
その声の主を私は知っている。

でも、ここは海の上で彼は来れないはず。

有り得ないと思いつながら心も心の片隅で淡い期待を抱いて私はゆっくりと後ろを振り向く。

「……………ゼン？」

振り向いた先には……………彼がいた……………来てくれたんだ……………こんな海の上まで……………。

心に思い描いた彼が……………私のピンチに颯爽と駆けつけてくれる『ヒーロー』が……………。

すごく嬉しい気持ちとなんでという困惑の気持ちが混ざって心に溢れてくる。

なんて言葉をかけたらいいか解らなくて喋れないでいると彼のほうから声を掛けてくれた。

「よお、海水浴にしちゃあちと季節外れすぎねえか？ベイビー？」

そこには最初に会った時と同じ、獰猛な笑みを浮かべて巨人……………『クレイジーダイヤモンド』を従えたゼンが立っていた。

『キャブツ』を片手にもって……………え？

……………

ふうう!!焦った!!間に合ってよかったぜ!!

俺はお袋から頼まれた食材。『キャベツ』を持って安堵してる。

そう、ココまでのルートに『波紋を流し込んだキャベツ』を足場にして『クレイジーダイヤモンド』で飛びながら来たんだが着いてみるとフェイト以外は水の牢屋みてえなところに捕まっちゃってた。

一人だけ残ってたフェイトも水の鞭でやられそうだったので、咄嗟に『波紋』を流した『キャベツ』の葉を回転させ『クレイジーダイヤモンド』に投げさせて迎撃した。

超高速で回転し、波紋で強度を増したキャベツの葉はどっかのプレデターが使う手裏剣みてえな音を出しながら飛来。

水の鞭をたやすく切り裂いてそのまま明後日の方向に飛んでいった。

まあ、『クレイジーダイヤモンド』のパワーで投げたら、どんなモンでも殺人的な威力になるわな…そこに波紋の力も加わるし……『クレイジーダイヤモンド』さんパネエッス!!

「な、なんで……」

そんなことを考えていたらフェイトが戸惑い気味に話しかけてきた。

「いやいや、なんでも何もあるかよ。」

「ん?あっちの公園からフェイトが戦ってんの見えてな……危なそうだったから助けに来たぜい」

「わ、わたしのために?……来てくれたの?」

「んあ?友達があぶねえ目に遭ってたら普通助けんだろ?」

「えっ!?……………トモ……………ダチ……………?」

いくら平穩に暮らしたいつつつてもさすがにダチが危ねえ目に遭ってんのに見過ごすほど外道じゃございせんって。

だが、俺の言葉はフェイトからすりゃ予想外だったのか、驚いてるっつーか、困惑してるみてえだ。

「ほ、ほんと?……………私は……………あなたの……………ゼンの友達?」

フェイトは俯きながら、俺にか細い声で呟く様に聞いてきた。
なんでそんなに自信無さげに聞いてくんだよ?

「あ?当たり前だろおが!同じ釜の飯食ったらダチ!全世界の共通認識だぞ!!」

俺はしっかりと腹に力を込めてフェイトに堂々と答えた。
ここテストに出るからね〜しっかりノート取れよ〜。

俺は胸張っていえるぜ!!

お前は俺の大切な友達だと!!

「それとも、なんだ、その……………迷惑だったか?」

俺は頭を掻きながらそっぽを見てフェイトに聞き返す。

もしコレで「迷惑」なんて言われた日にゃ泣いちゃうぜ。

「ッ!?違っッ!!!迷惑なんかじゃないよ!!!」

だが、フェイトは声を張り上げて俺の言葉を否定してくれた。

そのままハツとした顔になったかと思うと恥ずかしそうに、上目遣いで俺を見てくる。

「ゼン…あ、ありが…とっ…助けに、来てくれて」

………フェイトは顔を赤らめ、最後は呟くように言った。
ちくせつ、可愛いぜ。

最初の大声にちとビビッたが、ダチと思われてんのはよかったぜ。

「へへっ!!いいってことよ!!それより、あいつら助けんぞ!!」

俺は水の牢屋みたいな中に入っているアルフ達を指差して言う。

正直、俺一人増えた所で戦況は不利なまんまだしな。

あいつ等もあん中において大丈夫なんて保証はどこにもねえ。

「でも……鞭がたくさんあって簡単には……」

フェイトの言うとおり、あいつ等が捕まってる水の牢屋の周りには水の鞭が侵入者を撃退せんとばかりに暴れまわってる。

さっきまで苦戦してたからフェイトは苦い顔をしてるな……まあやってみるしかねえだろ。

「とりあえず俺がブツ込むから、フェイトは俺に向かう鞭を打ち落としてくれ………キャベツも残り少ないし(ボソッ)」

段々と芯が見えてきております。

足場が無くなる前にケリつけねえと俺が季節外れの海水浴になっちまっぜ。

「うん、わかつt……?ゼン、最後が聞こえなかったんだけど?」

…あゝ不安にさせちまったか?

水の牢屋まで行く道中、狙ってきた鞭は手に持ったキャベツの葉に波紋を流して切り裂くかフェイトが悉く落としてくれているので問題なく進めた。

鞭をかくぐりながら牢屋に向かい到着して直ぐに、俺は波紋カッターで水を切り裂いて中の奴等を助け出す。

「おい!! テメエら大丈夫か!!」

水の中から四人を引っ張り出して声を掛ける。

最初は水を飲んだせいか、ゴホゴホと咽ていたけど、直ぐに俺の方に向き直ってきた。

「ゴホッ……き、君は?」

俺の声に反応した黒いマントを羽織った奴が聞き返してくる。

とりあえず説明は後回しにと言おうとしたら……

「じゃあ!? あのとぎの人なの!」

「な、なんで!」

訂正。一気に3人から話しかけられたッス。

そのままマシンガンの如く質問が出てくるじゃねえか。

「ダァー!! 質問多すぎだコノヤロオ共!! とにも角煮も一旦離れるぞ!!」

3人からいつぺんに聞かれても答えられるかポケエッ!!

俺は聖徳太子じゃねえっつのッ!!

「ゼン!! 助けに来てくれたのかい!」

しせ。

「とりあえず、さっさとあの化けモンぶっ潰すぞ!!」

「で、でもどしやっして!!」

魔砲少女（笑）が聞いてくるが、一応手はあるんだわ。

「俺があの水の鞭を引きつけちゃる。その際にお前らで封印してくれ」

「そ、そんな!? 1人じゃ無茶だよゼン!!」

「そっだよ!! だったら皆で!!」

アルフと民族衣装の子が止めてくる。

「いや、お前らは2人のサポートをしてくれ。さっきの鎖みたいなのやつで補助をしてやんな」

俺がフェイト達を引き合いに出してそう言うとなアルフは渋々だが引き下がってくれた。

「しかし1人では危険だ!? 僕も一緒に行こう!!」

だが、俺が竜巻に向かおうとすると黒いマントを羽織った奴がそう言うてきた。

確かにこいつがさっき使った攻撃は連携できるかもしれねえ……

「ニーチャン、あんた名前は?」

まずは第一歩。名前を聞きましょう。

「僕はクロノ。クロノ・ハラオウンだ」

クロノ、ね……第一印象は堅物そうな奴に見えるんだが……直感的なんだが、なんかコイツとはダチになれそうだな……

「OKクロノ、俺はゼンってんだ。とりあえず俺が鞭を迎撃スツから撃ち漏らしたやつを後ろから打ち落としておくれ。この二人の邪魔させんように」

フェイトと魔砲少女（笑）を指差してクロノに言う。

「だが君一人でできるのか？かなりの数だぞ？」

クロノの言いたい事はわかる。

まあこの場にいる奴等は『クレイジーダイヤモンド』のチートさが判らないんだしな。

「まあ、そこは任せるとしか言えねえ……だが、さっきもお前ら全員で掛かってダメだったんだから……一丁俺に賭けてみねえか？」

俺の言葉に全員が俯く。

さっきまでのことを思い出しているんだろう……いや、クロノは俯かず、顎に手をやって思索している。

「……………判った。その賭けに乗ろう」

皆ビクビクしてるが提案した俺も同じだった。

喋り方からして固そうなやつだと思っただが……

「正直、賭けは嫌いだけど、それも言ってられる状況じゃないしね……
それに、言い出したからには自信があるんだろっ?」

ニヤリと笑いながらクロノは挑発するように俺に言い放つ。

…ヤツベエ、コイツ良い性格してやがるぜ……俺も口が吊り上った
まづのが抑えらんねえ。

「GOOD!!ヤツパそこなくちゃなあ!!とりあえず、さっき言った
感じで行くぜ!!頼んだぜフェイト達!!」

俺とクロノは返事を聞かず、竜巻とフェイト達の間辺りまで跳ん
だ。

俺達が近寄ったのを感知したのか、水の鞭は一斉に俺達に向かって
襲ってきた。

それを確認した俺は、後ろで何か剣みてえなのを造ってるクロノに
ニヤリとした笑みを見せ付ける。

「んじゃ!!後ろは頼むぜえクロノ!!……来な!!『クレイジーダイヤモ
ンド』!!!」

俺は目の前に飛来する水の鞭をブツ飛ばしてえって気持ち爆発
させる。

すると周囲に低音が鳴り響き、『クレイジーダイヤモンド』が俺の背
後から姿を現した。

「なッ!!」

ケケケ!!クロノの奴驚いてら(笑)

そうこうしてる内に、竜巻から鞭が迫り来たのでそれを確認したク
ロノも武器を指揮する様に水の鞭に向かって構えた。

『クレイジーダイヤモンド』は拳を握り締めてファイティングポーズ

「うおおおいいいい!!?さっさと、やっちまええ!!」

「!!フェイトちゃん!!」

「(1)」

「いくよ!!」

魔砲少女(笑) とフェイトは頷きあつて竜巻にデバイスを向ける。
そのまま強い力が二人の周りを覆い、発射されるのを今か、今かと
待ち続けている。

「デイベイイイーン!」

「サンダアアアー!」

二人の掛け声に呼応して溜まっていた力がそれぞれのデバイスか
ら放たれる。

「バスタアアアー!」

「レイジイイイ!」

二人の馬鹿デケ工砲撃が竜巻に襲い掛かり着弾した瞬間、轟音と強
烈な光が鳴り響く。

そして光が収まると竜巻は消えてジュエルシード全てを封印して
いた。

封印し終わり竜巻も水の鞭も消えて海が穏やかになっていく。
海から光が立ち、ジュエルシードが出てくる。

そして魔砲少女(笑) がフェイトに向き合って話しかける。

「フェイトちゃん」

「うん？」

「私は……フェイトちゃんと、友達になりたいんだ」

魔砲少女（笑） はフェイトに真剣な眼差しを向けて自分の思いを言った。

フェイトはどう答えていいかわからないような顔をしてんなあ……仕方ねえ、少し後押ししてやっか……

だが、そんなことを考えてた時、俺の頭上の雲が光った。なんだ？ 一体……。

そして次の瞬間、フェイトに紫色の雷が降り注いできた。

「うわああああ!!」

「なッ!? フェイトオ!!」

「フェイトちゃん!?!」

「フェイトッ!!? くそッ!!」

雷の直撃を受けたフェイトは苦悶の声を上げた後、海に向かって落ちていく。

比較的傍に居た俺とアルフは海に落ちる寸前でフェイトを抱いて受け止める事に成功した。

くそ!! 何だかしらねえがフェイトがヤバイ!!

『クレイジーダイヤモンド』!!! 「ドギユウウン!!!」

フェイトの傷は治ったが、雷のショックで気絶している。

そして間髪入れずに二発目が来やがった!!

「くそつたれがあ!!!」

傍に居たアルフを弾き飛ばした俺はキャベツの葉を全部頭上にはら撒いて波紋を流す。

すると波紋を帯びたキャベツ同士が結合して俺とフェイトの上に円形に波紋が展開され、『盾』になった。

これは特訓で俺が身につけたオリジナル技だ。

「コオオオオオオ!!」スピンクグオーバードライヴ『回転波紋疾走』!!!!」

この波紋で作った盾は超高速で回転しているので、円に当たったモノを『受け流す』性質を持っている。

『スピンクグオーバードライヴ回転波紋疾走』にぶち当たった雷は明後日の方向に流れていった。

だが、俺の体の波紋を練る力はまだ全然成長していないので、今の俺の波紋の力が尽きて足元のキャベツも足場の力を失っちまった。

「フェイト!!ゼン!!」

海へ落ちて行く俺達にアルフが叫んでいたので俺は『クレイジーダイヤモンド』でフェイトを投げて渡す。

慌てて受け取ったアルフは直ぐに俺のほうにも来ようとするが……。

「俺の事なんざいい!!フェイトを!!」

そういわれたアルフは少し迷うってから、フェイトを抱えてジュエルシールドのもとに駆けていく。

しかしクロノがアルフの前に立ち、それを阻んだ。

ってそうか!? 確かフェイトはなのはとジュエルシールドを争奪して

……。

既に自由落下していく以外に何も出来なかった俺は、落ちながら空中の出来事を見守るしかなかった。

……あつ、そついや下つて海……。

……………

「邪魔だあ!!どけえええッ!!」

禅が目の前の事態を把握している間にアルフがクロノを殴り飛ばし、ジュエルシードの元に駆けていく。

だが、宙に浮遊しているジュエルシードは3つしかなかった。

何時の間にかクロノが4つのジュエルシードをすでに手中に収めていたからだ。

「ぐっ!!?……こんのおおお!!」

アルフが海に魔力弾を叩き込み、海を荒れさせた。

その巻き上がる並になのはたちが怯んでいる隙にアルフは撤退していく。

海の荒れが治まると、そこには誰もいなかった。

「……逃げられたか」

クロノは溜息が出そうになるのを我慢して、命令違反を起こしたなのは達に厳しい視線を送る。

その視線を受けてなのは達はバツが悪い顔を浮かべる。

とりあえず、話はアースラに帰ってからしよつと二人に声をかけよつと……

「ぎゃああああああああー！！？ほ、骨だけにボ
(ドッポーーーーーん!!!!)」

下でゼンが着水した音でクロノは慌てて海に降りていき、二人もそれ
れに続いた。

管理局とご対面？え？そのシュガーは何？

ぴちゃん

俺の服から雫が滴れ落ち、落ちた雫は鉄の床に水溜りを作っ
てい

く。
名も知らぬ清掃員の方、サーセン。

「……………」

「……………」

「え、ええっと……………大丈夫？」

お解りいただけるだろうか？

小学校ではプールの緊急避難訓練で、衣服を着用したまま泳ぐ授業がある。

当初は水着ではなく、衣服を着たまま泳ぐという未知なる体験にWTKKしていたが、いざ水から上がると服がピッタリと張りつく気持ち悪さ。

そして水を吸った服の重みで自由に動けない疲労感に気だるさが襲いかかってくる。

それが今、ワタクシこと、橘禅が体感している現状だ。

クロノと民族衣装の子は同情の視線でこちらを見て、魔砲少女(笑)は心配してくれている。

優しい言葉に涙が出そうですたい。

……………あの後、海から俺を引っ張り上げたクロノは「聞きたいことと、

話したいことがあるから着いてきてくれ」とびしょ濡れになって傷心中の俺を引きずって公園に連れてきた。

そして公園で魔方陣を展開して、今俺がびしょ濡れで立っている宇宙船……『アースラ』とかいうなんともFantasticalなところに俺の返事も聞かずに引っ張ってきやがった。

クロノはこのアースラに到着してそのまま進もうとしたが、そこでやっとこさずぶ濡れの俺に気がついてなんとも言えない表情でこちらを見てきている。

「……とりあえず、もうちょっとだけ待ってくんね？」

「……うん、大丈夫。ちゃんと待つよ……」

「すまなかったな……替えの服がいるなら僕のを貸そう……」

クロノと民族衣装の子が優しく肩を叩いてくる。

二人の言葉に涙が止めどなく溢れています。はい

「ぐずっ……ありがとう。だが、大丈夫だ。そろそろ『練れる』ぐらいには回復したから……」

「？」

「じゃ？……『練れる』って……何を？」

俺の言葉に反応した魔砲少女（笑）は首を傾げて俺を見てくる。

まあ、今の単語だけじゃわからんわな。

……そうだ、イイ事思いついた。

「ひひ、まあ見てな……」オオオオオオ……」

俺はいたずらを企む笑いを浮かべながら、呼吸を整えて青^{ターコイズブルー} 緑の『波紋』を指先に練り上げる。

血液を流れる太陽のエネルギーが指先に集中していき、指先から微かに青^{ターコイズブルー} 緑 光が奔りだす。

すると……

「ッ!？」

「あにゃ!! な、なに!？」

「これは!？」

着ている衣服に吸われていた水分が引っ張られる様に動き出し波紋を集中させた人差し指に吸い寄せられていく。

そして最後は俺が立てた人差し指にプリンのような形で留まり、俺の衣服は元通りの軽さに戻ってくれた。

即興で思いついた手品紛いの遊びだったが、三人はその不思議な水の塊を凝視している。

「…不思議な術だな……魔力反応も無しにこの様な事が出来るなんて」

クロノは水の塊を見ながら思索するように呟いている。

まあ、術と呼べるような大層なモンじゃねえけどな。

「とっってもキレーなの……」

「うん……凄く幻想的だね」

二人は水の周りに奔る青^{ターコイズブルー} 緑の『波紋』に目を輝かせているが

……「コレで終わる俺じゃねえんだぜ?」

「とりあえずかじってみ？元は水だが、感触はこんやくゼリーだぜ」

プルプルと震えている水を輝く目で凝視している魔砲少女（笑）に俺は教えてやる。

「ホント!?……ち、ちょっと怖いけど……え、えい!!（パクッ）」

「ああっ!!なのは!?それって元は海……」

俺の言葉を鵜呑みにした魔砲少女（笑）は少しだけ戸惑ったが、意を決して上の部分をかじる。

すると少しばかり目尻が下がって涙目になってきた。

簡単に引つかかったことに、ニヤリと口を吊り上げて俺はそれを見ている。

確かに感触はこんやくゼリーだよ？感触は？

「味まではさすがに変えねえよ（笑）」

クロノはなんともいえない表情で俺を見て、民族衣装の子はプルプル震えてる魔砲少女（笑）を心配している。

そして俺はかじられ菌形の残った海水の集まりを持ってドヤ顔。

うん。中々にカオスでにゃーか。

そしてそのまま、このアースラなる船の艦長のところに案内される。

あっ海水はちゃんと捨てましたよ？

魔砲少じ……高町なのはにはさっきからポカポカパンチされてるけど痛くないでえっす!!

ユーノはそれを苦笑いで見てるし。

ココに来る間に自己紹介はしますたよ？ その一幕

「わたしは高町なのはっていつの。え〜っと、あなたのお名前は？」

魔法少女…高町なのははニコニコしながら自己紹介をしてきた。

ふむ、名前か…普通に答えちゃおもしろくねえよな？

俺は満面の笑顔を浮かべながらニコニコと俺を見ているのはに
向き直る。

「おう、俺は橘禅ってんだ。あだ名はジョジョだったな。特技は料理
ですか？」

「あだ名が名前に掠りもしてないの!? しかも過去形なの!! 聞かれても
困るの!!」

「スマン、間違えた…」

「どこを!？」

「あだ名はジョジョと呼ばれたかった…」

「願望なの!？」

「まあ嘘だけど(笑)」

「待って!! どこが!? どこが嘘だったの!? ねえ、ねえッ!？」

と、まあ普通?の自己紹介だったけどね。

そつこつしてる内に、艦長室とやらに到着。

なのはも空気を読んだのか、ポカポカパンチを止めた。

むう、一体どんな奴がいんのかねえ？

「ゼン。とりあえず、あまり艦長の前ではっちゃけないでくれよ？」

とクロノが深刻な顔で忠告してくる。

フム……………そうか!?

「なあゝるほどお…クロノ。そいつぁ振りってやつだな？任せろ任せろ!!派手にブツ放してやつからよお!!」

「違う!!頼むから止めてくれ!!というかブツ放つって何をだ!!」

真に受けたのか、クロノは本気で止めにかかってくる。

つつか、背中に苦勞の二文字が見えるぜ？クロノさんや？

「ジョークジョーク（笑）初対面なんだしささすがに礼儀は弁えるさ」

「……………頼むぞ、ホントに……………」

そつ言ってクロノは「艦長、失礼します」と扉に声をかける。

「入りなさい」

と女性の声が返ってきて扉が開く。さあ!!しっかりとやりますか!!

まずは相手の目を見てしっかりと挨拶だ!!

そつ思っくいざ中に入って……………

目に飛び込んだ光景に頭が freeze した。

そこには盆栽が並んでいて、敷いている畳の上にはお茶をするための道具や古風な家で見ないような道具、外では鹿威しがカコーンと音を鳴らしていた。室内なのに桜は咲いているし、畳に毛氈もある。

壁が近未来的な事もあって、めっさ違和感が出ている。

一言で言えば、ありえない。

盆栽の切り方も中途半端。

中央には座敷の上で制服で正座して、笑顔を浮かべた緑色の髪の女性が俺を見ている。

ああ、そうか。そういうことか……

俺の頭、リスタート。

俺は女性の目を見てニッコリと笑い返す。

そして女性が笑顔のまま口を開いて言葉を発する前に……

「この喧嘩買った。みっくみくにしてやんよ」

俺は笑顔で宣戦布告をカマした。

「ええええええええええええええええええええええ!!!?」

クロノ達は絶叫して女性は呆然と俺を見ているが関係ねえ!!

「ちよっ!?ちよちよちよちよっとまっつて!?いきなりどっしたのさ!?ゼン!?落ち着いて!!」

落ち着け?落ち着けだあ?何言っつてんだ、ユーノ君よお?

「おいおい、ユーノオ?俺は今、至極真っ当にこの上なく完璧に落ち着いてるぜ?ああ、間違いなくc o o o o 1だ。只、ちよーつとばかり怒りが有頂天に達しただけさ」

「何か違うの!?!」

だまらっしやい!!さあ!!

いますぐこの日本かぶれに正しい『和』の心を説かねばならん!!そう!これはまさに『^{ジハード}聖戦』なのd……………

「僕との約束、マッハで破ってんじゃない!!!」

後頭部にクロノの893キック(ツッコミ)が炸裂して、俺は倒れた。

……………

「ええっと……………で、では改めて時空管理局巡察艦『アースラ』の艦長リンディ・ハラオウンです。まずはロストロギア、ジュエルシードの回収協力のお礼を言わせてもらいます」

「改めて自己紹介をするよ。ゼン。時空管理局執務官のクロノ・ハラオウンだ」

落ち着きを取り戻した場で二人が自己紹介をしてくる。
まあ、おれは未だにぶすつとしているが…

「いんこちは。橘禅です」

リンディさんはそんな俺に苦笑いをしながら尋ねてきた。

「そ、それじゃ禅君、単刀直入に聞くけど、君は魔導師なの？」

まあ、確かに波紋ANDスタンドあんな力見たら自分達と同じじゃねえかって勘違いもするか。

まあ違っけど。

俺は対面で正座しているクロノとリンディさんの眼を見つめて、しっかりと会話をする体勢に入る。

「NON、俺は魔導師なんて大それたモンじゃねえです」

「……確かに、君からは魔力を全く感じない。だが、ゼン。君が魔導師じゃないと言っなら、君の使っていた技やあの『巨人』は一体？」

俺の返答にクロノは純粹に疑問を返してくる。

一応教えてもいいんだけどなあ。

「あ……その前に聞くが……」

まず、さっきの管理局つてのについて聞いておきましょう。

ほんと、アニメか原作見ておけばよかったなあ……。

俺はクロノの質問には答えず、こっちから質問を投げかける。

『『時空管理局』ってなあ、なんだ？ そんな……何ていうか……警察？

みたいな名前は聞いたことが無い」

知らない相手に自分の情報は渡せないと、暗に言ってる。
これにハツとしたのか、リンディさんが口を挟む。

「そうね。そこから話さないかね……時空管理局というのは……」

難しい説明ではあったが、要約すると地球とは別の世界ミッドチルダってところじゃ魔法文化なるものがあり、それを管理しているのが時空管理局という組織らしい。

しかも三権をすべて兼ね備えているとかって話だ。

つまりクロノは地球でいうトコの刑事……か？んでリンディさんがその上司みてえなモンかね？

俺はリンディさんの口から語られる内容を少しずつ自分なりに理解していき、更に聞きたい事を質問する事にした。

一応ジュエルシードについても聞いとくか。

詳しくは知らんし。

「それでロストロギアっていうのはなんですかい？」

直訳で“失われた遺産”だわな？

「失われた古代の遺産……といってもわからないわよね？」

大体あってたッ!?

自分の直感にビビったぜ。

「……オーバーテクノロジーってやつですか？」

「ちょっと違うけど……まあ大体そんな認識でいいわ」

ジュエルシードを見る限りじゃそれらとは比べ物にならない危険度なんだろうな。さっきの竜巻も自然災害を軽く超越してたし。

二人の話では次元空間の中には幾つもの世界が存在し、その中には他の世界よりも進化しすぎた世界があるそうだ。

その世界を滅ぼした危険な技術の遺産。

そういったのを総称して『ロストロギア』と呼ぶらしい。

殆どの『ロストロギア』は使い方によっては世界どころか次元空間……色んな世界を同時に滅ぼす程の力になるとのこと。

そして、さっき回収した『ジュエルシード』は正に、世界を滅ぼしてもおかしくない代物だそうだ。

…正直、スケールのデカさにびびっちまいそうになった。

ドンだけ危ねえんだよジュエルシードって。

「あの宝石……ジュエルシードでしたっけ？あれってあと何個くらいあるんツスか？」

俺はリンディさんに質問する。

もし、まだあるんならさっさと地球から退散して頂かなくてはな。そんなでっけえ爆弾は海鳴市にやいらねえっての。

俺の質問に答えてくれたのはリンディさんではなくクロノだった。

「ちつきとめた7個で未確認のジュエルシードは最後だ。まあフェイトという少女が3個ほど持っていたがな。」

クロノは難しそうな表情で俺の質問に答えていく。

……ヤッパリフェイトはまだ仲間じゃなかったのか。

まあ、アルフがフェイトを連れて逃げて行ったしなにか事情があるだろ。

「今度はこちらから聞いてもいいか？」

俺がフェイトとアルフの立ち位置について考えていると、目の前に座ってるクロノがそう切り出してきた。

この部屋で俺を見つめるのはクロノだけじゃなく、クロノの横に座っているリンディさんと俺の横に座っているなのはとユーノもだった。

まあ、やっぱりそつくるわな、俺の力……『スタンド』と波紋って、クロノ達からしたら完全に未知の力だし。

一応この部屋にいる人達は信用できるんだがなあ……よしっ。

「こっちもいろいろ聞いたし、クロノ達なら信用できるから答えんぜ？ ただし……信用したのはクロノとリンディさん、ユーノになのはだけだ。俺の力を話す最大限の譲歩としてそつちの組織への記録や報告さえしなきゃできる限りのことを話す。それでいいか？」

俺の答えにリンディさんは目を瞑って思索している。

さすがに管理局って大きな組織とかに話して、実験とかそーゆう話しがでるのはご勘弁願いたい。

さあて、どつくるかね？

これで駄目なら話せねえんだけど……

「あ……母……艦長。どつしますか？ 僕としてはゼンのことは信用できる……この条件でいいのではないかと……」

すると、クロノが横から助け舟を出してくれた。

おお!! 信頼されんのは嬉しいねえ……後はリンディさんの判断次第か……

「……わかりました。会話の記録はしないし、報告書にも無し。それでいいかしら？ 禅君？」

「GOOD。では、聞きたいことをぶつけて。」

望みどおりの返事が貰えたので、俺は質問を促す。

「ではまず…君が使っていたあの水色のオーラのようなモノはなんだ？魔法ではないようだが…」

そんでクロノが皆を代表して聞いてきた。

最初の質問は波紋の力についてか。

「ありゃ『波紋』って名前の……術っていつか……まあそんなモンだ。」

「『波紋』？」

クロノ達は首を傾げてなのはを見る。

多分なのはが知らないかの確認だろうな。

案の定なのはも知らないようで首を横に振る。

再び視線が俺に帰ってくる。お帰り。

「そう。『波紋』……東洋の『仙道』に伝わる秘術のひとつだ。ありゃあ独特の「呼吸法」を使って血液中のエネルギーを蓄積して、生命エネルギーを活性化させるんだ。んで、その独自の呼吸法で練り上げた生命エネルギーが水に出る『波紋』に見えたから、俺はそう呼んでんよ……。「波紋の呼吸」で作りに出される『エネルギー』ってヤツは「太陽と同じ波動」で、強い波紋エネルギーは色んな奇跡を起こす事ができる。さっき俺がやったみたいにな？」

俺はクロノ、ユーノ、なのはに視線を向けながら話していく。

俺の視線を受けて、3人はハツとした顔で話を聞いている。

さっき俺がやったことを思い出してるみてえだな…

「まあさっきやって見せたみたいに液体を操作したり、モノの強度を上げたり、後は……空中に足場を作ったのもそうだ。それと、波紋にはいくつかの種類があつてな。中でも山吹色サンライトイエローに輝く波紋が最も波紋エネルギーが強い……とまあ、これが俺の使つてた波紋って術の力だ」

俺は説明を終えて目の前の茶を啜る。

時間が経つてぬるくなった所為か、旨味が逃げていやがる……何故もつと熱い湯で入れなかつたのか………解せぬ。

「……成る程……かなり広範囲で応用が効くね……でも、ゼンは何処でその力を知つたんだい？ さっき『秘術』って言つてたけど」

ユーノは顎に手をやって波紋について考えながら、俺に波紋の出自を聞いてきた。

同い年なのにこのポーズが様になるってどうよ？

しかし波紋の出所かあ………神様に貰つたなんて言つても信じられねえだろうし………適当に誤魔化すか。

「ああ、ちょっと前に道端で会つたシルクハットを被つたオッサンから習つた」

「知らない人に習つたの!? っていつか秘術じゃ無かつたのかい!？」

「いや何かそのオッサンが『君には才能がある!!これをあげるから私の元で少し修行してみないかい?』って言つてサンドイッチくれたからよ。着いていって手ほどきを受けたんだ」

「サンドイッチでか!? というか道端でシルクハットを被つてる時点で怪しいだろ!？」

「中々美味かったぜ？食いかけだったけど」

「食いかけ!?ちゃんとしたのを貰ったんじゃ無いの!?それでホイホイ着いていつちやたの!」

「あ、あらあら……ダメでしょゼン君?知らない人に着いて行っちゃ」

「母さんそこは重要じゃないでしょう!!い、いや重要だけでも!!それホントに秘術なのか!」

俺の即興で作り出したエピソードが気に入らなかったのか、クロノとユーノは興奮しながら詰め寄ってきた。

いやまあテキトーに言っておかねえとその師匠とか探し出したりしそっだしな。

「〜?「じゃ?…空気を吸ったら…」波紋」っていつのになるの?…えっ
と?」

一方で、なのはは波紋自体をあんまり判ってねえようだ。

さつきから首を傾げて頭の上に大量のハテナマーク出してるし。

「と、とりあえず波紋についてはもういいとして……では、あの巨人は?あれも習ったとか言わんだらうな?」

そして、俺の『波紋』の力に納得した……無理矢理納得させたクロノは次の質問を投げかけてきた。

お!?ついにきたか!!『クレイジーダイヤモンド』のお披露目が!!

よおし!この部屋にあるモンをなんかぶっ壊して、治して見せるか!?

いや、いつそ片っ端からぶっ壊すのもありか!?ケケケ!慌てふためく顔が楽しみだぜえ!!

俺はどうせ見せるならド派手なパフォーマンスで見せようと考え、
壊す物をセレクトするために部屋に視線を彷徨わす。

そして俺が視線を彷徨わせた先で……。

「ぽちゃん）ズズツ……ふう」

リンディさんが自分の湯呑みに角砂糖をINしてました……。

ぷっちん

ぷりん

『クウレイジイイイイイ!!!ダアアイイヤモンドオオオオオオオオオオオオ!!!』

俺の怒りの叫びに応じて阿修羅のごとき形相を浮かべた『クレイジーダイヤモンド』が俺からリンディさんに向かって一直線にシュートされるッ!!

『ドオオオオラアアアアアアッ!!!』

ドオゴシヤアアア!!!

『クレイジーダイヤモンド』はその勢いのまま天に拳を掲げるようにアップパーを繰り出してリンディさんの手の中にあつた湯呑だけを力ち上げるように撃ち抜く。

撃ち上げられた衝撃で湯呑は空中で砕けていった。

「.....え?」

いきなり現われた『クレイジーダイヤモンド』に三人はポカンとした表情を浮かべている。

まあ、どこからとも無く現れて、いきなり拳を振るえばそうなるかな.....

そして目の前で『クレイジーダイヤモンド』に湯飲みをブツ壊されたりンディさんは湯飲みを両手で挟もうとしたポーズで固まっていた。

が、そんな状況はどうでもいいぐらいに!!

今の俺はブツンしている!!

『クレイジーダイヤモンド』が時速300キロオーバーの速度で拳をぶち込んだところには無残に砕けちった湯呑みと宙を舞うお茶だったモノ。

だが!!そのままぶちまけることは無い!!

「その お茶だった可哀想なモノを『砂糖を入れる前の状態まで治す』」!!

キュウイイーン!!!

すると湯飲みは元の形に戻り、リンディさんの手に収まる。

そして治った湯飲みの中には純粹なお茶のみが帰っていった。

角砂糖が二つ落ちてきたので、俺は『クレイジーダイヤモンド』の手で受け止めさせる。

ココまでの所要時間、2秒弱…

「……………あ、あの?……………ゼン、君?」

リンディさんはわけがわからずオロオロしていた。

「リンディさんよぉ……………俺の中の……………リンディさんに対する怒りが……………ちっとばかり、足りなかったみたいだぜえ……………」

リンディの目の前には俯いて、表情の見えない俺と主人に従って角砂糖を持った右手をリンディさんの顔に向けて恐ろしい形相で睨みつける『クレイジーダイヤモンド』。

そして俺の両目がかッ!!とエフェクト音が出そうな勢いで開かれた。

「お茶に砂糖を入れんじゃねえやアアアアアアアアアアアアッ!!!」

グシャアッ!!

『橋禅・魂の叫び』

!!
俺の声に呼応して『クレイジーダイヤモンド』が砂糖を握りつぶす

「は、はいいッ!？」

「ざあけてんじゃねえぞおおお!!アンタなめてんのか!?日本茶は『葉』の旨味を味わうもんだぞ!?なあんでシュガーがINされんだよ!?!この部屋の中途半端な和空間といい、日本文化舐めすぎだぞコラアッ!!」

俺の勢いとボロクソな言い様にリンディさんの目尻に涙が溜まっていく。

まだこんなもんじゃ終わりじゃないザマスよッ!!

「ふざけた飲み方しやがって!!お茶の葉を大変な思いで栽培されてる全国の農家の方々に謝れコラアアアアアアアアアアアアア!!!」

「すっすいませんでしたあ!!!」

本日、二度目のカオスタイム混沌時間でごじゃーます。

.....

「落ち着いたかい?ゼン?」

ユーノに声をかけられて俺は俯けていた顔を上げる。
気分はさっきよりも幾らか落ち着いた。

「ああ………だいぶすつきりしたぜ」

あの後、モ・ウ・レ・ツな勢いでリンディさんに『和』の心を説いていると呆然としていた三人からストップがかかり、渋々、渋々俺は説教をやめた。

リンディさんには『和』の心をすっかり学んでもらうということで一応の納得はした。

「ハア………まったく、中々話が進まない……」

クロノがこめかみを抑えている。

やっぱり苦労性だなあ………ホンマにゴメス（笑）

「それで………ソレはなんだ？」

と、クロノは顔を上げて俺の横で仁王立ちしている『クレイジーダイヤモンド』を見やる。

「おっきい………人、なのかな？」

『………』

なのはなのは、無言で佇む『クレイジーダイヤモンド』を見上げていた。

それ、首痛くならないのかねえ？

『クレイジーダイヤモンド』の身長は2M近くあんのだよ。

まあ、とりあえず紹介といきますか。

「俺はこの力のことを『スタンド能力』って呼んでる……」

語りだした俺にみんなの視線が集まってくる。

「スタンド？」

「そうだ。コイツはガキの頃から俺の傍にいたからな。STAND BY ME(傍にいる)って意味でな……それで、コイツ自身の名は『クレイジーダイヤモンド』って名づけた」

俺が言葉を切ると、部屋にいる全員の視線が腕を組んで仁王立ちしている『クレイジーダイヤモンド』に注がれた。

2M近い身長に全体的に逞しすぎる筋骨隆々なシルエットに、肘や腰等の体の至るところにちりばめられたハート型のアクセント。

顔全体はハート型の甲冑に覆われ、とても強い意志を秘めた瞳が覗いていて、背中からは首に向けて銀色の無骨なパイプが何本も通っている。

……その出で立ちはずいぶん、見るものを圧倒する存在感があった。

ぶっちゃけ敵だったら即座に逃げるね、俺は。

「『クレイジーダイヤモンド』……『狂った金剛石』か……もの凄い威圧感がある名前だな……確かにあのパワーとスピードを間近で見るとその名前にも納得するしかないがな」

クロノは俺に視線を移して苦笑いしてる。

いやいやいや、パワーとスピードだけが売りじゃねえんだって。

「まあな……だけどコイツの本当の意味での真骨頂はパワーでもスピードでもねえ……その『能力』にある」

「能力ってさっきの湯飲みになにかしたときのかい？」

「ケケッ察しいいな。ユーノ、その通りだ……「ドイツの能力は」両の拳で触れれば、破壊された物やエネルギーを治す』ことができるんだわ」

「「「はあッ!!?」」」

「??」

リンデイさん達はまさかのさいつこうにcrazyな能力にブツたまげているが……

なのはまた理解できなかったのかねい?…文系ダメな子が

……

「なのは、理解できたか？」

「ふえ?う、うん…ユーノ君たちがなんであんなに驚いてるかは知らないけど…でも……」

「なんだ？」

なのはは『クレイジーダイヤモンド』と目を合わせながら俺に語ってくる。

『『クレイジーダイヤモンド』の拳って、とっても『優しい』ってことだよね!!』

あらやだ!!にっにりと嬉しいこと言ってくれんじやんの子ったら!!

「つつても例外はあるけどな。それは『自分の傷と死んだものは治せない』ってことだ」

「いやいやいや!? それでも充分凄いやからね!」

「確かに…加えてあのパワーとスピード…とんでもなくイカれてる……『クレイジーダイヤモンド』とは良く言ったものだよ……ピツタリすぎる名前だ」

「ハア……なのはさんに続いてとんでもない子がもう一人、地球にいたとはね……どうなってるのかしら? 地球って所は……」

まあ、普通に考えりやかなりブツ飛んだ能力だわな。

やっぱ『クレイジーダイヤモンド』すげえわ。チート乙ツスー後、リンデイさん? 間違いなくそんな沢山はいませんかからね? なんか地球にとんでもない誤解してません?

「じゃあ最後にゼン……君はなぜあの場に来たんだ?」

次のクロノの質問はさっきまでの流れを完全にブツた切ったものだった。

いきなりの話題転換だなクロノさんや?

「なんでって……俺はフェイトのことダチだと思ってるからな……たまたまあの竜巻と戦ってんの見つけて危なそうだったから助けただけだぜ?」

「では、彼女の居場所は知らないのか?」

…フェイトがどおいう立場が知らんし、居場所は誤魔化しておくか

…

「知らんよ？この間家で飯を食っていったけど、家の場所は聞かなかったしなあ…」

「そうか……残りのジュエルシードはフェイトが持っているから…なんとかして彼女を確保しなくてはならないし…」

なんかブツクサ言ってるが大丈夫か？

そして懐から出したメモ用紙を俺に渡してくる。

見てみると電話番号のようだ。

「ゼン。これは僕の連絡先だ。何かあったらここに連絡して欲しい。僕で良ければ力になるよ。地球の普通の電話からでも通じるから。」

俺はそれを受け取ってポケットにしまう。

「わかった。暇なときにワン切りしまくっちゃる」

「頼むから用があるときに連絡してくれ!!頼むから!!」

大事なことなので二回言いましたってか？

とりあえず俺もクロノに自宅の電話番号を教えて、今日はお開きとなった。

そんでクロノが俺達が最初に転送されて来た部屋に案内してくれる。

「送って行くよ。元の場所で良いか？」

「はい」

ユーノがそれに答えて転送され元の場所に戻る。
なのは達とは家が逆方向のようなのでその場で解散することになった。

「それじゃあな〜バイニー」

「ばいばーい!!」

「またね、ゼン。」

なのはたちと別れて、俺は悠々と家路に着く。
とりあえず明日にでもフェイトを見つけて美味しい飯を食わせてやんなきゃな!!

帰りの道中、俺は決意を新たにして家に帰ったんだが……。

「……………」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……………

鬼（MYマザー）が（ry

「……………禅よ……………」

「Yes my l o o a a」

いつもより余計にパワーアップしております。

「……………キャブツはどおしたあ?」

「……………海にバラ舞いッ……………」

俺の言い訳の言葉の途中で母上様はいきなり俺の服を掴んで上に放り投げる。

そのまま重力に引かれるままに落ちていく俺の視界の端で母上様はその場でジャンプ、両足を縮めて横向きに落ちてくる。

そのまま流れるように足の裏が俺に向いて……………ちよっ!? そんな大技……………

「キヤアアアアアベエエツウウウウウウ!!!!!!」

ジャンピンググッドロップキック
人柱遊戯の極みいいいいいいッ!!?

ドオゴシヤアアア!!!

「キヤアアベラッツバアア!!?」

まさかのアクロバティックでヒートアクションなドロップキックに俺は顔を撃ち抜かれ顔が後ろに反れていく。

俺はきりもみ状態で宙を舞いながらリビングの天井を視界いっぱい
いに納める。

あれ? デジャヴ?

薄れゆく意識の中、俺はそう思った。

第5話 育児放棄？

どうも。

3日前に母上様の手でキャベツと同じ運命(ちぎられる的な意味で)を辿りそおになった、禅でございます。

…あのアースラでの自己紹介を交わした日から、管理局の方々なのは達とは会っておりません。

問題のジュエルシードは一応全部封印してあるので後はフェイトが持ち去った分を回収するだけだそうだが…

あの竜巻事件以降、フェイトの足取りは掴めずアースラも探索から次の段階へは進んで無いとクロノノから聞いた。

なので、俺はあの日から今日までの間は普通に過ごしている。

一応、フェイトのマンションを訪れてはみたが、相変わらず留守……住所違うとか言うオチじゃなかるうな？…

まあ、いないものは仕方が無いので今日もマンションから引き上げて、気分を入れ替えようと外から帰ってきてすぐにキッチンに入り、おやつ感覚でフルーツサンドイッチを作りました。

できあがったソレを冷蔵庫にブックンで、美味しい温度になるまで冷やしておき、優雅なTEA TIMEを過ごそうってわけよ。

サンドイッチを冷やしている間の空いた時間に日課の波紋の練習をして時間を潰しておく。

この前の学校帰りに先日の海であった事件のことを考えて武器を準備していたせいで、最近は大遠を愛するために神社に行くことも叶わず、精神的な疲れが溜まってるんです。はい。

また急に事件に巻き込まれて食材を使ってしまったら………生きている自信がねえしな………母上様怖い。

と、そんなdark futureにならない様、祈りながら紅茶の準備をしていると……

とおおおおるるるるるるん

リビングの備え付けの電話が鳴り出した。

んぬ？電話か……はてさて、だれかねえ？

およ？この番号は確か…… あっやっぱりクロノだわ……なんかあつたのか？

実際、クロノは探索班と書類整理で滅茶苦茶忙しいから電話も1、2回程度しかしてこなかったんだが……

……とりあえず……

ガチャッ

「はあいはいーこちらレーン大統領の自宅ですがあ、只今職探しに出かけて留守にしております。戻り次第折り返し電話しますからあ、ピーっと鳴ったらご用件をどうぞ？」

ボケてみた。

『そんなこと言う電話センターがあるかあ！っていうか意味が分からん！』

チツ、バレたか。

さすが『突っ込みのクロノ』（誰も言ってない）なんて二つ名がつく漢だ。

切り返しの速さもハンパじゃねえ。

「三割冗談だ。んで？なんぞあつたか？」

『冗談が三割しかない!?!』

それが、俺クオリティ。

『ああ、もう!!話が進まないじゃないか!!』

「まったくだぜ」

やれやれ、俺も暇じゃねえんだけどなあ。

『何で、さも自分も呆れてます。見たいな言い方をしているんだ!?!』

「まあ、いいじゃん。んで?用件は?さっさと本題にはいるつや?」

ポケの空気を作るだけ作って思いつきりポケ倒してさっさと切り上げる。

ON/OFFの使い分けは大事だぜ。

『……ハア、もういい。とりあえず用件なんだが、先日の事件で襲撃してきた者が判った。ゼンにもその説明をしたいから時間があればアースラに来て欲しいんだ』

クロノは盛大にでっかい溜息を吐いてから疲れた声で用向きを伝えてきた。

お?なんか進展があつたかと思えばかなり重大な話しじゃねえか。……あの雷を撃った奴か……とりあえず、ソイツをブツ飛ばすためにも聞きにいくか。

あのクソツタレた雷のせいでお袋にボウリングのピンの如くブツ飛ばされたんだしな……(完全な八つ当たり)

「わあっ。少し時間は掛かるけどそれでもいいか?まだ学校から帰って来たばっかで着替えてえしよ」

それと頑張ってるクロノ達にサンドイッチを差し入れてやりてえし、包んで行きますか。

疲れたときにゃ甘いモンが一番良〜く効くし。

『ああ、それは構わないよ。場所は昨日転送した公園だ…そこに来てくれたら自動でアースラに転送されるから来てくれるだけでいい』

自動で転送とか…アースラの技術って凄えな。

「あいよ。ちょうどおやつフルーツサンドイッチを作ったところだったから、持って行くわ。話が終わってから時間がありゃTEA TIMEと洒落込もつぜ?」

俺は受話器を肩で挟みながら紅茶の葉を容器に閉まって片付けていく。

紅茶にお湯を入れる前でよかったぜい、危つくアツアツの紅茶を
一気飲みせにゃいかんところだ。

『それはいいな……だが、僕の舌は厳しいぞ?』

さっきのお返しだろうか?挑発的にいつてくれんじゃん?

「おっけえ、おっけえ……上等だ。テメエの舌、唸らせてやんよ?」

さあて、一応護身用に、武器は持って行きますか。

電話を切って、サンドイッチをバケットに詰めてから部屋に戻る。

コートかけに掛けてあった愛用のジャケットに自前の武器を仕込んで、バケット片手に俺は公園に向かった。

.....

そして到着!!アースラでござい!!

とりあえず、クロノ達はミーティングルームにいるそうなので、俺は職員さんに案内してもらって扉を潜った。

「ちゃーっす。お邪魔してんぜ?」

俺の声にクロノ達は振り返る。

なのはとユーノも先に来てた様で振り向いて手を振ってくれた。

あん?なんか、昨日はいなかった女の人もいるな。

その女の人と一緒にクロノがコッチに歩いてくる。

「ゼン、すまないな。わざわざ来てもらって」

「いやいや、こっちも暇してたからな。お招きどうも〜ってなところだ」

ぶっちゃけ、TEA TIMEの後は予定無かったしな。

皆でワイワイしながらTEA TIMEができるならそっちの方が楽しいし。

「そうか。あっ後紹介しておくよ。こっちはアースラのオペレーターを担当しているエイミィだ」

クロノの言葉に反応して、女の人が俺に笑いかけてくる。

「どいつも、初めまして〜。自己紹介するね。私はエイミィ・リミエツタ。この戦艦、アースラの通信主任兼執務官補佐をしています。これが

「らよろしく」

そう言ってエイミィさんは手を差し出してきたので俺も握り返しておく。

随分と気さくな人みてえだな。

明るい感じで親しみやすそうだね。

「あいあい、よろしくっす。俺は橘禅でさあ……ゼン、と呼んでもらって結構ですんで」

「了解。ゼン君ね？これからよろしく」

エイミィさんとの自己紹介が終わったので俺は茶を楽しんだりインディさんに視線を移す。

おっ？今日は緑茶に砂糖をブツ込んでねえみてえだな？よろしい、よろしい。

まあた、ブツツンしちゃうところだった。

「そんで？先日の事件ん時に、あの雷ブツ放った野郎が分かったんですか？」

リンディさんが少しでもマトモな味覚になってくれる事を祈りつつ俺はとりあえず尋ねてみる。

だがその問いに答えたのはリンディさんではなく、クロノだった。

「ああ。エイミィ映像を」

クロノはテーブルに歩み寄って真剣な顔をする。

それにつられてか、なのはとユーノの顔つきも真剣になってた。

俺？俺はいつでもマイペースだぜ？

場の空気に流されねえ男ですからww（人はソレをKYという）

「はいはい」

エイミーさんの声の後、部屋の明かりが落ち、テーブルの中心に映像が映し出された。

映し出されたのは頬が痩せこけて目の辺りが黒ずんでる、全体的に病的な印象のオバハンだった。

「あら」

「このオバハンがああ雷をブツ放した奴か？」

映像を見て、リンディさんは少し驚き、俺は表情を険しくした。

……映像越しでも判るくらい目が病んでいやがる。

「あの……この人は？」

俺が聞いたかった事をなのはがクロノに尋ねた。

「僕らと同じミッドチルダ出身の魔導師。プレシア・テストロッサだ」

映像を見ながらクロノが説明する。

「専門職は次元航行エネルギーの開発。偉大な大魔導師だったが、違法研究と事故によって放逐された人物だ」

「テストロッサって……」

オバハンのファミリーネームを聞いて、なのはが呟いた。

……おいおい、まさか……

「あのフェイトという少女はおそらく」

「プレシアの娘…ね」

リンディさんがモニターを見ながら険しい表情で呟く。

なのも、プレシアの映像を再度、見つめる。

「この人が、フェイトちゃんのお母さん…」

「冗談だろ？こんな病的なオバハンがフェイトの母ちゃんかよ？」

そこに映された写真には母親の優しさなんぞ微塵も感じない…狂気に塗れた瞳が映っているだけだ。

「プレシア・テストロッサは、違法な素材を使った実験を行い失敗。中規模次元震を起こした事で中央を追放され、それからしばらくの内に行方不明となる。………だが、この違法実験というのが少々きな臭いんだ。」

「んあ？どついつつた。そりゃ？」

俺はクロノに視線を向けてその先を聞き返す。

クロノは言い辛そうな顔をしていたが、覚悟を決めたのか真剣な顔で語り始めた。

「……………本局に問い合わせられない今の時点では確証がないが、僕とエイミィで予想を立てたんだ…それでよければ聞いてくれるかい？」

「ああ、聞いたことも無い組織なんぞより、クロノ個人のほうが全然信頼できるしな。聞かせてくれや」

みんなも俺と同じように無言で頷く。

それを見渡して一息置いてから、クロノが話を始めた。

まず、追放される原因となった大型魔力駆動炉の暴走事故について査察したのは、今の管理局の上層部の人間らしい。

その査察結果で暴走事故は、プレシア・テストロッサが違法手段・違法エネルギーを用い、安全確認よりもプロジェクト達成を優先させたものによるものとの報告を上げている。

だがその事件のすぐ後に、当時査察を行った今の上層部の人間が異例の昇進を遂げたらしい。

そして、納期を急がせたのはその管理局員からの命令であったとの報告もある。

……つまり無理なスケジュールを決行させた原因もそこにあるってわけだ。

…さつさと手柄を立てて昇進したいからって無理やりにスケジュールを早めさせ、それで失敗すりゃ口裏あわせて報告する。

「事故の原因はプロジェクトの主任の強行手段によるもの」と報告すりゃ、実際にスケジュールを早めたプロジェクトの主任……プレシア・テストロッサが罪を被る事になる。

後は何食わぬ顔で功績が認められるのを待つだけで手柄が手にしているってわけだ。

「てえことはなんだ？このオバハンは責任を擦り付けられて、踏み台にされたってことかよ？」

簡単に言や、低い良いスケープゴートってやつかよ。

「恐らく…な」

「…それについてはビデオ話だが、なんでまたジュエルシードを集めてんだ？しかも自分は出張らずフェイトにやらせてよっ。」

そう、俺にはそこがわからねえ。

大魔導師と呼ばれるくらいだ……少なくともかなり強いはず。

なら、なんで自分じゃなくわざわざ娘のフェイトにやらせている？

それに……

「なんでこのオバハンはある時、フェイトを攻撃しやがったんだ？……」

海で飛来して来たあの雷は迷うことなくフェイトに叩きつけられた。

普通、娘を攻撃するとか有り得ねえだろ……

「…残念だが、なんのためにジュエルシードを集めてるか、そして何故あの時フェイトを攻撃したのか…それはまだわからない…だが、魔力残滓の照会結果は間違いなくプレシア・テスタロッサだった…現時点で事件の犯人として彼女は最有力候補なんだ…」

クロノが説明を終えると部屋の明かりが付く。

とりあえず今の説明は終わってみてえだな……

「…クロノ、ご苦労様。皆さんもとりあえず一休みしましょう？」

そう言ってるリンディさんは表情を和らげて俺達に声をかけてきた。

そんじゃ、いよいよいつの出番かね。

「うっし!!暗い話は終わらせておやつでも食おつや?この人数なら一人に三切れぐらいで分けられるしよオ」

俺は皆にそう言い放ってテーブルの上に置いておいたバケットを開ける。

すると俺を出迎えたのは三角形の形が美しく、パンの間から色とりどりのフルーツが顔を覗かせてるサンドウィッチ達だ。

作ってきたのは、イチゴとキュウイ、マンゴーを生クリームと一緒に挟んだオーソドックスなものばかりだがそのシンプルな色合いが互いを引き立てあいまるでジュエリーケースの中に詰め込まれた宝石のように光り輝いてる。

これぞまさにツ!! 食の宝石箱やあ~~~~~ツ!!

……すまねえ…取り乱したぜえ…

ま、まあとにかく仕事なんかで疲れたときは甘いものが一番ってな。

「え!?!これゼン君がつくったの!?!」

エイミィさんがサンドウィッチ達を見て驚いた顔をしている。

? なんぞおかしかったか?

「うわあ~~~~…すごいこの!!…とってもおいしそう!!」

なのは目を輝かせてサンドイッチを見ている。

「うらうら、ヨダレ拭かんかい、口の端から垂れてるから。」

残り3人のリンディさん、クロノ、ユーノは感心したようにサンドイッチを見ている。

「…まさか、ここまではな…」

「すごいわねえ…形も崩れてないし…」

「なのはの家の人がやっている喫茶店で出しても違和感ないと思うよ…」

「ローノや、店に出せるレベルって……嬉しいことってくれるじゃないの？」

「…まあ見た目だけ評価されてもなあ…味が一番だろおに…」

「とりあえず、食ったら感想聞かせてくれ。なのはは喫茶店の娘なら評価できんだろ？」

俺の言葉に反応したなのはは両腕をむんっ!!って気合を入れる感じに曲げる。

「任せて…しっかり評価するの!」

うし!てめえの舌!唸らせてやんよ!!

俺はアースラの職員さんから受け取った紅茶を皆に配る。
全員に行き渡り、そして、運命の時間が来た。

「いただきますッ!!……あむ…」

そして一口、かぶりつく。

やあ!!どつだ!!

……

「お、おいしいの!?!母さんの作ったケーキと同じくらい!!」

うおっしやあああああ!!!「いいいいんじゃねえか!?!あの「翠屋」のケーキと同じくらいって評価は!?!」

俺自身、翠屋には行ったことはないがそのシュークリームは絶品だって聞くしな。

さて、評価も聞けて落ち着いたところで俺も食つかね。

そのまま皆も思い思いに感想をいつてくれたが、高評価だった。ちゃんと評価してくれんのはありがてえぜ…

とりあえずその日は皆で楽しいTEA TIMEを過ごしてお開きになった…

.....

そしてさらに二日後、俺はまたクロノに呼び出され、アースラに来ていた。

理由も言わずに呼び出されて首を傾げていたが、アースラのモニターに映された映像を見て、俺は驚愕した。

モニターには狼形態で体中に怪我をしたアルフが映っていたからだ。

「おい!?アルフ!!」

アルフの痛々しい姿を見て、俺は身を乗り出してモニターに話しかける。

すると、声が届いたのか、アルフは驚いたように辺りを見回してた。

『ッ!?ゼン!?アンタ大丈夫だったかい!?』

声は聞こえるがモニターの先に映ってるアルフの口は動いてなかった。

多分、念話ってやつ 음성だろう。

「俺は大丈夫だ!!お前こそ、その怪我どうしたんだよ!? 一体何があったんだ!」

『それは…』

…話しぶらいことなのか、アルフは言いよどんでしまった。
すると、俺の横にいるクロノもモニターに向かって声を掛ける。

『…割り込みをしてすまない。時空管理局執務官、クロノ・ハラウンだ。どうも事情が深そうだ。正直に話したら、悪いようにはしない。君のことも、君の主 フェイト・テストロッサのことも』
クロノがそう言うとアルフは5分程してから、顔を上げた。

『…わかった…話すよ。…全部』

どちら訳を話してくれるみてえだな。
アルフの言葉に俺がほっとしていると、続けてアルフが声を上げる。

『…ただと約束して、フェイトを助けるって…あの子は何も悪くないんだよ…』

そうアルフが少し泣きそうな声で話す。

…一体お前とフェイトに何があつたんだよ？

『約束する』

クロノがそう言うと、アルフはゆっくりと今回の事件の真相を語り始めた。

…フェイトがジュエルシードを集めてる理由…そのへヴィな理由を…

『フェイトの母親 プレシア・テストロッサが全ての始まりなんだ…』

プレシア・テストロッサが何らかの理由でジュエルシードを求めていること

フェイトが母親に命令され、その手伝いをしていること
事あることに数が少ない、遅れていると鞭でフェイトを『躰』ていると……

それを聞いて俺は心底、ムカッ腹がたった。

実の娘に暴力を振るうクソババアに対しての怒りがふつつと湧き上がってくる。

だが、俺はなるべく怒りを静めて、冷静にクロノに問いかける。

「……どっすんだ？ クロノ……」

クロノもプレシアのひでえ行いに腹が立ってるのか、モニターを見つめる目は厳しい。

「……プレシア・テストロッサを捕縛する。先日の事件で管理局員を攻撃した点だけでも逮捕の理由にはお釣りがくる……だから僕達は艦長の命があり次第プレシアの逮捕に任務を変更する……君はどうする？ 高町なのは？」

クロノはモニターの向こうにいるなのはにそう言い、答えを待つ。

……なのはは少しだけ黙った後、ゆっくりと話し始めた。

『……私はフェイトちゃんを助けたい！ アルフさんの想いと、それから私の意思。フェイトちゃんの悲しい顔

は、何だか私も悲しいから。だから、その悲しい思いから救いたい。

……それに、友達になりたいって返事もまだ聞いてないし』

『わかった。こちらとしても、君の魔力を使わせてもらえるのはありがたい。……正直な話、僕達だけではフェイト・テストロッサとプレ

シア・テストロッサの相手をするのは厳しいからね。だから、フェイト・テストロッサについては、なのはに任せるよ。アルフ、それでいいか?」

『ああ。……なのは、だったね。頼めた義理じゃないけど……だけど、お願い。……フェイトを助けて』

『うん。大丈夫、任せて!』

アルフの言葉になのはは元氣よく答えていた。
そして、アルフはモニター越しの俺にも声を掛けてくる。

『ゼン……あんたにも頼むよ……あの子を……フェイトを助けておくれよ……あの子は今本当に一人ぼっちなんだよ』

……申し訳なさそうに言いやがって……
ダチなんだから遠慮なく頼ってくれりゃいいのによ……全く。

「……まかせとけ!!必ず助けてやらあ!!それで、また3人で美味しい飯食おうや。腕によりをかけるからよ!!」

『ぐすっ……うん……』

アルフは涙ぐんだ声で返事をしてくれた。

「ゼン、君も手伝ってくれるのか?」

クロノは意外そうな声で聞いてくる。

まあ、普通なら関わろうとはしねえからな。

「ああ、ダチにあそこまで頼まれたんだ……やるっきゃねえだろ?」

「…そうか…わかった…これから暫く、よろしく頼むよ。艦長には僕から伝えておく」

「ああ、任せてくれや…必ず、役に立って魅せるぜ？」

クロノは部屋から出て行き、部屋に静けさが戻っていくが…既に俺は2日前に見たババアをどうブン殴るかで頭が一杯になってる。考えただけでマジにハラワタがグツグツ煮えくり返ってきやがるぜ。

……プレシア・テストロッサだったか？……俺のダチ泣かせやがって……必ずぼっこぼこにしてやんよ!!

俺は覚悟とヤル事を心に刻み込んで、モニター室から出て行く。

……

次の日の朝、俺となのは、ユーノにアルフは海鳴公園にいた。

なのははここでフェイトとケリをつけるらしい。

なのはがフェイトと一対一でぶつかりたいと言ったので俺は手はださねえつもりだ。

公園から見える空はまだ暗さが残っていて、朝と呼ぶにはまだ早い時間。

周囲は静かだけど、逆に嵐の前の静けさにも感じられる。

こういうのは大体、デカイことが起こる前の予兆だ。

そんな中なのはは目を瞑り、言葉を紡ぐ。

「…じいちゃん…出てきてフェイトちゃん」

周囲に声が響き、風がざわめく。
ユーノやアルフが辺りを見回す中、なのはは静かに待っている。
そして……
なのははふと後ろを振り向いた。
それと同時に、

「サイスフォーム」

何度か聞いた、あのデバイスの声が響く。
聞こえた方に顔を向けると、街灯の上にフェイトが立っていた。
いつものバリアジャケットに、鎌の形のデバイスを手に持って。
そしてなのはから視線を外したフェイトは俺と目が合って驚いて
いる。

「ゼン………」

「よお………安心しな。俺は手をださねえよ………思いっきり、ぶつかっ
てきな………」

「………うん。ありがとう………」

フェイトはなのはを見つめるが、アルフが必死に訴えてくる。

「フェイト、もうやめよう。あんな女の言う事もう聞いちゃだめだよ。
フェイト、このままじゃ不幸になるばかりじゃないか。だからフェ
イト………」

アルフの必死の願いだったけど、だけどフェイトは静かに首を横に
振り、

「だけど、それでも私はあの人の娘だから」

はつきりとした拒絶、否定。

なのはと同じ、誰に言われたでもない、自分で決めた迷う事の無い意思を言う。

これが二人の意思のぶつかり合いなら、俺の出る幕じゃねえ…当人達が決めることだ。

なのははバリアジャケットを展開し、手にレイジングハートを持つ。

「ただ捨てればいいって訳じゃないよね。逃げればいいって訳じゃもつとない。きっかけはきつとジュールシード、だから賭けよう。お互いが持つてる全てのジュールシード」

なのはの言葉にジュールシードが周囲に浮かび、それに答えるかのようにフェイトの周囲にもそれらが浮かぶ。

「それからだよ。全部それから」

二人は静かに、互いにデバイスを構える。

なのはは両手でレイジングハートを構え、フェイトも下段にバルディッシュを構える。

「私達の全てはまだ始まってもない。だから本当の自分を始めるために、始めよう。最初で最後の本気の勝負！」

互いの思いをぶつけるための、言葉通りの本気の戦い。

周囲に浮かんだジュールシードが、二人のデバイスの中に収まる。それを合図として、二人の最後になると思う戦いが始まった。公園の上空で、激しくぶつかり合う二人の魔導師。

[Photon Lanceer] [reel]

フェイトの前に複数の金色の魔力弾が現れる。

「Divine Shooter」

なのはも、負けじと複数の桜色の魔力弾を出す。

「ファイア!!」

「シュート!!」

金色の魔力弾と桜色の魔力弾が、同時に発射される。

なのはは、上下左右に飛んで金色の魔力弾を避け、フェイトは、追跡してくる桜色の魔力弾をシールドで防ぐ。

だが、次のアクションはなのはの方が早かった。

「!」

フェイトが気付いた時には、なのはもう次の攻撃体勢に入っていた。

「シュート!!」

再び桜色の魔力弾を、フェイトに向かって放つ。

「Scythe Form」

バルディッシュを鎌の形に変形させ、自身に迫る桜色の魔力弾を切り裂く。

「(フェイトちゃん…やっぱり強い!)」

振り下ろされるバルディッシュを避けながら、なのはは思う。

「(でも…負けられない!)」

距離を取って、再び桜色の魔力弾を放つ。

「(フェイトちゃんの為にも…私を信じてくれてるアルフさんの想いに応える為にも…)」

揺るがない決意を胸に、なのははレイジングハートを強く握り締めた。

「(絶対に負けない!!)」

……

「(最初は、ただ魔力が強いただけの素人だったのに…)」

フェイトは自身に迫る桜色の魔力弾を、バルディッシュで切り裂く。

「(…強い!)」

フェイトもバルディッシュを強く握り締める。

「(でも…負けられない!)」

フェイトは空中で静止した。

「(母さんの為にも…絶対に負けられない!!)」

両手でバルディッシュを掴んで、前に構える。
すると、フェイトの足下に巨大な金色の魔法陣が展開された。

「私がここで負けたら、母さんを助けてあげられなくなる。だから、私は、負けられないんだ!!」

愛する母親を一途に思い、覚悟を決めたフェイトはバルディッシュに魔力を溜める。

.....

上空の戦いを見てるとフェイトの空気が変わったように感じた。
なんつつか、こっつ...必殺技をだす前兆って感じた。

「.....あん？フェイトは何かデカイのやらかすつもりか？」

ユーノ達と、地上で観戦していた俺は目を細めてフェイトを見詰める。

すると、飛んでいるフェイトの周りに金色の光が帯電していく。

「マ、マズイー！フェイトは本気であの子を...なのはを潰す気だー！」

フェイトが何をするのかわかったのか、俺の横でアルフが焦った声で言う。

確か前に聞いた話じゃ精神リンクとかったので繋がってるんだっけか？

「ほお...んじゃ...アレがフェイトの切り札ってえわけだ...」

焦るアルフの隣で、俺は冷静に言葉を返す。

空中にいるフェイトの周囲に複数の……いや、無数の魔力弾が形成されて佇む。

それを見たなのはがレイジングハートを構えようとした時……

「あっ!!」

なのはの両手両足を、金色の魔法陣が拘束した。

「ライトニングバインド」

フェイトはなのはを見詰めながら小さく呟いた。

……あリゃ確か、拘束魔法とかいうのだったっけか？

「なのは！今サポートを！」

それを見たユーノが魔法陣を展開しようとしている。

やれやれ……

「水差すんじゃない、ユーノ」

俺がそれを許すとても？

俺は上空を見たままユーノの目の前に拳を構えた『クレイジーダイヤモンド』を出現させる。

真正面から『クレイジーダイヤモンド』に睨まれたユーノが驚いたせいか、足元に出ていた魔法陣が消えていった。

「ッ!? だけどーあのままじゃなのはが危ないんだぞ!! ゼン!! 君は見過しすのか!?!」

「そ…そつだよゼン…フェイトのアレは本当にマズイんだよ!? なんとかして止めなきゃ……」

ユーノは俺に掴みかかりそうな勢いで俺に話しかけてくる。

一方のアルフも戸惑いながらもちゃんとやめさせるように言ってきた。

どっちも二人を心配してるからこそだろうが……アルフもユーノもわかつちゃあいねえなあ……

俺は空中から二人に視線を移して『クレイジーダイヤモンド』と一緒に睨み付ける。

「これはなのはとフェイト…2人の決闘であいつらの意地の張り合いだろおが……そいつを邪魔する権利はあの二人以外にや誰にもねえ……あいつらは真剣にぶつかり合ってたからな…それを邪魔するってんなら……俺が相手になんぜ!？」

俺は今までに無く言葉に凄みを加えて二人に語る。

2人だけで真剣に戦ってるのを水差す様な事したら、絶対に2人にとって不本意な結果に終わっちゃう。

アルフとユーノは何も言い返せず、視線を戻し、黙って二人の様子を見守った。

「(ゼン君…ありがとう)」

三人の様子を見ていたなのはは、心の中でゼンに礼を言った。

「アルカス、クルタス、エイギアス……」

その間にもフェイトは、呪文を唱え続けていた。

「疾風なりし天神よ、今導きの元に撃ちかかれ。バリエル・ザリエル・

ブラウゼル」

呪文を唱え終え、目を開く。

「フォトンランサー・ファリンクスシフト」

手を空に掲げ、バインドで拘束されてるなのはを睨み、

「打ち砕け！ファイア!!」

手をなのはに向けて振り下ろしたのを合図に、無数の槍のような形の魔力弾がなのはに襲い掛かかっていく。

無数の嵐のような魔力弾はなのはに降り注ぎ、爆発する。

「なのは..」

「フェイト..」

「.....」

ユーノとアルフは叫んだが、俺は黙って見つめてる。

やがて嵐のような魔力弾を撃ち終え、辺りに静けさが戻る。

しかしフェイトは残った魔力を集めて、魔力弾を作り、油断無く構えている。

...なのはのいた所には煙が立ち込め、様子かわからない状態だ。

フェイトは魔力弾を片手に、立ち込める煙を見つめている。

.....やがて煙が晴れて視界が戻ってきた。

「撃ち終わると、バインドって解けちゃうんだね」

煙の中から、服は所々破けちゃいるがほぼ無傷のなのはが姿を現し

た。

恐らくはシールドを張って、あの魔力弾の雨を防ぎきったのだろう
…けど…

「オイオイ…」

あの嵐みてえな弾膜を全弾防ぎきったのかよ？

流石の俺も、この時は驚きを隠せず少し顔を引きつらせちゃまった
い。

パネエツス、なのはさん。

噴煙の中から聞こえてきたのは、その目に不屈の心を宿した少女。

なのはの砲撃魔法を辛うじて受けきったフェイトに

お返しと言わんばかりに、バインドで拘束しやがった。

「今度は…こっちの番だよ」

そう言っつて、なのはは上空へと飛翔する。

そして巨大な魔法陣を展開させ、そこに膨大な量の魔力を収束させ
ていく。

周囲から集められた魔力は巨大な光の塊となり、なのははレイジン
グハートを突き出すように構える。

…え？あれ撃つのか？…どう考えてもOVER KILLな代物で
すよね？それ？

「受けてみて…ディバインバスターのバリエーション！」

巨大な光の塊の前方にも巨大な魔法陣を展開する。

『Starrylight Breaker』

桜色の魔力がなのはの前に集まり、集束され、巨大な桜色の魔力弾

が生成された。

……つつか、馬鹿デカすぎねえか？

「これが私の………全力全壊！」

いやいやいやいやッ!!全力全壊って!?

アンタ、本気でソレを撃つのッ!?

ちよっ!?まっ……

俺の想いは届かず、なのは様は無常にもレイジングハートを振り上げた。

『スタアアアライト・ブレイカアアアアア!!!!』

なのはがレイジングハートを振り下ろすと、巨大な桜色の閃光がフェイトに向かって放たれた。

「はぁ!!」

フェイトは、片手に持つてる魔力弾を桜色の閃光目掛けて放つが…
フェイトの魔力弾は、桜色の閃光に掻き消される

「!!」

驚いたフェイトだが、すぐにシールドを張って防御をとる……
だが、シールドは桜色の閃光の前に簡単に破れてしまう。

そのままフェイトは、成す術もなく閃光の中に飲み込まれた。

……生きてんのか？あれ？……もしかして、決闘止めた方が良かったかも？……

巨大な砲撃に飲まれていくフェイトを見ながら俺は冷や汗を流す。

「……なんつーバカ魔力!？」

「……あれか、スターライトブレイカーってのは、星を軽くブツ壊すって意味なのか？おい？」

「……否定できないのが怖いね」

俺の呟きにユーノはなのはの放った収束魔法に冷や汗を流しながら、そう呟きかえす。

……そこは否定してほしかったぜえ……

……あんな『星？粉微塵にしてやんよ（笑）』砲撃なんぞ喰らった日じゃ本気で人生終わっちまうな……

……今度からなるべくなのはを怒らせないよう心に誓った俺だった。

やがて閃光が収まり、二人の姿が見えてきた。

「なのは！」

「フェイト!!」

なのはは、空中で息を切らし、フェイトはバルディッシュを手放して海に落ちていく。

ってヤベエ!?

俺は波紋を練り上げて、持ってきた『トランプ』に波紋を纏わせる。それを一枚投げ、空中に足場を作って、バルディッシュを掴み、落ちてきたフェイトを受け止めた。

……随分軽いけどちゃんと飯、食って……ませんね。はい。

キャロリーメイトを大量に買い込むフェイトを思い出していると、驚いた顔のフェイトと目が合う。

まあ、抱えてるから当たり前ですな。

「……………？…ッ!?ゼ、ゼン…./././」

俺に抱えられてることに気づくと、フェイトの頬に朱が差してくる。

「ヨオ…」りゃなのは勝ちだな」

「…そう…だね」

だが、俺が苦笑いで敗北したと言つと、さっきまで赤かったフェイトの表情が暗くなつちまった。

…そんな表情はみたくねえんだがな…

「…なあ、フェイト」

俺はフェイトに声をかける。

フェイトは、ゆっくりとこっちに顔を向けてくれた…

「お前は最後まで諦めずに戦ったんだ。恥じる事なんざなんにもねえよ……凄えカッコよかったぜ？」

そう言つて俺は笑いかける。

これは諦めずに戦っているフェイトを見て本気で思っていたことだ。

「……ゼン……本当？」

「ああ、もちよ!!すげえカッコよかった!!」

「……ありがとう……ぐすっ」

俺が思ったことをぶつけると、フェイトの目に涙が浮かんできた。

今の言葉が嬉しかったみてえで、フェイトは泣きながら微笑んでる。

フェイトの目元を指で拭ってやり、俺達は二人で笑いあう。

「あんだ…ぐすっ…本当にいい男だねえ…ゼン…」

何故か俺の隣にいるアルフも泣いているんだが……なんつうか、お前ら涙腺弱すぎじゃね？

「何でアルフまで泣いてんだよ」

『Put out』

そんな光景を見て笑っているとバルディッシュからジュエルシードが出てきた。

俺は一度、アルフにフェイトを渡してなのは達を探す。

これを持てるのは勝者のなのはだけだからだ。

ちようど、なのはもユーノに肩を借りてコッチに飛んでくる最中だったので俺は二人を待つ。

『Put out』

そして、傍についた時にレイジングハートも一度ジュエルシードを出す。

九つのジュエルシードが俺達を中心に浮いている。

なのはは一度フェイトに視線を向ける。

フェイトも意図がわかったようではに頷くと、ジュエルシードはレイジングハートに寄っていく。

後はクロノ達にジュエルシードを渡せば、海鳴に危険物は無くなるわけだ…

…これで、やっとこの事件も終わる…となのはとユーノは浮かれた

表情を見せていた…

だが俺はいきなり背筋が震え、直感的に空を見上げた。
すると、紫色の雷がフェイトの上空から俺達に向かって放たれてくる!!

皆は張り詰めた気が抜けてるせいか、反応できていない。

「またかくそッ!!」スピンングオーバードライヴ『回天波紋疾走』!!!」

俺はギリギリのタイミングでスピンングオーバードライヴ『回天波紋疾走』を纏わせたトランプ
数枚を楯状にして雷を受け流す。

バリバリバライイイイッ!!

『スピンングオーバードライヴ回天波紋疾走』の円回転にブチ当たった雷は明後日の方向に流れてくれた。

何とか直撃は免れたが他の皆はッ!?

「ッ!?

」うわあッ!?

」にゃッ!?! な、なにッ!?

」な、なのはッ!?! 大丈夫ッ!?

」う、うん。大丈夫だけど…ッ!?! ジュエルシードがッ!?

皆もなんとか無事だったが……そこにあった九つのジュエルシードは綺麗さっぱりなくなっていた。

「フザケテンジャネエぞおおおおお!!!」

クソツ!!自分の娘よりクソツタレな宝石を優先しやがって!!!
雲の歪みに向かって、俺は怒りの叫び声を上げたが、俺の叫びは辺りに空しく響くだけだった……

.....

一方アースラでは、プレシアの居場所を突き止めようと、今の空間跳躍魔法の追跡を行っていた。

そして遂にエイミィがプレシアの座標を割り出し、リンディに報告する。

その報告を受けたリンディは立ち上がり、アースラに号令を発する。

「武装局員、転送ボードから出動！任務は、プレシア・テストロッサの身柄確保！」

「了解しました!!!」

……物語は一つの終焉へ向かう……

波紋の力、とくと御覧あれ!!

俺たちを狙った雷はプレシア・テスタロツサが放った次元跳躍魔法とやらで、その痕跡を追跡したエイミィさんはプレシアの居場所を特定できたそうだ。

アースラはプレシアの所在地を突き止め、何人かの武装局員を派遣する段取りらしい。

なのはとフェイトの決闘が終わったのでアースラへと帰還した俺たちだが、アースラの局員はフェイトとアルフを見るなり拘束具を持ち出しやがりました。

それだけならまだ止めてくれと注意するだけでよかったですけど…… ちよいとイケメンな感じの局員Aさんが

「この犯罪者のガキが!!」

などと叫びやがったんで…… プチっときまして……

「おい!!なんてこっ……」

『ドリアァッ!!』

ドグシャツ!!

「おほっ!!おほっ!!おほっ!!」

クロノが注意するより早く、『クレイジーダイヤモンド』でぶん殴っちゃいました(笑)

皆目が点になっています。はい。

「んなあっ!!ゼン?」
「!!?」

「大丈夫、だあ〜いじょうぶう。手加減したしちゃんと『治した』からよ」

ゆっくり起きあがる局員を見ながら俺は掴みかかってきそつなク
ロノを落ち着かせる。

「まあ、もつとまあ……………」

局員Aさんは顔を抑えながら立ち上がり、こちらに向き直る。

「キ、キサマ!!何をするか!」

「……………ぶはあっ」

!!!!!!???

『元通り』にや『治さない』がな(笑)」

なんとということでしょう。

先程までの爽やかイケメン風の面影は完全になくなり、鼻が潰れて
低くなりすぎた顔がそこにはありました。

アースラのスタッフの人たちもなのはたちも噴出しております。

まあ、あの顔で怒鳴られても笑っしかないわな……………かくいう治した
張本人の俺も笑いを堪えているんですがね。

ザマア!!イケメンがイケメン(迷)に進化した。

「き、君というやつは……………ぶ、クク……………」

クロノクロノ、噴出しちゃってるぜ?

「も、もつとむり……………かも…フ、っフフ……………」

なのはっさーん。頑張って堪えてー!!

「……………」プルプル

フェイトさん、俯いて顔真っ赤にしながら頑張って堪えています。その口を抑えながらプルプル震える様はなんとも可愛らしいぜ。

「プツ…グ!!…フ、フフフ!!」

ユーノにいたっては完全に笑ってるし……

「アハハハハハ!!プツ、ゲホゲホ!!アツハハハハハ!!ヒ、ヒハハハハ!!」

アルフさん。隠すつもりありませんねアナタ?おもいつきり指差してますね。

それで、自分の顔の違和感に気づいた局員Aさんはトイレまで走っていつて見えなくなりました。

まあすぐに彼の絶叫が響きわたってきたんですがね。

とにかく、残りの局員さん達にも言っときますか……

「俺のダチに手え出そつってんならもれなく無料で整形してあげますよっ」

そう言いつつ俺は『クレイジーダイヤモンド』を俺たちと局員の間腕を組んだ状態で仁王立ちさせる。

2mくらいの身長があるだけでも怖いのに『クレイジーダイヤモンド』は超!マッチョなボディも兼ね備えてる。

おまけに甲冑の隙間から覗く鋭い目で睨まれるもんだから局員さんみんな青ざめてるし。

とりあえず局員さん達にや俺の必死な O・N E・G A・I を聞

き届けてもらえたので拘束具は無しって方向になった。

…… KYO・U・HA・KU じゃないよ？ ホントだよ？

そんな子紆余曲折を経て俺たちはメインブリッジに向かった。

……

メインブリッジではオペレーターの人たちが状況を伝えられ、その様子がメインモニターに映し出されている。

そんな中、リンディさんがこちらに歩いてきた。

「お疲れ様。それから……フェイトさん？ 初めまして」

挨拶されたフェイトは黙って手の中のバルディッシュを見つめるだけだった。

横に立つアルフもフェイトを心配そうに見ている。

リンディさんは母親が逮捕される姿を見せたくないという気遣いからフェイトをほかの部屋に連れて行くよつ言い、なのはが自分の部屋に連れて行くこうとするがフェイトは一向にその場から動く気配はなかった。

よつぽど母ちゃんが心配なんだろうな……

モニターを見詰めるフェイトの目は不安で堪らないって書いてある。

『総員、玉座の間へ進入。 目標を発見』

そうこうしてるうちに、時の庭園に突入した武装局員たちが、玉座の間に辿り着き、プレシア・テストロッサを捕捉していた。

「プレシア・テストロッサ。 時空管理法違反の容疑で逮捕します」

「速やかに武装を解除してください」

局員の言葉に、プレシアは動じる事なく玉座に座ってる。局員がプレシアを囲み、数名の局員が後ろに回る。

プレシアはその場から動かさず、後ろに回った局員を睨みつけている。

だが、局員達が『そこ』に足を踏み入れた途端、態度が豹変した。

「何だ、これは!？」

「……………ッ!!」

局員達は『ソレ』を目にし、息を呑み……………手を触れようとした、その時。

「アリシアに触るなアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

ズガアアアン!!

轟く大音声。目を焼く閃光。

「なっ……………!？」

驚き、振り返った局員が見たのは……………黒焦げになり倒れ付す仲間達。

油断などしていなかった。いつ動いても、即座に鎮圧できるはずだった。

それは、わずか一瞬で崩れ去る。

『Photon Burst』

狼狽する残りの局員へ、攻撃魔法を仕掛けた。

「危ない、防いで！」

リンディさんが叫ぶが、

ドゴオオン!!

プレシアの雷のほうが早かった。狭い場所での爆発は、その威力を数倍に増し……局員達を蹂躪する。

シールドは砕け、吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。

「……他愛もないわね」

気だるげに、プレシアが言う。

戦闘開始から、たった数分。それだけの時間で、先行部隊はプレシア一人に敗北した。

「いけない！局員達を送還して！」

リンディさんの指示で、局員達はアースラに転送された。局員達は怪我を負ったものの、死者は一人もいなかった。

だが俺やなのは達はそんなことが頭には入ってこなかった。

……モニターに移る『フェイトにそっくりな子』から目が離せなかった。

顔は、同じ。そっくりとか、瓜二つとかいうレベルを越えて、同じ。長く、量の多い金髪が揺らめき、閉じられてはいるが、その両の瞳も、フェイトと同じ赤い色をしているだろう。

だが、共通点といえはその程度しかねえ。

残るのは、怖気を催すほどの異常な光景だ。

モニターに映る少女は、上下を密封された、瓶のような『水槽』の中で、薄緑色の溶液に漬かっていた。

「…ジーザスクライスト…」

モニター越しとはいえ、人間の死体を直視してしまい…俺は吐き気を催した…死体を瓶詰めにして保存している。

プレシアの異常な行動が恐ろしくて、不気味だった。

「ありゃあ……一体？ アリシアって、誰なんだ？」

「……プレシアの、実の娘だ」

俺の疑問に答えたのは、苦虫を噛み潰したような顔のクロノだった。

……『実』の娘ってなんだよ…じゃあフェイトは…？

「プレシア・テストロッサの娘、アリシア・テストロッサは……三年前に死亡している」

クロノが、諦めたように白状します。

「フェイト・テストロッサという名前は、プレシアの過去の経歴には、一度も登場していない」

モニターの向こうからフェイトを見るプレシアの目には嫌悪感しかない。

……あんな目、実の娘を見る目じゃネエ!!

「フェイト。せっかくアリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけの、役立たずな私のお人形」

…なんだよ？ それ？…人形…だ…？

彼女の言葉に答えるかのように、エイミィさんは顔を俯かせて静か

に語り始めた。

「最初の事故の時にね、プレシアは実の娘、アリシア・テスタロッサを亡くしているの。彼女が最後に行っていた研究は使い魔とは異なる使い魔を超える人造生命の精製。そして、死者蘇生の秘術、フェイトって名前は当時

彼女の研究につけられた開発コードなの」

名前ではなく、無味乾燥な名称。

フェイト……？……じゃあ……？

俺の脳みそが、勝手に結論へ辿り着いてしまう。

フェイト。フェイト・テスタロッサ。目の前にいるプレシアを母親と慕う少女。

記憶の中にいるプレシアは、随分と優しい母親で……

でも、ある境を機に、ぱったりとプレシアは愛情を見せなくなった。

その『境』ってのは、十中八九……

『そうよ。フェイト……お前は、プロジェクトFATEの実験体、その第一号……アリシアの模造品よ』

それは、他ならぬ母親のプレシアによって明言された。

フェイトは、アリシアのクローン。俺は、その事実を受け入れられなかった。

でも、俺の意思なぞお構い無しに、プレシアの口からは悪意が吐き出される。

『私がアリシアを取り戻すまでの間を繋ぐ……ただのお人形』

一言一言が、フェイトの心を抉っていく。

……やめる……

『だから』

嫌悪感を隠そうともせず、吐き捨てる。
やめる!!

『おまえはもう、いらぬわ。どこへなりとも……消えなさい!』

……これが……曲がりなりにも、母親の言うことかよ!?

「てんめえええええええええええ!!」

主人に向けられる悪意にアルフが怒りを露に、咆哮をあげながらぎりぎり拳を固める。

そして……

『いいことを教えてあげるわ、フェイト。私はね、あなたを創りだしてからずっと、あなたのことが大嫌いだったのよ!』

最愛の母親から拒絶の言葉が出た瞬間、フェイトが崩れ落ちた。

「フェイト……」

俺は咄嗟にフェイトを支える。

最愛の母親の拒絶の言葉はフェイトの心を深く傷つけ涙が流れるその目には光が無かった。

俺はフェイトを抱きしめながらモニター越しに映るファッキンババアに今まで抱いた事が無いほどの……

「……ふ、ふざけてんじゃねえぞクソババアアアッ!!!」

怒りって名前の炎が渦巻いてきた。

俺の荒らぶるような怒りの咆哮が届いたのか、モニター越しのプレシアは俺を一瞥してくる。

「こんな……こんなクソムカッ腹が立つ光景を見せられて、ド頭にこねえ奴はいねえよ!!」

モニターの向こうのファッキンババアを睨みつけながら俺は感情の赴くままに言葉を紡ぎだす。

「クローン? だから何だっただけだ!? たとえそうだとしても、ここにいらるフェイトは今こうして生きて一人の人間なんだよ! テメエの言うような人形なんかじゃねえ! コイツを否定することは誰にもできねえんだよ!! テメエはコイツの……フェイトの、世界でたった一人の母親だろうがあ!!!」

俺の言葉にプレシアは一瞬、ほんの一瞬だけ悲しい目をしたのを俺は見逃さなかった。

『……誰かと思ったらお人形がなついていた子じゃない……親? 私はそんな子を産んだ覚えなんて無いわよ、私の娘はただ一人……アリシアだけよ!』

そこでプレシアとの通信が切れた。

フェイトを抱えたまま、俺はなのはとユーノ、クロノに視線を向ける。

「俺はフェイトを医務室に連れて行ってから向かう。お前たちは先にプレシアのところに行け」

正直、今のフェイトは放っておけねえよ。

「……判った。なるべく早く頼むぞ」

「禅君…フェイトちゃんをお願い!!」

「頼むよ。ゼン…行こう、なのは……」

クロノが返事をすると同時に転送ゲートのあるほうへと走って行った。

それに続く形なのは、ユーノ、も転送ゲートへ向かって行く。

3人が出て行ったメインブリッジにはアルフと俺、リンディさん達だけが残った。

俺の横にいるアルフもプレシアに対する怒りが抑えきれねえのか、握りしめた拳から血が滴り落ちる。

「ゼン……フェイトのこと頼むよ、…私はあの鬼ババを一発ぶん殴らないと気が済まないからね」

「…わかってんぜ。俺もすぐにいくからよ」

アルフもなのは達を追って飛び出していく。

俺の横で心配そうな顔をしているリンディさんに俺は声をかける。

「とりあえず俺はフェイトを医務室に運びますね」

俺は足元に落ちたバルディッシュを拾い、フェイトをお姫様抱っこして医務室に向かった。

.....

俺はフェイトをベットに寝かせて、俺自身は近くにあった椅子に座る。

「……………」

フェイトは喋ろうともしない、というよりはそんな気力すらねえんだろう。

……………今までは母親が自分の全てだったんだ。しかもその母親に自分の存在を全否定され、いらないと捨てられたんだ。

顔を覗き込むと目には光が無く、その赤い瞳はハイライトが消失し、まるでルビーをそのまま埋め込んだかのような輝きしかもっていない。

既に涙は止まり、ただ規則的に呼吸を繰り返すだけだ。

…これじゃあ本当に人形じゃねえか……………ッ!!

「…なあ、フェイト……………フェイトはさ、人形なんかじゃねえよ」

俺はゆっくりとフェイトに語りかける。

「人形は人と話したって返事はしねえ……………けどフェイトはしっかりと返事をするじゃねえか。……………自分で考えるじゃねえか……………それに、短い間だったけど俺と一緒に過ごした時間は嘘偽りじゃない」

フェイトはフェイトだと、確かに今ここで生きていると。

「俺が作ったオムライスを食べて、美味そうな顔を、嬉しいって顔をしてくれたフェイトは人形なんかじゃねえ」

五感もちゃんとあることを。

「俺と一緒に笑ったフェイトは偽物なんかじゃねえ」

ちゃんと笑うことだってできるんだと。

「それによ……俺の手が感じているこの温もりも、嘘じゃ無え……お前は間違いなく、今ここに存る。俺はアリシアなんて知らねえし、俺の知っているのは俺と触れ合って、笑いあったフェイトっていう『女の子』だけだ。」

そう言っただけで俺はフェイトの手を握る。

すると、フェイトはしつかりと、握り返してくれた。
今はもう目に光が宿っている。

「……私は……どうしたら、いいのかな……？」

フェイトにとって今までは母親が自分の全てだったんだ……今は生きる目標が無いのだから。

その問いはフェイト自身が新しい生きる目標を探してるから出たのかも知れねえ……

だが、その『答え』を俺は持っていない。

「……お前がしたいようにしな。」

「私が……したいように……」

俺が答えても、それは俺の『答え』だ。俺からは言えない。俺は椅子から立ち上がって、扉へ向かう。

「そつだ。『自分』の歩く道は、『自分』で決めなきゃなんねえ……俺が言

えるのはここまでだ」

扉が開いたところで一度立ち止まった俺は背中越しに語っていく。

「とりあえず俺はあのババアをぼっこぼっこにして、お前に謝らせるつもりだ……」

娘にあんだけ暴言吐いたんだ。

キチツと謝ってもらわにや俺の気が済まん。

んでもって、あのババアの腹ん中、全部聞かねえとな。

あん時にチラツと見せた悲しい表情にはぜってえ何かある筈だ。

「ゼン………」

呟かれた声に俺は扉越しに振り向いて、フェイトを見る。

体を起こしたフェイトの俺を映すその瞳からは涙が溢れてるが俺は笑って声をかける。

「必ずフェイトの家族……『治して』みせっからよ」

俺は扉を閉めて、一度部屋に戻り、戦闘用のジャケットを羽織って転送ポートまで走る。

…もう誰になんと言われようと止まれねえぞ!! 覚悟しろよお!! ババア!!

.....

.....

「ステインガーブレイドツ!!」

S2Uから形成した魔力弾で傀儡兵を打ち倒す。かなりの数を倒したが、庭園の先はまだ長そうだ。

「くっ……数が多すぎる!!」

フレットもどきのユーノはチェインバインドで敵を縛り上げ、その圧力で傀儡兵をバラバラにしていく。

補助系統の魔法が得意なコイツらしいやり方だ。

「文句を言う暇があるなら少しは……倒せ!!」

右から迫ってきた新手の剣を避け、がら空きの顔面にステインガー
スナイプをお見舞いして撃ち抜く。

もつ何体目か解らないがまだ庭園内部にすら踏み込めていない。

苛立ちと焦りが募り文句を垂れているユーノに僕は少々きつめに
言葉を返す。

「言われなくても……やっつてるわ!!」

ユーノも喋りながらも次に迫ってきた大型の傀儡兵の間接部分にチェーンバインドを仕掛け崩していく。

僕と同じでユーノも余裕が無いのか、返事は何時もよりきつめだ。プレシア・テスタロッサの身柄確保の為に庭園に降りた僕達を待っていたのは数えるのも馬鹿らしくなる程の甲冑の群れだった。

斧を持った巨漢。剣や盾、槍を持った騎士のような風貌。

一番小さい騎士の姿でも、僕の二、四倍の背丈はある。………決して僕の成長が遅いわけじゃない!!

モニターから見た時は種類こそ豊富だったけど、数は少ないはずだった。

だが、いざ着いてみると入り口の扉が奴らの影に隠れる程にまで増していた。

今は全員が固まって四方から来る敵を駆逐している。

「あっ!!」

「っ!!クロノ君!!アルフさん!!」

「ッ!?しまった!!」

余計なことに気をとられて死角に気を配っていなかった!!

アルフの方は二体同時に相手をして、片方を倒した隙を狙われていた。

「コチラも攻撃の後で体勢を崩していて、回避は間に合いそうに無い。僕はプロテクションを張って攻撃に備えている。

せめて後一人いれば………まだか!?あの馬鹿野郎は!!

そして傀儡兵が振り上げた斧を僕へ叩きつける瞬間………

「リーバッフオーバードライヴ波紋肘支疾走 AND スタンドシュ トオツ!!!」

『ニニドリアッシュ』

バキイッ!!ズドンツ!!

その声が聞こえたと同時に、僕に迫っていた傀儡兵は『クレイジー
ダイヤモンド』にブツ飛ばされていった。

「うわっ!?.....え?.....ええッ!」

一拍遅れてアルフの驚いたような悲鳴のような声も聞こえてくる。
.....まったく、こいつは!!僕は緩む顔を抑えるため、少々怒り気味
に後ろにいるであろう馬鹿に声を掛けることにする。

「遅刻だぞ!!」

「ちつとばかり道が混んでてな!!」

そんなくだらない返しをするのは.....まあ奴しかいない。

後ろを向くと、青^{ターコイズブルー} 緑の波紋を漂わせて、左肘は打突の構えのまま
右手でアルフを抱きかかえるゼンがいた。

「丁寧に、獣のような笑みを貼り付けて.....とゆうか、お前...ア
ルフのドコ掴んでる?」

.....

まあなんとも絶妙なタイミングで間に合ったもんだな。

あたりを見渡すが傀儡兵はまだたくさんいるし、こりゃ骨が折れん
ぜ。

「禅君!!フェイトちゃんは!」

「なのはが切羽詰った表情で聞いてくる…よっぼど心配したんだな…まあ、皆そうか。」

「大丈夫だ。ちゃんと話しておいたからよ…それより予想外に敵さんが減っていない件について。もっとバカスカ撃ちまくれよな、魔砲少女さんよお!!」

「む、無茶言わないでなの!!っていつか発音が違うの!」

「…?合ってたんだろ?『blaster junkie』で?」

「英語になった!」

「やれやれ。自分を理解するって大事なんだぜい?

「そんなコントをしている内に傀儡兵はまたもや俺達へ突撃してきやがった。」

「さあて!!敵さんが来るし構えますかあ!!」

「迫り来る傀儡兵を睨みつけながら両足を開き、大きくスタンスを取って拳を握ると……」

「グツムニユン」

「あんツ!」

「ああん?なんだ?この右手に伝わるムニユムニユとした至高の柔らかなさ?」

「俺は視線を右手に向けると……アルフの豊満なお胸様を鷲掴みにしている my hand が……俺の掌に納まりきらずにはみ出しているのがなんとも……ヒロイデス。」

つつか、アルフさん。顔が真っ赤で可愛いよ、ぬk…(ry

「ゼ、ゼン……」おいうのは、その…み、見られると、恥ずかしいから…」

なんだ？なんだよ？なんですか？この可愛い生き物。尻尾と耳がふにゃ垂れてるし、ちよっと涙目で…いつもの元気一杯で、活発なアルフさんがこうなるって……可愛いすぎる。

なにこのデレアルフ？食べちゃいた……ってちよっと待ってアルフさん？今の台詞…それは見られてなかったらいいんですかい!? そうなんですかい!?じゃあちよいとあそこの木陰あたりに……

と、そんな感じでアルフと見つめあいながらラブコメってたせいで、またもや傀儡兵に囲まれたが……

シュピンツ!!!

ズバババババババツ!!

ビュンツ

黒い何か横切ると、辺り一面の傀儡兵が細切れに切り裂かれて地面に残骸がブチ撒けられた!!

だが最後の擬音はなんでっしやる?

なんか、傀儡兵達を斬った分とは別に一つ余分に鳴ったんですが

……
俺はそれを確かめるために振り向こうとしたんだが……皆さんや

?

なして俺の後ろを見て顔が青褪めてんですかい? ああ、理由はわかってるからいいですよ?

今、現在進行形で俺の首に突きつけられてる『金色』の魔力刃のせいですよ？わかります。

死神の鎌のような形状の魔力刃が俺の首を薄皮一枚のところで撫でてます……………

「……………ゼン？」

…聞き惚れるような声で俺の後ろから俺の名を呼ぶのは……………

「アルフの胸を掴んで……………ナニシテルノ？」

につこりと天使のような微笑を浮かべて黒いバリアジャケットのマントをたなびかせるフェイト（死神）様でした。

なにそれ怖い

あつちよつまって!!?悪気は別に…え?…感触ですか?そりやもう
Wonderful!!でMarvellous!!としか言いようが
……
あ?

あの……フェイト様?このバインドはなんでせう?なしてバル
ディッシュさんをそんな高々と振りかぶってんですk…ちよっ!
まって!?それ使い方がちが……

「…とにかく、」この傀儡兵を駆逐しつつ先に進まねばならない。入り口まであと少しだ…ゼン、大丈夫か？」

「だびじよぼぶでぶ。 ばび（大丈夫です。 はい）」

言葉になってなくてスマソ。俺の顔は今、春原さんと同じようにモザイクかけないと見せられないんです。

そして俺の顔を愉快で素敵なアートの変えてくださったフェイト様は…

「……………」

むすっとした顔で俺を睨んでいます。 はい。

まあ、さっきまでの落ち込んだ顔よか何京倍もいいんですがねえ。

「むっ…ゼンのえっち…ばか……………」

ぐぶおハアツ!!!?

よ、幼女にそんな風に言われるとは……キツイです。

クロノは呆れてるしユーノは苦笑い。

なのはもフェイトに賛成のようで怒った顔してるんだが、フェイトが元気になって嬉しいって感じも出てんな……アルフは顔真っ赤にして、俺と目合わせてくれません。

ああ、アルフがマジで可愛いんですけど……そんな風に胸を抱きしめないで下さい。

腕の隙間から零れるスイカ様がなんともGOOD……あっすいま

せんフェイト様。

「冗談ですから、はい。真面目にやります。ですからその目にハイライトを戻してください。」

フェイトが再びフェイト様になりそうなので俺は強引に話を進めることにした。

へタレ？何とでも言えや、コラ。

「と、とりあえず、コイツらぶっ倒すからちよいと俺から離れてくれ」

「なにか手があるのか？」

「ああ、『秘密兵器』がな。」

正直コレを使う日が待ち遠しかったぜえ!!

「なにかできる」とはなにか？」

クロノが聞いてくる…まあ、歯痒いんだろうな。一人でやらせんのが…

「ああ、クロノには前と同じ様に撃ち漏らしを倒して欲しいんだが頼めるか？」

「任せてくれ。だが、『秘密兵器』とはなんだ？」

よおし!!これで勝つる!!俺はジャケットの裏手に手を突っ込む。

…みんなが緊張した顔で俺を見ている…ククッ『秘密兵器』が気になるようだな………

俺は焦らすようにゆっくりと手を抜く。…ゴクリッ…と誰かの唾を飲む音が聞こえた…

「フッフッフ…これが『秘密兵器』…だッ!!」

俺はソレを抜き出し、掲げる。全員の視線がソレに注がれる……

手の小さい人でも握りやすい形状!!^{フォルム}透き通るようなマリンプルーの液体!!^{のりと}そしてラベルに刻印されている『除菌もできる優れもの!!』という祝詞!!!

そう!!俺たち料理人の心強い戦友であり、一家の台所を預かる主婦の救世主!!!^{メシマ}

その名も!!!

「ザ・ジヨイ!!!」(金属の歯車3的な言い方)

『『『『『ふっざけんあああああ
!!!!!!!』』』』』

アースラスタッフの叫び声とアルフ達の心からの叫び。
代表して、クロノから、リアットを、いただきました。ゴチです。

「な・ん・で!?洗剤なんだあああ!!!」

クロノ君、血管がはちきれそうですよ? beccooー beccoo

1。

「ふざけてるのか!? 馬鹿なのか!? そのブツ飛んだ頭の中は何も詰まってるのか!? そうなんだな!」

「失敬なツ!! Windows 2000 内蔵だぞコラアツ!!!」

「古いのツ!!」

「どやかましいわ!! まあ、口で説明するより見せたほうが早いから…」

「まあ、だまされたと思って見てな? おもしろいモン魅せてやっからヨオ!!」

おれはジョイを無造作にコインの様に上に投げる。

『クレイジーダイヤモンド』!!!

そしてクレイジーダイヤモンドがそれを空中でキャッチして上下に振り回す!!

『ドレドレドレドレアアアアアア!!』

シャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカ!!!

中に混ぜ込んだ水と混ぜり合って、少なめに入れておいた容器の余りの部分に『泡』が立つ。

俺はそれをクレイジーダイヤモンドから受け取って、ターコイズブルー青 緑の波紋を流し込む。

俺が今から使うのはあのサイコーにCOOLな男のサイコーに

カッケー技だツ!!その名もツ!!

「いくゼツ!!『シャボン・ランチャー』!!!」

手を振り、容器からシャボンを押し出す。

その漂うシャボン玉には一個一個に強力な波紋が流し込んである。傀儡兵達は脅威がないと判断したのか、まとめて突っ込んでできなかった。

やれやれ、テメエ等ちよいと迂闊だぜ？

「ぜ、ゼン!!ア、アレで大丈夫なのかい!」

不安になったのか、アルフが声を掛けてくる。

「まあ、見てなって……」

魅せてやるって言ったろ？

そして、傀儡兵がシャボンの群れに突っ込んでシャボンに触れた瞬間……

「^ボBOMB」

バグシャアアアアアアアアアアアアンツ!!

傀儡兵に当たったシャボン玉は青緑

ターコイズブルー

の波紋を撒き散らしながら轟音を立てて弾ける。

結果、シャボンに触れた傀儡兵はバラバラになる奴、上半身が吹っ飛んで下半身だけがヨロヨロと倒れていく奴等が大量生産された。

おい!!逃げるんじゃない!!

「第7話くおい!逃げるんじゃない!!

「おっしや!!前も綺麗になった事だし、クロノ!!俺と一緒にブッコミ
役を頼むぜ!」

近寄ってきた傀儡兵を一掃した俺はシャボン・ランチャーの威力に
口をあぐりと開けているクロノに声を掛ける。

まあ、呆けるのも仕方ねえよな、只のシャボン玉だと思ってたら爆
発して敵がバラバラになっちまったんだし。

「ハア...わかった。君にはいつも驚かされてばかりだな...」

溜息をついているのはとりま放置して、なのは達には後ろを着いて
来てもらいますか。

俺は振り向いて後ろの皆にも声をかけておく。

「残りは俺とクロノで引き受けるからお前らは後ろからついてきな。
ババアをぶっ飛ばすのに魔力を温存しとけ」

そのまま返事を聞かず、俺はジョイ君を装備して青ターコイズブルーの波紋を身
体に纏い駆け出す。

クロノもS2Uを握り締めて後ろから同じように走ってついてく
る。

「オラオラいくぜーッ!!」

さあ、クソツタレ共!!道を開けてもらおうぜえ!!

シャボン・ランチャーを走りながら生み出し、進路上の傀儡兵たち

に進んでいく。

すると屋敷の入り口の前に大きな魔法陣が現われてきた。

『oooooooooooo!!』

魔法陣から現われたのは、さっきまでとは比べ物にならないくらい巨大な傀儡兵だ。

屋敷の入り口の前でぶつとい棘付きの棍棒を携えたまま仁王立ちして俺達を見据えている。

さしずめ門番ってわけかよ、あんなのがいりゃあセキュリティ会社いらねんだろおなあ……けどよ。

「凄い魔力だツ!!二人共ツ!!一度さがつ……………」

ユーノが何か言ってるが、只そんな図体がでかいだけのモンじゃあ『俺たちは』止めねえぞ!!

そうなるのが当たり前といわんばかりの動きで、俺とクロノは同時にスピードを上げて並んで突っ走る。

俺の隣に並んだクロノはS2Uを顔と水平に構え、俺は生み出したシャボンデカブツを両の掌で挟み込む。

そのまま傀儡兵デカブツの足めがけて俺達は得物を振りぬく!!

「ステインガー・レイツ!!」

「シャボンカッター・グライディンツ!!」

クロノのS2Uから放たれる青色の魔力弾と俺の青ターコイズブルーの波紋を纏わせたシャボンは真っ直ぐに傀儡兵デカブツの足を射抜く。

シャボンカッター・グライディンは波紋カッターの応用技でシャボンを薄っぺらに潰して、滑走させる技だツ!!

たかがシャボンと侮っちゃいけないえ、コイツの切れ味は波紋カットと並ぶ程に鋭いからな。

両足を潰され、バランスが崩れて前向きに倒れこむ傀儡兵の顔面に俺とクロノは飛び掛る。

「うおおおおおおおおおッ!!!」

クロノは右手でS2Uを後ろ手に振りかぶり俺の青ターコイズブルーの波紋に近い青色の魔力をS2Uに纏わせる。

俺はジョイ君をしまって、ジャケットから取り出した『得物』に波紋を纏わせ、両手で握り締める。

だが、纏わせる波紋の色はいつもの青ターコイズブルーではなく、輝く銀色の波紋ッ!!

「ブレイク・インパルスッ!!」

その言葉と共にクロノはS2Uを打突のように傀儡兵の顔面の右半分に撃ち込む。

「メタルシルバーオーバードライヴ銀色の波紋疾走ッ!!」

俺も『得物』を両手で握り締めてバットと同じ要領で横薙ぎに振りぬく。

狙い撃つヒットポイントは傀儡兵の顔面左半分だ。

俺とクロノの攻撃が途中で交わり、俺の波紋とクロノの魔力が混ざって大きな『一撃』に変貌していく。

俺達二人の魔力打と波紋打による会心の一撃ッ!!安直かも知れねえが、あえて名づけるならッ!!

「インパルス・オーバードライブ衝撃の波紋疾走ッ!!!」

グワシヤッ!!

ゴオオオオオンッ!!

俺たちの『一撃』を顔面に受けて、デカブツ傀儡兵は屋敷の入り口にブツ飛んでいく。

そのまま屋敷の入り口にぶつかると、入り口を支えにもたれ掛かってその場に踏みとどまった。

生憎とまだこれだけで終わりじゃねえぞ、デカブツ!!

俺とクロノは間髪いれず接近して、もう一度傀儡兵の顔面に飛び掛る。

「おまけだッ!!」

『Blaze Cannon』

「釣りはいらねえからとっつけ、コリアッ!!」

『ドリアッ!!』

バガアアアアアアッ!!!

ゼロ距離からの砲撃魔法『ブレイズ・キャノン』と超パワー型スタンド『クレイジーダイヤモンド』の一撃ッ!!

さすがに耐え切れなくなった傀儡兵は入り口を粉碎し、中で俺達が来るのを待ち受けていた傀儡兵を巻き込んでブツ飛んでいく。ハデにブツ飛んだデカブツは二枚目の扉を粉碎したところで止まり、動かなくなった。

俺とクロノは屋敷の入り口だった瓦礫の上に着地して息を整える。

「ふう……なるほど……君の『波紋』と僕の『魔力』の相乗打撃、かなり強力だな」

「だな。お前の魔力はなぜか波動的に合わせやすいからな。それもあるんだろ。」

実際の所、俺の波紋にはまだそこまでの破壊力は無い。

修練を積みやまだ威力は上がるが今回はクロノの魔力っていうブーストがあったからあそこまでの破壊力に化けただけであって今の所役に立つのは波紋カッターなんかの切断系のみだ。

現状じゃ俺の最大の一撃は大型のトレーラーを真正面からでもガードできる『スタープラチナ』のガードを弾き飛ばせるパワーを持った『クレイジーダイヤモンド』に頼りきりだ。

まだ『クレイジーダイヤモンド』も全力で殴ったわけじゃないが、スタンドの力以外にも必殺の威力が欲しいところだね。

そんな会話をしていると、デカブツがいた場所から、呆然としていた四人が走ってくる。

まったく何を呆けてんだよお前等？

「ハイハイ、遅かったじゃねえか」

「まったく。立ち止まってる時間は無いぞ？」

俺とクロノはやや息切れしているのは達に呆れ気味に注意するがそれを聞いたユーノが凄いい剣膜で詰め寄ってきた。

「なんでそんなに平然としてるんだッ!?これだけ思いつきり暴れておいて言うことはそれだけなのかッ!!」

ユーノはそう言って叫んでくるけど俺にはよく解らなかつた。

何言ってるんだ、コイツ?向こうが喧嘩売ってきたんだからだから別によくなえか?

って良く見りゃ他の3人も頷いてるし。

「大体ッ!ゼンツ!君の持ってる『ソレ』は一体なんなんだいッ!」

さつきから凄い勢いで取り乱してるユーノは先ほど俺が使った『武器』を指して叫びだす。

クロノ達も視線はコレに向いてるし……そんなに驚く程のモンか?

別にこんなもんそこら辺にある普通の得物だろ?

俺が持っているのはグリップと打撃部の内側がソリッドブラックで塗装され、外側は中心部から円形にステンレスコーティングを施し、円の淵をワインレッドで彩った俺専用の得物だ。

俺が数々の強敵と闘った時、いつも俺を助け、支えてくれた相棒、そ
うッ!!

「フライパンですが何か？」

ゾウさん印のフライパンです

「なんで」「いつ何言ってるの?」「みたいな顔をするんだああッ!!!?」

俺の返答に頭を抱えて叫びだすユーノ君がそこにはいた。

「俺だから(笑)」と言ってみたら殴られました。解せぬ。

.....

そして中に入って通路を進んでいくと、いたるところに虹色と黒色

の穴が開いていた。

何だコリヤ？

「なあ、この虹色の穴は何だ？」

俺は横と一緒に走るクロノに聞いてみる。どっかに繋がってるのかね？ ファンタジーな世界とか。

「その穴は虚数空間……魔法が一切発動できない空間だ。次元航行艦ですら、あれに落ちたら重力の底まで真っ逆さまだよ……飛行魔法もデリートされ、もしも落ちたら重力の底まで落下する……ようは『絶対に戻れない空間』さ。」

訂正。行き先はすつごく……危ない空間です。

まんま地獄への片道切符じゃねえか……落ちない様に気おつけよ……

そのまま危ない空間を避けて通路をしばらく行くとまた傀儡兵が襲い掛かってきた。

コイツ等しつこいね、ホント。

まだ傀儡兵達と距離が空いているので先頭に立ってる俺とクロノ、アルフの三人は構えて奴等を待ち構える。

なのはとフェイトは後方で待機してもらってる。

正直、この二人の魔力は温存してもらった方が有難いからな。

「……ゼンツ!!君に……どうしても聞いておきたいことがあるんだッ!!」

だが、傀儡兵を待ち構えてるといきなりユーノが真剣な顔で俺を見つめて問いかけてきた。

そんな目で見詰められたら……萌えちゃうじゃ、ゲフンツ!!ゲフンツ!!

や、やめよ……かなり真剣な話しみてえだし……でもなんなんだよ、

一体？

「なんだよ？いきなり」

「おい、フェレットもどき!!この状況で何を言い出すんだ!」

クロノもワケが解らないのか、ちよいとキツめの声で横から会話に入ってきた。

おいおい、気が立ってて怒鳴るのはわかんねえでもねえけど、そんなキツイ言い方……

「クロノは黙っていてくれ!!」

だが、何時もの弱気っぽい雰囲気は感じられないぐらいの強い声でユーノはクロノに叫んで反論した。

これにはさすがに驚いた俺達全員がユーノに視線を向ける。

だが、その視線を一切無視してユーノは真剣な顔で俺を見詰めていた。

「……ゼン……君はバリアジャケットも、魔力ももたない普通の人間だ……なのに何故、そんなに堂々と戦えるんだ!? 一歩間違えば大怪我を負うかもしれないのに!! 何故、恐れないんだ!」

「……ああ?」

ユーノ……お前ほんとにいきなりどっしたんだよ?

「君のその『強さ』は……どこから出てくるんだッ!」

いきなりの質問に面食らっているがそれは俺だけじゃなく、クロノ、フェイト、アルフも俺と同じような顔をした。

だが、なぜかなのはだけはユーノを心配そうな顔で見ている。
俺を見やるユーノの表情は辛いとか苦しいとか……なんか、そんな感情がごっちゃ混ぜになったような……そんな顔だ。

「僕は…なのは巻き込んだこと後悔している…それに、もしかしたら僕が巻き込んだせいではのが死ぬんじゃないか……自分も死ぬんじゃないかって…怖くて…怖くて仕方ないんだ……君は、僕らと違って魔力が無いのに…本当の意味で『命がけ』で戦っているのに…教えてくれ…なんで君はそんなに強いんだ？…一体なんのためにあの傀儡兵に恐怖せずに命を賭けて戦えるんだい？……」

「……ユーノ君」

「情けないのは解ってるしこの場で聞くような事じゃないのも解ってる……でも、どうしても知りたいんだ…教えてくれ」

そう言ってユーノは辛そうな顔を浮かべたまま俯いてしまう。

……こりゃ、相当参ってるな…なのは巻き込んだことを後悔している、か……仕方ねえ。

『あの男』の名ゼリフ、借りますか。

「……俺が恐かねえのはな、守りたいモンのために戦うからだ…その守りたいモンのことを考えるとよ、自然と『勇氣』が沸いてくんのさ……俺は『勇氣』があるから戦えんだ!!」

俺が恐怖しない理由を語り始めるとユーノの顔が少しづつ上がってまた俺を見詰める形になった。

「……………『勇氣』……」

ユーノは小さく、でもしっかりとした声で俺の言葉を反復する。

自分の中にしっかりと刻み付けるように……

「そうさ……『勇氣』だよ……そして『勇氣』ってのは誰にでもある……それが俺達人間が生まれたときに絶対にもってる『人間らしさ』だからだ!!」

「ッ!？」

驚くユーノに俺は口元を吊り上げて笑いかけて、迫り来る傀儡兵一体の元に駆け出す。

しっかり観て、聴いて、そんで刻み込めッ!!

「人間讃歌は、『勇氣』の讃歌ッ!!人間の素晴らしさは勇氣の素晴らしさ!!いくら強くてもこいつら傀儡兵は、『勇氣』を知らねえ!」

劍の射程距離内に俺が接近した傀儡兵は得物の劍を横薙ぎに振り俺を真っ二つにせんと迫ってくる。

「ッ!?!ゼンッ!!」

だが、劍を振るい終わると其処には俺の存在は無い。

劍が当たる直前に波紋を込めた両足でジャンプして奴の無防備な頭上に回避したからだ。

「そんな奴らあ……」

!!
俺はそこで一旦言葉を切って近づいた傀儡兵の真上に飛び上がり波紋を込めた回転蹴りをドリルの様に回転しながらド頭に叩き込む

「ノミと同類だあッ!!!トルネディーオーバードライブ波紋乱渦疾走ッ!!!」

ズガガガッ!!

俺は傀儡兵の残骸に着地してトルネディーオーバードライブ波紋乱渦疾走の回転の勢いを止める。

そのまま呆けてるユーノに向けてサムズアップしてやるとユーノも憑き物が落ちた顔で笑ってた。

やれやれ、こーゆうシリアスなのは俺のキャラじゃねえんだけどなあ……俺は断然シリアル派です(笑)

そうして、虚数空間を避け、傀儡兵を駆除してどんどん奥へ進むと、俺達は分かれ道まで来たので一度立ち止まった。

「とりあえず、ここから二手に分かれて進もう。やることは二つ。プレシアの逮捕とこの庭園の駆動炉の停止だ。こんな大掛かりな妨害だ。恐らく、エネルギーは駆動炉から供給されているはず。駆動炉を止めれば仕掛けも停止するはずだ」

ここでクロノから今後の方針が提案されるが『プレシアの逮捕』という言葉にフェイトが複雑な顔をしている。

プレシアに、母親に対しての親子の情がそうさせてるんだろうな。クロノもそれが判っていてあえてそう言った感じだ。

やれやれ、そこまで憎まれ役にならなくてもいいだろうに……仕方ない。

「ハイハイハイ。クロノ、『逮捕』じゃなくて『確保』の間違いだろ?」

「え?」

「ッな!?ゼンッ!!」

「わざわざ憎まれ役にならなくていいんだよ。まったく、立場のせいかもしれないけどそこまでしなくていいんだっつもの」

俺とクロノの話には誰もついてこれないよついで首を傾げている。

まあ、今回のことを知ってるのは俺とハイミィさんにリンディさんだけだからな。

俺は首を傾げてるフェイトに向き直る。

「心配すんな。全部終わったらちゃんと話してやんよ。だから今は目の前のことに集中しとけ」

「……………うん。わかった。」

よしよし、納得したところで話を戻しますか。

正直、ココでいつまでも時間食つわけにゃいかねえしな。

「んじゃあ、ババアのところには誰がいくよ？俺的にはあのババアをボッコボコのけっちゃんけっちゃんにしたいからそっちがいいんだが？」

具体的にはボッコして、治して、ボッコして、治して、ボッコして……以下エンドレスぐらいいに

「…さすがに、僕は…」

「じゃあは…」

「あんまりやりすぎると君を逮捕しなくてはならないんだが…」

「ゼ、ゼン…あんまり、母さんにひどく…しないで欲しい…な…」

「あたしはもう大賛成だよ!! 一緒にあの鬼ババをボコボコにしてやるうよ、ゼン!!」

俺の考えに共感してくれたのはアルフだけだった。ちくせう
しかしあんだだけ酷いこと言われたのにフェイトは優しいなあ、オ
イ。

「…では、僕とゼン、フェイトにアルフで行こう…君達二人はプレシア
に向き合わなくてはならないし、僕はゼンの暴走を止めないといけな
い……駆動炉にはなのはとフェレットもどきしかいけないが…なの
は、大丈夫か?」

俺がフェイトの優しさに感動している内にクロノが面子を決めた。
つつか、テメエ、俺の暴走ってなんだつつかの。

「うん!!任せて!!」

「誰がフェレットもどきだッ!?!」

ユーノとなのはは元気に?返事をして階段に向けて歩いていく。
二人共殺る気?は充分だな。とにかくチーム分けは決まったし、そ
んじゃまっ!!

ユーノにはいっちょ俺からグレートな饞別を渡しておきますか。
俺はポケットから一枚のカードを出す。

「ユーノ!!」

俺はユーノが振り向くか、振り向かないかの内に取り出したカード
を投げる。

「?なんだい?ぜ!...っわッ!」

振り向いたユーノは俺が投げ渡したカードをギリギリ受け取った。
んで、俺が投げ渡したカードは何かっつと……

『The Charriot!!ラッキーセブン、戦車のカードだ。お守りとしての意味は『常勝と勇気』…気休め程度だがよ、持ってけや……しっかりと、なのはを守れよ!!』

そう、投げ渡したのは俺のお気に入りのタロットカードだ。

俺は呆けてるユーノに拳を突き出して笑いかける。

俺からの粋な饞別を受け取ったユーノはしばしチャリオッツのカードを眺めてからポケットにしまった。

「ありがとう。ゼン……絶対になのはを守るよ」

ユーノは顔を引き締めて、俺と拳をぶつけるとそのままのはと一緒に階段の奥を目指して走っていった。

「では……僕達も行い」

ユーノとなのはが完全に通路の奥へ行ったのを見計らってクロノが俺達に号令をかける。

クロノの言葉を合図に、俺達は気を引き締め最下層に向けて再び、走り出す。

.....

「サンダー・レイジー!!」

フェイトのバルディッシュから金色の雷が放たれ、雷を受けた傀儡兵達は爆発し黒焦げのジャンクに変わっていく。

もはやリサイクル対象外の再利用不可な可燃ごみでしかねえな。

「スティングァー・スナイプ!!」

クロノのS2Uから、青い閃光が放たれ、奔る閃光は立ち塞がる傀儡兵達を無慈悲に貫いていく。

貫かれた傀儡兵達は胴体に大穴を開けられ上半身と下半身がサヨナラバイバイ状態で倒れて動かなくなった。

「はああああ!!おりゃあああああッ!!」

アルフも自慢の鋭い爪で並み居る傀儡兵をぶつ切り、膾切り、真つ二つ、ざく切りといった様々な切り方で次々と奇怪なオブジェに変えていく。

まあ、ぶつちやけ切り方なんざアルフのその時の気分次第だろうっけどな。

そーゆづの狙ってやるのとかできるよつに見えねえし。

時にはフィンガークローブに包まれた拳にオレンジ色の魔力を纏わせて傀儡兵の顔面や胴体を穿ち、ぐしゃりとへこんだ出来損ないのおもちやを生産してる。

「ごうおりゃあッ!!メタルシルバーオーバードライヴ銀色の波紋疾走ッ!!」

メタルシルバーオーバードライヴ俺も銀色の波紋疾走を纏わせたフライパンで、並居る傀儡兵をぶ

ちのめしていく。

フライパンの円形の面打撃を受けた傀儡兵はフライパンの形に殴られた部分がへこんで倒れていった。

メタルシルバーオーバードライヴ
銀色の波紋疾走の波紋を纏わせ全体的なステータスがアップアップしてるフライパンは正に軽い・頑丈・炎耐性と三セットのお得能力を備えた立派な武器だぜ。

そのままザコを蹴散らして（蹂躪して？）しばらく走っていくと今までよりも豪華で大きな扉の前に着いた。

お〜お〜、雰囲気出てるねえ。

「フェイト、此処か？」

「うん、多分だけど……母さんがいるー！」

扉をジッと見つめるフェイトの目は真剣そのものだ。

んじゃ、とつとつとつ対面といきますかね。

「だけども……」

フェイトの傍に立つアルフがおもむろに扉に触れると、なにやら見えない障壁に阻まれる。

バリヤかよ……益々ラスボスの間違って感じじゃねえか……フェイト達が苦い顔をしているのを見るとどうやら強度はかなりのモンみてえだな。

「この扉以外の道は無いのか？ 込められた魔力量から見るに、相当固いぞ」

「あたしたちが知ってるのは、此処だけさ」

「おつするに迂回路は無いと……あーッ！！じれってえな、おいッ！！」

「オーライ……ちよいと離れてな」

俺は無造作に扉に近づいていく。

扉がここしかねえんなら………ブチ壊せばよくな？

「ゼン、なにをするの？」

俺の行動の真意がわからねえのか、可愛らしく首を傾げるフェイトたん。

「ハア……なあベイビー？俺達はお上品にお茶しにきたんじゃねえんだぜ？殴り込みにやそれなりの挨拶ってえモンがあんだろ？」

ニヤリと笑う俺の後ろから『クレイジーダイヤモンド』がその巨体を具現する。

そのまま『クレイジーダイヤモンド』は大きく体を後ろにしならせ、右腕にあらん限りの力を籠めてギチギチと音を上げながら引き絞られていく。

丸太のような両足は大きく開かれどっしりと大地に根付き、引き絞った拳と反対向きに腰は限界まで捻られていく。

その『構え』はスリングショットを限界まで引いたかのような形で、引き絞られた右腕の『拳』は『弾丸』そのものである。

まあ、装填された弾はかなり、かなーり『大型』だけどな…

キュイイイイインツ!!

引き絞られた右腕の拳にスタンドの破壊のエネルギーヴィジョンが青^{ターコイズブルー}緑の光を放ちながら集まっていく。

ぶっちやけ『スタープラチナ』の最強の一撃必殺技にあった『スター

ブレイカー』にそっくりだ。

でも『クレイジーダイヤモンド』でそれをブチかますわけだから……『クレイジーブレイカー』？『ダイヤモンドブレイカー』？……いやむしろ『プッツンブレイカー』かね？

とりあえず後ろで疑問顔になってる3人に説明しとかねえとな。

『クレイジーダイヤモンド』のパワーってさあ……大型トレーラーのスピードの乗った突撃でも真っ正面から弾き返せんのよ」

俺が語る間にも『クレイジーダイヤモンド』のパワーは『溜め』によりグングン上がっていく。

後ろにいた3人も意味がわかったのか、顔が少々引きつっている。

「パンチのスピードもよお……計ったことはねえけど、拳の射程距離なら300〜400キロはでるんじゃないかねえかな？」

もはや、反対方向をむいて背中越しに淡々と語る俺の姿は、恐怖以外の何者ではないだろう。

もう『クレイジーダイヤモンド』の拳に纏われてる青ターコイズブルーのエネルギーは最初と比べると二回りほど大きくなってる。

「そんなパワーとスピードを溜めに溜めて……一つの『拳』からプッツ放ったらよお……」

俺はディ・モールト（非常に!!）イイ笑顔で3人に振り向いた。

「スゲエぞ？まじで」

俺の言葉の途中で3人は反対を向いて、地面に飛び込みながら頭の上を手を組んだ状態で伏せる。

目の前にいる二人を無視して、俺はラスボスの前に来たのにまだ起きない3人にモーニングコールをかける。

「おい3人も!!いつまで寝てんだ!?もうラスボスの前だぞ!?とつと起きろよ!! hurry!! hurry!! hurry!!」

こんなクライマックスで燃える場面で寝てんじゃねえよッ!ったくッ!

「君(アンタ)(ゼン)のせいだああああ(だよ)ッ!!!」

俺の言葉に絶叫しながら煙の中から起き上がった3人はところどころ煤けております。

悪い。反省も後悔もしてねえや(笑)

汚れた服の煤を払って起き上がったフェイトは気を取り直しそのままプレシアに近づき、向き合う。

俺達も自然と気が引き締まる。

すぐにでもプレシアを殴り倒してえ気持ちが悪くなるが、なんとか気持ちを押さえ込む。

今はフェイトがプレシアに想いを伝えて向き合う時なんだ。

俺が出しゃばって台無しにはできねえ。

「……母やぞ」

「…まだ私の事をそう呼ぶのね。ここへ一体何をしに来たのかしら」

「あなたに言いたい事があって来ました……」

フェイトは俺達から一步前に踏み出し、プレシアに近づく。

「私は話をしに来ました、貴女の娘……フェイト・テストロッサとして

…私はアリシア・テストロツサじやあり
ません。貴女が作ったただの人形なのかもしれません」

フェイトは悲しそうに、だけどその事実を受け止め、噛み締めるように呟いていく。

「だけど私は、フェイト・テストロツサはあなたに生み出してもらって、育ててもらったあなたの娘です」

プレシアはフェイトが一言話すたびに、悲しそうに顔を歪めていく。

「…………だから何だというの？今更あなたの事を娘と思えというの？」

「あなたがそれを望むなら、私は世界中の誰からもどんな出来事からもあなたを守る。私があなただからじゃない。あなたが私の母さんだからッ!!」

フェイトは自分の気持ちを伝えた。

それを聞いたプレシアの表情は、誰が見ても判るほどの『悲しみ』と『喜び』という葛藤の表情を浮かべている。

だが、その表情はすぐに引っ込む。

「私は娘を…アリシアを取り戻す。その為に、アルハザードに行くのよー」

プレシアは自分に言い聞かせるかの如く叫んでフェイトに杖を向け、魔力を込める。

「母やろ……………」

「ゼンツ!!」

「ッ!?ゼンツ!!」

俺は余りの激痛に立っていられず膝をついて膝立ちの状態になった。

そのまま地面に倒れそうになったがアルフ達が駆け寄って俺を左右から支えてくれる。

雷の直撃を受けた俺の体からは肉の焼けた嫌な匂いが上がってバチバチと音が鳴っていやがる。

…あゝ…痛てえな…クソツ……

「馬鹿野郎ツ!!バリアジャケットも展開して無いのに何を考えているんだツ!!」

俺の傍へ駆け寄ったクロノから罵声がくる。

正直、馬鹿野郎はひどくね?

「ゼンツ!?ゼンツ!?しっかりしておくれよおツ!!」

アルフは俺を横から支えながら両の瞳から大粒の涙を零してる。

あゝあゝアルフ…そんなに泣いちゃって…でもまあ、心配してくれんのは嬉しいねえ。

フェイトも涙がポロポロ出てるし。

「ゼンツ!!早く『クレイジーダイヤモンド』をツ!!」

……………んあ?……………あゝ、そついやアルフ達には言っていないんだっけ?

「悪い…俺の『クレイジーダイヤモンド』は『自分の傷は治せない』んだよ…世の中…都合のいい事ばかりじゃねえってなあ……………」

俺の言葉の意味を理解した二人の顔はドンドンと真っ青になっていく。

「そ、そんなッ!？」

「う、嘘ッ!? どうしてッ!? なんて自分の傷が治せないのにこんなことしたのッ!?! い、嫌だよッ!?! 死んじゃ嫌あッ!!」

手足が痺れ、地面へと膝を着いている俺を支えながら二人は涙を流して叫ぶ。

…心配してくれんのは嬉しいがな、こんぐらいの傷じゃ俺は死にやしねえよ…

俺は傍で涙を流してるフェイトの問いを無視して両足を踏ん張って立ち上がる。

くっそう!! やっぱり半端じゃネエよな!!? このオバハン!!

……体ん中に建物の破片が入って痛てえ……

「……………分からない……………何故、何故!? 無関係のボウヤがその【人形】の為にそこまでするの!?!……………」

オバハンがなあ〜んか言っちゃってるし……………フザケンナヨこのアマ!!!

俺は体に波紋を流して、痛みを和らげて立ち上がる。

「…ッ!?!…ハッアア!!…友達^ダが泣いてたら一緒に泣かした奴をぶん殴ってやるのが普通でしょうが? 違いますかい? オ・バ・ハ・ン? アンタ歳食いすぎて脳細胞まっちろですかあ〜? (笑)」

舌を出しながら中指をブツ立てて、思いつきり馬鹿にした顔で俺はプレシアを睨む。

俺はダチを、フェイト・テストロツサって女の子を守りたいからやってんだよ!!ばあゝかッ!!

「ゼン……ぐすっ……」

「……………」ビキッ

俺の言葉を聞いて二人の表情は対照的に変わっていく……ん?『二人』?

あれ?……もしや俺今、フェイトを守りたい云々を口に出しちゃった?うっわ!!恥ずいっ!!

……フェイトさんや?そのプリチィーなお顔がトマトみてえに真っ赤なのは、なして?…涙も出てるし…フラグタテオボエナイヨ?ホントダヨ?

…そしてプレシアさんや?額の青筋が大変なことになってますよ?
あっ!!ちょ!?やめて!!バチバチいってるうー!!?

「…もうこれ以上は容赦はしない!!私はアリシアを…娘を取り戻すのッ!!」

そういつてプレシアは砲撃を俺達に撃ってくる。

俺達は散開してそれを避け続ける。

「ウォラッ!!波紋カッター!!」

こちらにも負けじと攻撃を繰り出すが、どれも強いシールドに阻まれてしまう。

シールドに阻まれた波紋入りのトランプはジュッと音を立てて無

くなっちゃった。

「クソッ!! どんだけ硬えんだよッ!! あのシールドッ!!」

俺は、さっきの砲撃のダメージで強い波紋を練ることができない。
今の俺じゃあ単体でのシールド突破はまず無理だ。

波紋で痛みを和らげちゃいるが、それはあくまで痛み止めの効果しかねえ。

『クレイジーダイヤモンド』は近距離でこそほぼ無敵を誇るが、近づけないことには打つ手がない。

……このままじゃジリ貧じゃねえか!?

「くそっ!! スナイプ・ショットッ!!」

「くんのおおおッ!! わッ!!? うわわわわッ!!?」

クロノの攻撃も止められ、アルフは俺と同じで雷撃のせいで近づくことすらできずにいた。

有効な攻撃を放っているのは誰もいない。

フェイトは……まだプレシアを攻撃するのに迷いがあるみたいで、攻撃は避けても、反撃はできずにいる。

リンディさんも次元震を抑える魔法の制御で手一杯のため戦闘には参加できない。

駆動炉を止めにいったのはとユーノもまだこっちは来れないだろう。

……こりゃマジに万事休すか?

「だあーッ!! もうッ! これじゃ鬼ババをブン殴れないじゃないかッ!!
こうなったら無理矢理にでも突っ込んで……」

アルフはそう言ってプレシアの周りに飛び交う雷の嵐に突撃しよ

うとする。

「いやいやいやッ!? 待て待て待て待ていッ!?

「アルフ、お前バカかよッ!? あんな嵐の中に無理矢理突っ込んでみるッ!! さっきの俺みたいにローストされちまうぞッ!?

決死の特攻をカマそうとするアルフに俺は怒鳴って注意する。

「こんがり焼きあがったアルフなんて見たくないからねッ!? そんなん誰得だよッ!?

「で、でも」のままじゃ……うひゃあッ!?

なんて話してる間にも雷は俺達にランダムな方向から降り注いでくる。

くっそう、話してる時ぐれえ狙うなッ!?

「ボンヤリするなッ!! 余所見してると丸焦げだぞッ!?

「わかってるっつのッ!! アルフッ!! 無茶すんなよッ!?

「わ、わかったよッ!?

クロノの声を引き金に俺とアルフはもう一度バラけて攻撃を避け、攻撃のチャンスを待つ。

だが……

「……………グッ!! ……ッ!? ゴハッ!?

全員が万事休すかと思ったのに、唐突にプレシアの魔法が止んだ。何事かと思いきやみんながプレシアの方を見ると、プレシアが胸を抑え

ながら咳き込みだして、吐血を起こした。

もしかして『病的』じゃ無くて本当に『病氣』だったのかよッ!?

「母さん…」

血を吐いて苦しむプレシアに真っ先に駆け寄ったのはフェイトだった。

それに続いて、俺たちもプレシアに駆け寄る。

なのはとユーノも今、着いた様で、プレシアの吐血を見て、目を丸くしている。

フェイトは必死にプレシアの介抱をするが吐血は止まらない。

俺は『クレイジーダイヤモンド』を呼び出そうとしたが……

「ぐっ、ぐっ……!!」「ほっ!!」「ほっ!!」

「母さん!!」

プレシアが血を吐き苦しむ横でフェイトが必死に叫んでいる。

「……もう限界ね……ねえ、フェイト?」

「?か、母さん?」

吐血が収まるとプレシアは自嘲するよつな笑顔を浮かべてフェイトに声を掛けた。

だが、フェイトに語りかけるその声音は今までのよつな憎しみの声じゃなくて、優しく、慈しむよつな声だった。

「……「じめんなさいね」

その言葉に、俺の思考が止まっていく。

周りの皆もプレシアの言葉に驚きの表情を浮かべていた。

「えっ？」

「…怖かったの。あなたがアリシアの記憶を持っていないとわかった時、私は狂気に身を委ねた…そんな私でもあなたは母さんと言って、慕ってくれた。だからかしらね、いつの間にかあなたを好きになっていたわ」

フェイトは何も言わず、プレシアの言葉に耳を傾ける……

「……」

「けどそれを認めてしまうとアリシアの愛を忘れてしまいそうで、狂っていた私はそう考えて、あなたへの想いを消そうとした。…でも、無理だった。そこからはもう想いがせめぎあって、もう何が何やらだったわ……」

「母さん？」

…俺はプレシアに何も言えない…俺には……惜しめない愛情を注いでくれたオヤジとおフクロ…爺ちゃんがいるから……だから、死んでも気持ちができるなんて口にだしちゃいけない…

そしてプレシアは崩れそうになる体に鞭を打ち、傍のフェイトを押し退け立ち上がる。

ゆっくりと、のっそりと歩く先にはアリシアの眠る生体ポッド。そして虚数空間を覗かせる大穴。

「母さん…何を…？」

フェイトもプレシアの行動がわからないように戸惑っている。

「フェイト…私のもう一人の娘…そしてアリシア…あなたにも…謝らないと…」

…謝る？…おいまさか!?

「フェイト、母さんはあなたの幸せを祈るわ…」

「ッ!?母さんッ!!待って!!」

目を見開いたフェイトはプレシアに駆け出す。

「ちよつなら…私の愛しいもう一人の娘…」

プレシアは最後にフェイトへと微笑みかけ、アリシアと共に虚数空間へと身を投げる。

フェイトは手を伸ばしながら、その光景に涙を流す……落ちていく母に目を奪われて……

フェイトはプレシアを追いかけて飛び込もうとするが、傍に居たアルフに慌てて腕を掴まれる。

「離して、離してよーアルフッー母さんがッー!」

「ダメだよッ!!落ちたらフェイトも死んじゃうよッ!!」

泣きながら懇願するフェイトにアルフは悲しげに首を振って拒否する。

フェイトを悲しませたくは無いが、虚数空間に飛び込めば命は無
い。

自分はフェイトの命を守る使い魔だから……だから、例えフェイト
のお願いでも手は離せなかった。

「母さああああああん!!」

フエイトの涙ながらの絶叫が、時の庭園に響き渡っていく。

……その場にいた人間は誰もが虚数空間に落ちていくプレシアに視線を奪われていた……だから、一人の優しすぎる大馬鹿野郎のブツ飛んだ行動を誰も止める事ができなかった……

……

「……「ごめんささいね、アリシア……」」

私は愛しい娘の入った生命ポットを抱えて虚数空間を落ちていく

……

生命ポットの中にいる自分の愛娘であるアリシアは、永遠に瞼を開ける事は無い。

……だが、これで良い。

私がここで全てを被って死ぬ事で、フェイトは管理局から罪に問われる事は無いだろう。

今までの子にしてきた事を差し引いても、本当に悪い母親だったと思う。

でも、これから先、あの子の未来に私が存在してはならない。

例えばあの子が私を想っていてくれても、フェイトの傍にはあの子を任せられる存在が居た。

「……確か……ゼン君……だったかしら？」

魔導師で無いにも拘らず、フェイトのために我が身を傷つけて戦う少年の名を臆げに思い出す。

管理局が管理できない魔法外文化世界の住人であるにも拘らず、とても不思議な術と存在でフェイトのために戦いを挑んできた少年。

咄嗟に自分の体を楯にしてフェイトを守ってくれたあの子なら……この先もフェイトをあらゆる障害から助けてくれる。

……彼自身とは少ししか話していないけど、そんな確証の無い奇妙な実感が湧いているのだから不思議だ。

「フェイトを頼んだわ。禅君……」

もう思い残すことは無い……本当は、娘であるフェイトの晴れ姿を見れるまでは生きたかったけど、この身体ではそれも叶わないでしょう。

ならばいつその事ここで朽ち果てるのがお似合いの最期だ。

このままアルハザードへ辿り着けなくとも、それが私自身の罪だといふのなら喜んで受け入れよう。

この堕ちていく感覚に自身を委ね、そのままアリシアのポッドを抱えて目を閉じようとしたとき……。

「あなたが傍にいなきゃフェイトが悲しむじゃない!!なのにこんな命を捨てるようなことをして……もう戻れないのよ!!?」

「……」

黙って私の言葉を聞いてるけど、まだまだ苛立ちは納まらない。

「私の……私の最愛の娘を悲しませるなんて……」

怒りに任せて更に罵声を浴びせよつとしたけれど……

「じゃあてめえは何で逃げたんだよ!!?」

彼が放ったその言葉に私は「」の句が出なかった。

……

「じゃあてめえは何で逃げたんだよ!!?」

俺は怒りを込めてプレシアに言い放つ。

「!?!」

俺の叫びを間近で聞いたプレシアは、驚愕に顔を歪めて言葉を飲み込んだ。

ビククリしてやがるが言いたい事はまだ山ほどあんど「」!!

「逃げんじゃネエよ!! 罪を償えよ!? そんなで、償いが終わったらフェイトと一緒にやり直せよ!! 命ある限り!!……家で飯の支度をして、学校から帰ってきたフェイトに『おかえり』って笑いかけて、一緒の布団で寝て!!……そんなフェイトの『普通』の夢を叶えてやれよ!!! それが『親』ってもんだろっがあ!!!!」

「ご大層に『幸せを祈ってる』なんて言ってるが、ようは只の逃げじゃねえかッ!!」

本当にフェイトの事を大事だと想ってるってんなら傍で見守り続けろってんだよッ!!

俺のそんな思いを聞いたプレシアは悔しそうに顔を歪めて、俺の胸ぐらを掴んで吼えた。

「だけどー……だけどー……もう無理なのよ……ここでは一切の魔法は使えない!! 私の命も……もう長くはないの!! もう、もうあの子には償えないのよ!!!」

プレシアはもうどうしようもない現実に涙を流していやがる……泣く位ならこんなことすんじゃねえっつの。

確かにこの空間じゃ魔法は使えねえ……テメエ等の魔法はな? でもそれは『魔導師』のアンタ等にとっての話しだろーが。

「へっ!! ところがどっこい!! こちとら魔法使いなんてメルヘンチックなモンじゃねえ!!……俺は……」

泣いているプレシアに俺は獰猛な笑みを浮かべて言ってやる。

そっぢや、俺は……

『スタンド使い』だ!!!」

『スタンド使い』なんだぜえ!?

俺はアリシアのポッドのもち手とプレシアの手を両手を使って握り締める。

その形は傍から見れば運動会とかでやる組体操の扇みてえな形で俺が真ん中で二人の手を支える位置になってる。

さあてッ!! いっちょ馬鹿なことやりますかぁッ!!

「しっかり捕まってるよぉ!!?」『クレイジーダイヤモンド』!!

周囲に低音が木霊して俺のスタンド『クレイジーダイヤモンド』が俺の目の前に現われる。

俺は今からやる馬鹿なことに覚悟を決めて、残りの波紋を腹に目一杯籠めて強化してから『クレイジーダイヤモンド』を操作する。

俺の意志に従って『クレイジーダイヤモンド』は俺に向かい合い、右腕を引き絞る。

「ッ!?! あなた!?! 何をっ!?!」

横でプレシアが騒いでるが知ったことじゃネエ!!!

さあ、覚悟は決まったぜツ!! キヤモォー………ンツ!!!

『ドオリアアツ!!』

気合一喝。

雄たけびを挙げた『クレイジーダイヤモンド』は引き絞った右腕を解放する。

「……『コレ』だけはよお、やりたくなかったんだぜえ………モロによお」

『クレイジーダイヤモンド』が拳を…豪腕から繰り出す『パンチ』を

……

「^{デメー}自分のスタンドに殴られる、なんてよお………」

俺の腹にブチ込む!!

ズドオツ!!!

「ぶぐっ!!!」

そのブツ飛んだ行動を間近で見てるプレシアの顔は血の気が引いて真っ青になってる。

まあ普通はそつだよな……マジ痛え。

「み、見る。やはりよ……き、効く」!!

『クレイジーダイヤモンド』が俺の体にブチこんだヘビーパンチの反動で俺たちは虚数空間の出口までスッ飛ぶ!!

.....

「あぁっ!?!」

時の庭園のフェイト達は禅が『クレイジーダイヤモンド』に殴られた反動でこちらに向かってくるのを見ている。

フェイトはその凄惨な光景に目を手で覆うが、震えながらも手を胸の前で組みなおし、しっかりとゼンを見詰める。

…今まで、何度も窮地から救ってくれた……母の言葉に傷ついた自分を『人形』じゃないと……『人間』だと言ってくれた……母やアルフに抱く思いとは違う意味で、とても『大切な人』の無事を祈って見詰めている。

(母さん……ゼン……アリシア……無事に戻ってきて……お願いッ!!)

フェイトは、3人の『大切な人』の無事を祈りながら虚数空間の大穴の前で彼等の帰還を待つ。

「っ、っ、っ……」

リンディは口元を押さえて驚愕していた……まだ9歳前後の少年がたっただいま自分の目の前でやってのけた蛮勇に……

ゼンの持つ不思議な存在『スタンド』と呼んでいた能力……彼の持つ『スタンド』である『クレイジーダイヤモンド』のパワーは竜巻の

ジュエルシードをモニターしている時に見て把握している。

それに先程、目の前で盛大に、かつ荒々しく、豪快に扉と結界、そしてその先の地面をまとめて破壊しつくしたのを目の当たりにしたばかりだ。

手加減していたとしても、あれだけのスピードでこちらへ上がってくるパワーで殴られる……考えただけでゾツとしてしまう。自分では絶対にできない。

……そんな蛮行を何のためらいも無くやってのけるゼンに、リンディは開いた口が塞がらなかった。

「…なんて無茶苦茶なことをするんだ!? あの大馬鹿野郎は!!」

アースラで友となり戦場で背中を預けるほど信頼している、馬鹿野郎にクロノは苦い顔をする。

ゼンの無茶苦茶さは今まで一緒に行動して、言葉を交わして充分理解したつもりだった。

だが、所詮「だった」だけ……まさしくゼンは、生粋のとんでもない『大馬鹿野郎』だったことを、今になってやっと理解できた。

魔導師でなくとも普通はポツカリ空いた先の見えない程の穴に平然と飛び込みむなんてことはしない。

まるで正気の沙汰じゃない。そんなのは先程のフェイトのように心中する覚悟があるか、頭がイってないといけないことだ……

だが、アイツは……あの『大馬鹿野郎』は!!

フェイトを慰める『安全』よりも、フェイトが泣く原因を助ける『危険』を選んだ。

平然と自分の命をチップにして賭けて泣いている少女の……友達
の母親を助けに飛び込みやがった!!

それがどれだけの人間を心配させてるかも知らずに。

(文句の一つも言えずに終わるのはゴメンだからなッ!!……無事に戻って来いッ!!ゼンッ!!)

ブン飛びすぎてる『相棒』にクロノは心中で身を案じ、帰りを待つ。

「す、おじいちゃん……」

なのはは自分と歳が変わらない少年の『勇気ある行動』に感嘆していた。

いつも陽気で、すぐ自分をからかってくるちょっと意地悪な男の子……でも、いざというときは友達のために平気で自分を傷つけて闘う『勇気』に心が震えた……

……確かに変わった、それでいてとても『優しい』力を彼は持っているが……『自分の傷は治せない』という自分の身体を守るものではなかった。

……自分みたいに魔法の力があるわけでもない、バリアジャケットのような身を守る装備があるわけでもない。

なにかのちよつとした拍子に大怪我を負うかもしれないのに……それでも諦めない、退かない『不屈』の魂に感動を覚えた。

「……あんな……あんな無茶苦茶なこと!! 一体どんな『覚悟』があったらできるのさ!!!」

ユーノはゼンの『覚悟』に羨望を抱いている。

先程、ゼンから人の持つ『勇気』の力を聞き、自分にもその『勇気』があるということを教えられたが、ゼンほどの『覚悟』は持てなかった。

……正しく、只純粹にユーノは『憧れた』……いつか自分もあんな風に……自分の命を賭けて、体を張って大事な者を守る男になりたいと……

「……ゼン……くちゅ……ん……ん……ん……」

アルフは、フェイトの幸せと夢のために自身を省みないブツ飛んだ行動をするゼンに感謝の気持ちで涙が止まらなかった。

ゼンといるとフェイトとの精神リンクで感じる感情はいつも嬉しさでいっぱいだった。

フェイトだけじゃなく、アルフ自身もいつもゼンに助けられ、心を暖かくしてもらっていた。

今では例え精神リンクが無くともアルフ自身もフェイトと同じようにゼンのことを『大切な人』と言える。

いつも自分達の窮地に駆けつけて助けてくれる……暖かい料理を持って、疲れた心を癒してくれる。

自分やフェイトにとって、正しくゼンは『ヒーロー』であり『大切な人』なんだと……

(アタシもフェイトもアンタと居るだけで暖かい気持ちになれるんだ……それを失くしたくないから……だから……早く帰ってきておくれよ、ゼンッ!!)

彼らは、思い思いに、こちらに飛んでくる優しすぎる少年……『橘禅』を見守る。

只、ゼンの帰還を待ち望みながら……

.....

「うおおおおおおおおおおお!!!!!!」

風を斬る音を肌で感じながら俺達は時の庭園まで飛びあがっていき。

『クレイジーダイヤモンド』の暴力的なパワーから繰り出されたパンチは三人分の重量をもともせず上へ上へと俺達を押し上げてい

く。

少しずつだが、今は庭園の淵にいるフェイト達が視認できる距離まで上がってきていた。

もう少しだ!! もう少しで…………… ツ!? スピードが落ちてきた!? クソツ!! こうなったらもう一発!!

『クレイジーダイヤモンド』!!!

飛び上がるスピードが落ちてきたのでもう一度推進力を稼ぐために『クレイジーダイヤモンド』を喚びだす。

もう一度『クレイジーダイヤモンド』は右腕を引いて構えるが、プレシアが俺の体に抱きついて『クレイジーダイヤモンド』と俺の間に入って止めてくる。

「ダメよ!!! それ以上は体が持たないわ!! 私を打ちなさい!!!」

「バ、馬鹿言え!! 病人のアンタじゃ耐え切れねえよ!!!」

弱つてるとはいえ全力の波紋で体をしかも腹の部分を強化した俺でもとんでもない激痛が走るレベルのパンチだったんだ。

それを病気を患って身体が弱ってるプレシアが受けた日にゃあ間違いないその一発で昇天しちまう。

わざわざ助けに来たのにそれじゃあ無駄足だ。

だが、プレシアも強情で譲らず、俺から離れてはくれない。

「あなただって無茶よ!? 私が犠牲になればアナタだけでも……………」

ツ!? まだわかんねえのかよツ!!?

「やかましい!!! あんたも一緒じゃなきゃ、フェイトもアルフも幸せに

なれネエだろおが!!!」

世迷言をほざくプレシアに俺は怒鳴り散らしてその先の言葉を遮る。

フェイトはプレシアがココに落ちた時、なりふり構わず飛び込もうとしたんだ。

多分、自分も一緒に死ぬつもりだったんだろうが……それぐらいフェイトにとっては『アンタ』が、母親が必要なんだよッ!!

「それに、俺は約束したんだよ!!! フェイトの家族を『治して』やるって!! そのためならパンチの一発二発くらいどおってことねえんだよお!!!」

ああ、そつだッ!!

ここで体張らなくてどおするよ『橘禅』ッ!?

女とした約束のひとつぐれえ守れなきや……漢じゃねえッ!!!

「ゼ、ン…く、ん……」

「あんたも!! 泣くなら嬉し涙にとっときなあ!! ……ぜってえに……あんたの『家族』の元に連れてってやらあ!!!」

クソ!! どおすりゃいい!? 後50Mもあるのに!! ……ッ!? これだ!! これしかねえ!!

「『クレイジーダイヤモンド』!!!」

俺は『クレイジーダイヤモンド』の拳を軽く自分に当てる……グ
イイ!!!!

ッ!? 来た来た来たア!!!

クロノさん、仕方ないッすよ。気づいたら体が動いてたんだもん

……

「ゼンッ!!ゼンッ!!」

「バカバカバカバカッ!!このバカッ!!あんな無茶なことしないでくれよおッ!!グズッ!!じんばいじだんだよおおッ!!」

フェイトとアルフは遂に耐え切れなくなったようで座りこんでる俺の腹目掛けて抱きつき、その体勢のまま泣き始めた。

おおっッ!?アルフもフェイトも号泣してら…心配させちまったなあ…でも、アルフさん?馬鹿を5回も言わなくてよくね?っつか、お二人とも?心配させたのは悪かったですから、抱きつく力を緩めて頂けません?こっ…お腹周りが果てしなく痛いんであばばばばばとおッ!!バ、バカなッ!?逆に強くなっただ

「ハア……まったく…だが、最後に起こった不自然な加速、あれは一体なんだったんだ?」

そんないつも通り過ぎる俺達の様子にクロノが呆れながらも聞いてくる。

まあ、たいしたトリックじゃねえんだがな。

「……『クレイジーダイヤモンド』の能力……」

俺の言葉に皆が反応してこっちを見てくる。

「自分の傷は治せないけどよォ……プレシアの電撃食らったときに体にめり込んだ『建物の破片』なら……」

ボゴツボゴオッ

そう喋ってる間に肩や足、俺の体の至る所から建物の破片が何個か浮き出てくる。

そのまま建物の傷まで飛んで『治って』いった。

『『治して』戻るんだぜ?』

獰猛な笑みを浮かべて説明する禅にこの場にいる者の心中が重なった。

(「フ、フいつのブツ飛んでる根性……まじに小学生(同い年)!!?)

「き、傷の中の『破片』で体を『引っ張った』のかい? ……」

そーゆーだった。

俺の中に埋まっていた破片が俺達を虚数空間から庭園の破片があった場所まで引っ張ってくれたってわけだ。

『クレイジーダイヤモンド』の治すパワーは俺達3人(一人はビン詰め容器付き)の重量を難なく押し上げるだけの力がある、それを利用して最後は飛んできたのがトリックのタネだ。

ユーノはその非常識なやり方に冷や汗を流している……………

他の皆もビビッていたが仕方ない、うん仕方ない。

「とりあえず帰るつぜい? さすがに疲れたわ……………」

そう言って俺は、体を起こす。

そして忘れない内にプレシアに向き直って声をかける。

「おごプレシアやちよ」

「…なにかしらっ」

「そらよっ」

ズギユウウウウウウ

『クレイジーダイヤモンド』の拳で軽く触れる、するとプレシアの顔が驚愕に染まった。

いつもなら俺は茶化すところだが、今は俺も驚愕している。それは

……

「……………わ、若返ってるーッ!!」「……………」

そつッ!! 50代ほどに見えた顔が20代近くまで若返り、正に美女と呼ぶに相応しい姿に変貌したッ!!

リンディさんや家のお袋と並んだらナンパされること間違いなしだ。

まるで一尺玉のような大きさの『お宝』もGOODッ!! 絶景だね

(笑)

…多分、病気が無かったらこうなっていたんだらうなあ……

「あ、あ、ああああなたッ!? なにをしたのッ!? 体が凄く軽いわッ!!」

なんか身体のアチコチを触ったかと思えばプレシアは俺にとんでもない剣膜で詰め寄ってきた。

もしもっし? 若干目が血走ってますよ?

そんな目で小学生に詰め寄らんで下さい、変態に見られちゃ、ゲフンッ!! ゲフンッ!! ゲフンッ!!

おっと失礼、盛大に流してくれ。

「ああ〜……あんたの身体を治したんだよ」

俺から出てきた言葉にプレシアは目をまん丸に見開いて驚愕した。

「なん……ですって……？ 私のリンカーコアの破壊症状はどんな医学でも治せない不治の病なのに……」

りんかーこあ？ ……なんだか知らねえけどよ、それが『ブツ壊れた物』ならな……

「俺の『クレイジーダイヤモンド』は破壊されたモノやエネルギーを『治す』力があるんだよ」

俺の『クレイジーダイヤモンド』に治せないモノはねーんだよ。

「……………」

ありやりや、放心しちまってら……とにかく、帰りますか。

まだ 一仕事残ってるし……

と、そんなことを考えていたら9個のジュエルシードが目の前で眩い光を出しながら暴走をおっ始めやがった。

近くで魔力を大量に使ったから封印が解けちゃったみてえだ。

これまた予想外のアクシデントだったのか、リンディさんはかなり焦っている。

周りの皆も緊張した顔でジュエルシードに向けて武器を構えてた。

皆が緊張に顔を強張らせていく、俺はそんな状況の中で皆とは違い

………実にシンプルに………

『クレイジーダイヤモンド』は今更発動したKYな宝石にありったけの拳をぶち込んでいく。

「そのクソツタレた宝石を封印状態まで『治す』ッ!!」

「これ以上、仕事させんじゃねえっつのッ!! 大人しく封印されてやがれ、ダボがあッ!!」

.....
キュウウウウイイイインッ!!! カラン..... コロ、コロ、コロ

「し、ん.....が?.....」

『クレイジーダイヤモンド』がジュエルシールドに拳を叩き込むとアラ不思議、荒れ狂っていた魔力の流れも暴風も綺麗サッパリ、庭園に静けさが戻った。

「TTTTTTTT」
.....「TTTTTTTT」

『.....じ、次元震.....反応がロストしました.....』

静かになった時の庭園にアースラからエイミーさんの困惑した声が響く。

八つ当たりして満足した俺はゆっくりと振り向き、頬に手を当てながらいい笑顔を浮かべると、呆然としている皆に向ける。

そして、決めのセリフ。

くどの世界でもお袋の味はアアアアアアアアア
世界ーイイイイイイイ

第8話くどの世界でもお袋の味はアアアアアアアアア 世界
ーイイイイイイイ

どうも。

今回のジュエルシードが絡んだ暴走事件のおおとり、時の庭園の決戦でのMVP間違いない無しの橋禅です。

全員の先頭に立ち、迫る傀儡兵を悉く粉碎し敵である女を命を賭けて救い出すといった、俺の雄々しい活躍を見ていた女性職員の方々はアースラに帰還するなり、俺を囲んで頬ずりしたりホッペにキスをしてくださる等、

キャツキャウフフな『甘い時間』というご褒美をくれました。

…ワケも無く……

「あ痛でででででででッ!!」

「ええいやかましいッ!!男ならこれくらい笑って我慢せんかッ!!」

そんなモン無理です。なら俺男じゃなくても良い。

医務室にてオッサンに体の治療をされてます。可愛いナースさんではなくオッサンです (ここ重要)

畜生ッ!!命張ったご褒美がこれって…いくらなんでもあんまりじゃ…っ痛ででででッ!!

そ、そこは…ダメエッ!?もっと優しくしてえええッ!!感じちゃううううううッ!!?

「やかましいッ!!変な声を出すなバカタレッ!!……これでよしッ!!
……まあったく、自分で自分を傷つけるなんぞ、若いからって無茶苦茶しよるわ」

「痛でで……し、仕方無いじゃないッスか。あん時はああするしか無かったんスから……」

オッサンが最後に治療してくれたのは、俺が虚数空間を脱出するときに『クレイジーダイヤモンド』でぶん殴った腹の部分だ。

時の庭園から出て俺はアースラに戻ってきて早々フェイト達に有無を言わず医務室まで連行された。

体の傷は治療魔法と普通の治療を施されてほぼ、完治したんだが腹のダメージだけは思いのほか深くて完全には治りきらなかった。

ベテランのはずの医務のオッサンも傷を見て顔を青くしていたぜ。

治療が終わってからそのままベットに寝かされて1時間ほど安静にと言われたんだが……。

暇すぎて死にそうだよ……他のやつ等は皆、別室だし……暇で御座る。

フェイト達は今は別室にいる……今後のことについての話し合いがあるからだ。

リンディさんに別室へ促された時はプレシアもかなり苦い顔をしていた。

まあ、クロノの話じゃロストロギアの違法所持はかなりの重罪らしいからな。

プレシアもそれは覚悟してたんだろう。

しかしソレについて俺は微塵も心配していない。

クロノとエイミィさんが予想してたプレシアの違法研究の仮説についての証拠が挙がったからだ。

プレシアの違法研究は管理局のクソツタれた人間によってやらされたものと言う仮説は当たっていて、特に罪にはならない方向にする。とリンディさんとクロノが決定していた。

むしろその証拠と被害にあったプレシアの証言だけで腐った部分を取り除けるとリンディさんは黒い、黒い笑みを浮かべていたぜ……そして、プレシアの無実を晴れて証明し、普通に生活ができるようになる。

リンディさんも同じ様に子供がいる母親として、管理局の人間としてもこのままプレシアを逮捕しただけではハッピーエンドにはならないと思っていたんだと。

この作戦が上にバレるとマズイから秘密裏にクロノとリンディさん、エイミィさんで事を進めていた。

圧力がかつちゃ動けなくなるしな。だからなのはとユーノも当然知らない。

俺は作戦の最後の確認が終わった辺りでクロノが教えてくれたのを知っていたが。

クロノがあえて『逮捕』という言葉を使ったのは、表向きの動く理由があるからだ。

実は逮捕してみると、こんな裏があつて、管理局に利用されたことをふまえて裁判にかければいい。

そのプレシアの証言とクロノが集めた証拠で上の馬鹿を一掃する。ちなみに時の庭園でもそう言ったのは、フェイト達に感謝されるのが恥ずかしいということだ。

自分は別にフェイト達のためにやったんじゃない。

あくまで管理局員として当然のことをした。とそういう風にしようとしたんだ。

まあ俺がバラしたけどねッ!!

今頃フェイト達に感謝されて顔を赤くしてエイミィさんからかわれてんだろな…ヘッヘッへ!!

となれば残りはフェイトの問題だ。

フェイトの場合は違法なジュエルシードの無断所持という罪がある。

コレについても俺とクロノで意見を出し合つて吟味したが、途中クロノから意外な意見が上がった。

「…実際フェイトと交戦したのはなのはただだ。アースラの武装局員はプレシアの所に行っただけだしね。それに、許可も無く時の庭園というプレシアの『家』に突入した管理局も強くは言えない。」

「……つまり??」

「フェイトとなのはは『偶然』ジュエルシードの近くで喧嘩していただけ、ということだ…実際のところ、局員はフェイトがジュエルシードを違法所持していた『現場』は見えていない。『現場』を抑えていないのに、犯人を割り出すことはできないってことさ…」

…いや、たしかにそうだろうけどよ……

「……そんなのあり??」

「普通は無しだろう。けれど今回の事件は内容が内容だ。普通の枠にはおさまらないし、最終的にはフェイトもプレシアの説得に向かってくれたしね。法律で守れないなら、法律なんか必要ないだろう?」

……堅物かと思ったが…中々に強かじゃん? クロノさんよお…

と、そんな会話を思い返していると、医務室の扉が開いてクロノとアルフがやってきた。

「ゼッンツ!! 邪魔するよ!!」

「病室では静かにしないか、アルフ…調子はどうだ?」

笑顔のアルフとやや疲れ気味なクロノという実に対照的な二人がベットの傍まできた。

クロノ、髪が所々跳ねてるけど、何があったんだ?

そんな疑問を抱えつつ、俺はベットから起き上がって二人に片手を挙げる。

「おゝす、体の方は問題ねーよ。さっきまではヤバかったけど、今はそこまで痛くねえ」

さつきから波紋エネルギーの治療も同時進行してたからな。

「まったく…プレシアの電撃、体に入った建物の破片、おまけに『クレイジーダイヤモンド』のパンチ…それだけ食らってもう痛みが引き始めるとは…呆れた頑丈さだな…」

「さすがゼンだよツ!! 男はそうでなくっちゃツ!!」

呆れないで、クロノ君。んでアルフはなんでそんなに嬉しそうなん

だよ？

やっべえ。受け答えまで対照的です。ハイ。

「まあ、タフガイを自称する俺だからな……フェイト達のほうの話し合いは終わったのか？」

「ああ、今は艦長もエイミーも書類作成でいないから二人で食堂にいるよ……それと、プレシアは時の庭園を放棄するそうだ」

「あん？じゃあどこに住むんだ？」

「地球だ。あそこは管理局からすれば管理外世界だからな。さすがにゼロじゃないがそこまで管理局に干渉されずに済む。」

「そりゃ結構だが、戸籍とかはどうすんだ？」

テストロッサ家の戸籍などを手に入れると言う問題については誰かが管理局の嘱託魔導師になれば何とか出来るらしい。そこはリンデイさんが、取り計らうとの事。

管理局は万年人手不足、戸籍を渡す代わりにGIVE&TAKEで嘱託という形でも確保したいらしい。

それについてはフェイトが立候補したそうだ。なのはと同じように困っている人の役に立ちたいらしい。

「そおか。まあ、難しい話は終わりにして飯を食いにいきますか」

結構腹が空いてきたし、食べばエネルギーもみなぎってくるだろう。

「そうだな。僕もお腹が空いたし」

「アタシもドッグフードが食べたいッ!!」

「え?」

あんの? ドッグフード? そんな疑問をよそに、アルフは鼻唄を歌いながら先を歩いていった。

食堂までクロノと一緒に向かったんだが、なぜか入り口に先に向かったアルフ、エイミィさん、リンディさん、なのは、ユーノが陣取っている。中を覗き見ているようだ。

「どうしたんだ? エイミィ」

クロノがエイミィさんに声をかけるとエイミィさんは苦笑いを浮かべている。

「うーんなんとというか……実際、見たほうが早いかも」

「?」

そういつて皆が入り口の隙間を見せてくれたので俺たちは中を覗いたんだが……

「……………」モジモジ

「……………」モジモジ

「……………」モジモジ

「……………」モジモジ

そこには互いに向かい合って、食堂の一角に座るフェイトとプレシ

アがいた。二人して、目が合えば下を向き、もう一度目を合わせる。また俯く……同じ感覚でそれが繰り返されている。

「……………」

俺とクロノはゆっくりと隙間から目を離す。

「なんぞ？あれ？」

「知らん」

本当にどうなってんの？何やってんのあの二人？

予想外の光景に頭を捻る俺たちの疑問にリンディさんとアルフが答えてくる。

「多分、長い間親子として接していなかったから接し方がわからないんじゃないかしら？」

「リンディので多分合ってるよ……フェイトとの精神リンクで困ってるって感覚が伝わってくるからね……」

……確かに、入りづらいなあ、こりゃ。

実際は当人達の問題なわけだし、下手に声をかけにくいってわけだ……
でもこのまんまじゃあ、腹へって仕方ないんだけど？

「ちれちれ……どうしたものか……」

クロノもお手上げみたいだ。

他の皆も困った顔で首を捻っている。

まあ、単純に武力じゃどおしよおもねえからなあ。コレばかりは

さすがに……

「大丈夫ッ!!ゼンがなんとかしてくれるよッ!!」

「まてい。何故俺に振ったし」

アルフさんや?何その無茶振り?俺にどうしろと?

いきなりの無茶振りに巻き込まれた俺を見ながらアルフはニッコリと笑って続きを話す。

「ゼンはいつもどんなときでも絶対にあたし達を助けてくれたからねッ!だからゼンだったらなんとかしてくれるさ!……あたしはゼンを信じてるからッ!!」

「やめてっ!!そんな純粋な目で見るのやめてっ!!」

すっごいキラキラした目で俺を見てくるアルフ。その目はまるで無垢な子供のような目だ…アルフに触発されたのか、なのはとユーノも期待の目で見てくる。お前もかブルータ…ゲフン!ゲフン!

残りのエイミィさんとリンディさんはニヤニヤと面白がっている。その目もやめろって。

くそッ!!ここは空腹を我慢して戦略的撤退を……

「ゼン」

ポンッと俺の肩に手が置かれる。俺はゆうっくりと後ろを振り返る。

そこには……

「女の子!」ここまで期待されて逃げるなんて…男のすることじゃない

よな？」

ニヤリ、と笑うクロノがそこにはいた。oh……………絶対にバラした
こと根に持つてるよ、この人。

前門のトラ（クロノ）、後門のオオカミ（アルフ）に挟まれますた。
なんてこったい。

…いや、でも実際…どうしようかねえ？あのギクシャクしたのって
どうしたらいいんだよ？マジで。

中々アイディアが浮かばないので俺は視線をいろんなとこに彷徨
わせてみる。

すると……………目に付いたのは『食堂』と書かれたプレート。

……………『食堂』？……………『食事』？……………ツ!?閃いた!!?これで勝つr…ゲ
フン！ゲフン！

一つの妙案が浮かんだ俺はすぐにリンディさんに話しかける。

「リンディさん。食堂の設備、借りてもいいツスか？」

「え？え、ええ。大丈夫だけど？」

いきなり話を振られて困惑しているリンディさんに俺は続けて質
問する。

「材料は地球のモンってあります？」

そこが一番重要なんだよなあ、このアイディア…なかったらどおし
ましょ？

「それはあるわ。お肉は確か豚肉があったし、野菜と調味料もひと
おりあるはずだけど…」

よし、第一段階はクリアだな。そんだけありゃ充分だろ。

フム……後は、『アレ』でいくか？……うしツ!!
今からやることが決まった俺は未だに俺に期待の眼差しを向けてくるのは達に声をかける。

「なのは。ちよいとフェイトを連れて食堂から離れてくれ。俺はその間に『仕掛け』をやっからよ」

「…ふえ？ちよっちよっど、禅君ツ!？」

俺はテンパッているのはを無視して食堂に入る。

扉を開けた俺を席から視線を移して見つけたテストタロツサ親子は驚いている。

特にフェイトは泣きそうな顔になってら。

「ゼンツ!!」

「ゼン君ツ!？怪我は大丈夫なのツ!？」

二人は走って俺に駆け寄ってきたので俺は手を挙げる。

「ああ、もう大丈夫……うおっ!？」ポフンツ

「…良かったツ……良かったツ……」

フェイトが走ってきた勢いそのまま抱きついてきたので俺は右手で背中を撫でながら左手で頭を撫でてやる。

顔を俺の胸に埋めているので表情はわからないが心配かけちまったのは体の震えでよく判る……

「心配かけたな……俺はもう大丈夫だからよ。」

酷かったのは腹の怪我ぐらいだしな。実際。

安心させようと俺は未だに震えているフェイトに声をかけるが

……

「……………」

「……？フェイト？」

「……………」ギユウッ

「……やれやれだぜ……」

フェイトは何も答えずそのまま俺にしがみついている。

しかも力を上げて離すまい、って具合に。

仕方ないのでその体勢のまま頭を撫でてやる。

そうしていると安心してきたのか、段々と体の震えが納まってきた。

「俺はもう大丈夫だからよ？なっ？」

「……………」じゅん

顔を埋めてるからくぐもった声になってけど、フェイトはちゃんと返事してくれた。

うん、返事してくれたのはいいんだけどよ……未だにフェイトさんは離れてくれまっせ〜ん。

ああ、こつ体全体に感じる柔らかくて心地いい暖かさがたまら……ゲフンッ!!ゲフンッ!!

や、やっべえ!!このままの体勢じゃ俺の猛るリビドウオー……っがハイになってまっやないのッ!?

す、すぐに離れん……胸の辺りにある綺麗な金色の髪から漂う甘い

香りがなんとも誘ってくるじゃねえか…

……ああ、是非ともクンカクンカして…ゲフンツ!!ゲフンツ!!ゲフンツ!!ゲフンツ!!だ、誰か助けてエー…

と、俺が理性をギリッギリまで保っていると、ようやくフェイトは離れてくれた。

もうちょっとでマジに狼になるとこだったぜ……まだ視線は俺に向いてるけどな。

俺を見詰める顔が真っ赤でデーーーモルト（非っっっ常に）!!!可愛いですッ!!

「ゼン君……ほ、本当に大丈夫なの?」

俺がフェイトの可愛さに悶えているとプレシアも声をかけてきた。今のが終わるまで待っててくれたようだ。

プレシアが俺にかけてくるその声音は俺のことを本気で心配しているのが判るぐらい震えている。

……プレシアも……いや、プレシアさんもだいぶ柔らかくなったな…

なんとかしてこの二人を普通の親子に戻してやりてえし……頑張らねえと…

俺はプレシアさんに声をかける。

「全然大丈夫ッスよ。それより腹が減ったから飯を作りに来たんですが……フェイト。さっきなのはが呼んでたから、ちよいと行ってきな。その入り口にいるからよ」

「っ?…うん、わかった。」

そのままフェイトはなのはの元に歩いていく。

少ししてクロノ達が食堂に入ってきた。クロノは俺に視線を送って頷く。

ベジやらちゃんどフェイトは離れたようだな。

「ちて……プレシアさん？ちょいと今から手伝ってもらいたいことがあんですが…」

「…？それは、構わないけど、一体何を？」

「まあ、ついて来て下さいや。これがつまくいきゃ、フェイトとの気まずさもなくなるかもしれませんぜ？」

「さて、何をすればいいのかしら？早く教えて頂戴」

俺の一言でプレシアさんの顔付きが母親のソレに変わっていく。背中には何故か炎が見えた気がするっす。

…おお……みなぎるオーラがハンパないっす。ホント短時間で変わったな。この人…

「ほんじゃま、着いてきてくださいなっ」と

俺はそのまま踵を返して『厨房』に向かう。こっから先は戦場だっ
!!派手にイクぜえッ!!

「クロノ達は席についてな。美味いもん食わせてやつからよおッ!!」

皆は疑問顔のまま席に着く。アルフは俺の料理を食ったことがあるからか、スッゴイはしゃいでいる。

俺はプレシアさんと一緒に『厨房』に入って腕を捲くる。さあッ!!
作りますか!!

キング・クリームゾン!!

用意ができた頃にちょうど二人が帰ってきたので、俺は二人に席に座るよう促す。

ちなみにプレシアさんはすでに席についている。フェイトと向かい合いの席だ。

俺は全員の席の前に料理を並べていく。

「本日の定食はこちらになりますッ!!」

「うわぁ〜ッ!!」

「おいしそうだね」

「…相変わらず凄いな…」

「やったーッ!!またゼンの料理が食べられるッ!!」

「そうだね。アルフ。」

「小学生なのに凄いわねえ…」

「づう…女として悔しい…」

「……………」

上から順に俺、なのは、ユーノ、クロノ、アルフ、フェイト、リン
デイさん、エイミィさん、プレシアさんの順番でござい。

用意したのは『豚の生姜焼き』『ワカメの味噌汁』『肉じゃが』『白米』
『緑茶』の定食だ。

和食オンリーで固めてみました。

「それではみなさん…」

「……………」
「いただきます(まーす)ッ!!」……………」

みんなおもおもいのおかず!手を伸ばす。

「うまつ!!うまつ!!うんまあ〜いッ!!!」

「うん…やっぱりゼンのご飯は美味しい…」

「おいし〜いッ!ご飯がとっても進むの!」

「…味噌汁ってなんかほっとするね…」

「…この生姜が癖になるな…白米と一緒にだと箸が進んで止まらない
…」

「ああ…ッ!!これが本物の『和食』…素晴らしいわッ!」

「体重が気になるけど箸が止まらない…」

「…(チラッチラッ)」

皆が満悦のようで重畳、重畳。

………さて、二丁で一丁『爆弾』を落としますか？へっへっへっ

!!

皆が食べ終わりに近づいた時、俺はホクホク顔のフェイトに話しかける。

「どうよ？フェイト、美味しいか？」

「うん。とっても美味しいよ、ゼン」

「そおかそおか……ちなみに、どれが一番美味しいよ？」

「え？……うん……この『ニクジャガ』かな？」

ピクンッ

「ほお、ちなみになんでそお思っただ？」

「えっと……うまく、言えないんだけど……なんだかココに染み込んでくる……感じがするんだ……」

そう言ってフェイトは自分の胸の辺りをさわる。

「とっても……暖かい……っていうのかな？……私が一番美味しいって感じたのはこの『ニクジャガ』だよ？」

そう言ってフェイトは俺に笑顔を向けるが、その笑顔を見せる『相手』が違っただよなあ……

俺はニヤニヤとしながら、視線をその人に向ける。

「だってね。『プレシア』さん？」

「……………え？」

「…ヒグッ…グズッ…うっ、うっ……………」

そこには感極まって両手で涙が流れる顔を隠す『プレシア』さんがいた。

……………そう、この『肉じゃが』は『プレシア』さんが『フェイト』のために作ったもんだ。

俺は、フェイトと二度目に会ったときのことを思い出して、プレシアさんに料理を作らせた。

いざ、やることを教えると、最初は、絶対に自分の料理を気に入ってはくれない。

と作ることを拒否してたから、頑張って説得した。俺にできるのはこれぐれえだしな…

「え？……………か、母さんが？」

フェイトはいきなりすることに思考が追いついていない。ちなみに周りもそうだ。俺が連れて行ったのは知ってるけど、雑用ぐらいをさせたんだと思ってたようだが、実際はみんなの分を作り終えた後、俺はプレシアさんの横で調理法をレクチャーしていたのだ。

「プレシアさんな……………お前の喜ぶ顔が見たくてすっげえ頑張ったんだ

ぜ？」

そう言って手に視線を向ければ、彼女の手にはたくさんの絆創膏がついている。

久しぶりの料理だったモンで手え切るわ。火傷するわで大変だった。超大変だった。

それに気づいたフェイトはプレシアさんに駆け寄る。

「母さんッ！大丈夫？痛いのか？」

フェイトはプレシアに聞くが、プレシアは泣いている。

「ち…が、う……の…ぐずっ…フェイト…ほん、ほんとうに、ごめんなさい……」

「母さん…？」

「ズズッ…ゼン君からあなたがどんな生活を送っていたか…さっき聞いたの…ごめんなさいね……。これ、からは…頑張って作るわ。……今日は久しぶりだったから、あまりうまく作れなかったけど、ち、ちやんと練習するから……ね…もっと…いっぱい……お、いしいご飯……作って、あげれるように……あなたの喜ぶ顔が……もっと……もっと見られるようにッ!!……」

プレシアさんはそう言ってフェイトを抱きしめる。力強く、愛しさを込めて…

「ッ!!……お…おいしかったッ!!おいしかったよおッ!!」

フェイトも涙を流しながらプレシアさんと抱き合っ。

今まで甘えられなかった分の涙を、今まで愛情を注いで上げなかつ

た分の涙を流しながら二人は抱き合っ。

「うええええええん……!! ええええええん……!!」

「じめんなさいねッ…フエイトッ…ぐずっ…じめんなさいッ…っ、
ううう…」

二人はそのまま抱き合っって涙を流す…俺たちは、そっとう食堂から
離れていった……

……………

「……………君は凄いな、ゼン」

「ああ？」

食堂から出て皆が集まった時に唐突に、クロノは話しかけてくる。
俺たちは全員食堂の入り口の外にいる。

「なにがだ？」

「あの二人を…すれ違った親子を『料理』で仲を取り持った…本当に凄
いと思っつよ…」

周りの皆も頷いてるが、勘違いしてんじゃねえよ……

「…地球じゃ、肉じゃがは『お袋の味』って言われてるんだ…そのま
んまの意味で、プレシアさんの『思い』がフエイトに伝わったんだと

俺は思ってる……『娘』のフェイトにな……」

「俺じゃあそれはできねえ……『プレシア』さんが作ったから『フェイト』に伝わったんだよ……『心』がな……」

『プレシア』さんの愛情ってもんが……」

親から子へ、繋がりがあるからこそ、伝わるもんがある。

例え俺がどれだけ頑張っても『母親』が『家族』のために作る料理には絶対に届かねえ。

「だから、あの二人が分かり合えたのは俺がやったんじゃない……極自然なことなんだよ」

「……手を『治さなかった』のはなぜだ？」

……そんなモン決まってるだろ……

「……あんなに『娘』のために頑張った『証』……『治す』なんてできっかよ……」

「……そうだな……その通りだ……」

『治さない』からいい事もあるってだけさ……」

全部が全部、治せばいいってモンじゃない。俺は今回の傷は治せなかった。

そこに今まで黙って俺達の会話を聞くだけだったアルフが寄ってくる。

「ゼン……ほんとうにありがとうね……」

「だから、俺は何もしてねえって…」

実際頑張ったのはプレシアさんなんだし。俺は横でレクチャーしただけだ。

だがアルフは首を横に振って、俺の言葉を否定する。

「確かに、最後はプレシアの気持ち伝わったからかもしれない…けどさ…切欠を作ったのはゼンだよ…ゼンがいなかったら、この切欠はずっと無かったかもしれない…ヤッパリ、あんたは『ヒーロー』だよ、ゼン…」

アルフはとてもいい笑顔で俺に言い切る。周りの皆もアルフに賛成なのか、しきりに頷いてる。

…『ヒーロー』って…ケツがむず痒いぜ、こおゆうのはよお…
恥ずかしくなった俺はそのまま踵を返して部屋に向かう。

「どこへ行くんだい？」

ユーノが声を掛けてきたので俺は首だけ振り向いて答える。

『家族』の触れ合いを覗き見すんのは趣味が悪いからな……橋禅はクールに去るぜ…」

俺はそれだけ言って部屋に戻っていく。

また会う口まで

あの食堂での一件の後。

俺は自宅に帰る許可が下りたんで転送ポートに向かっていたんだが、わざわざ見送りにクロノが来てくれた。

「ゼン、今回の事件解決の協力、本当にすまなかったな…本来なら民間人の君を巻き込むべきじゃなかったんだが…」

転送ポートに向かう途中、そういつてクロノは頭を下げてる。

「ただけ律儀なんだかな、コイツは…まあ、そこがクロノのいい所でもあるんだが……」

コイツはこの後、エイミーさんと一緒に今回の事件の報告書の作成、プレシアさんを嵌めたクソツタレ共を追い詰める証拠固め、フェイトとアルフの囑託魔導師試験の手続き等々、とてもhardなスケジュールなのにわざわざ見送りに来てくれた。

「きにすんなくて。俺はダチのためにやっただけだからよ」

俺がそうしたかったからしただけなんだし。

そういつて頭を上げてもらうと、クロノは少々、寂しげな顔をしている。

え？なんで？

「フツ…そうか…しかし、そこまで思ってもらえるフェイトは果報者だな…少々、羨ましい…」

……え？気づいてないのか？コイツ？

「あん？確かに俺はダチのフェイトのためにやったが、クロノだって俺のダチじゃねえか？」

なんかキョトンとしてるが、本気で気づいてなかったのかよ？

俺はニヤリとした笑顔で続きを話す。

「俺はダチのフェイトのためにプレシアさんと戦ったし、今回の事件の協力だって、ダチのクロノのために手伝ったんだぜえ？…ダチが困ってたら一緒に解決してやるのが普通だろおが？だから、謝罪はいらねえよ」

そうじゃなきゃワザワザ一緒に戦ったりなんてしねえし。

俺の言葉を聞いたクロノはポカンとした顔から一転、目を閉じてニヤリと口元を曲げる。

「…そう、か…やれやれ…いつの間にか、とんでもなくブツ飛んだ奴を友達に持ってしまったものだ…」

「カツ！抜かせ…」

そんな感じで二人で喋りながら転送ポートに向かっていく。

やれ、リンディさんの砂糖癖はどうにかならないか、エイミィさんのからかい癖はどうにかならないか、という愚痴が大半を占めてたけどな。どんだけ苦勞してんだよ…クロノ、頑張れ!!

そうしていつの間にか転送ポートに着いた。

俺達はそこで別れの挨拶をする。

「プレシア達の件が片付いたら連絡するよ。気つけて帰れよ」

「わかってるって、それじゃあな」

足元の転送ポートが光って次に見た景色は海鳴臨海公園の広場だった。

中々、密度の濃い1日を終えた俺は公園から帰路について、我が家に到着した。

はあく〜疲れたぜ…さっさと風呂入って寝よ寝よ。明日も学校だし……

俺は今日の疲れを癒すべく、帰ってきた我が家の扉を開けた。

ガチャッ

「ただい…！ すいません。家を間違えました」

んだが極自然に生存本能が鳴らすアラートに従って逃げようとし

…

ガシイイイイツ!!!

「どうしていくの？ 禅の家は「コ」でしょ？」

「ロ今帰りました。 母上様」

玄関で待ち構えていたお袋に捕まります。 威圧感どころか征服感が半端ないです。

我が家の玄関から廊下の空気がなんかダークパープルに染まっているんですが…… 母上様が発生源ですね。 わかります。

今なら『パープル・ヘイズ』に首を捕まれた『イルーゾオ』の気持ちが良い、良おおおおく、判ります。

正しく、デイ・モールト！（非常に！）デイ・モールーールト！（非っっっ常に！）良くわかります。

絶対的な死の恐怖ってこおいうことなんだなあ……………

「ちん………禅？」

などと現実逃避させてくれる暇も無く……………

「母さんのジョイ君がボトルごと見当たらないんだけど……シラナイ？ ……それと、フライパンもないの……オシエテクレナイカシラ？ ……ゼン……？」

俺に下される 判決ジャッジは 制裁パニッシュメント一択とい
う現実に全俺が泣いた……

アツーーーーー!!!

.....

所変わってこちらはアースラ。

そのアースラの通路横の自販機には業務の休憩時間に入ったス
タッフが4人程いた。

彼等は皆、疲れきった顔でコーヒーを啜っている。

なぜかと言えば、先程起こったジュエルシードによる事件の後処理や通常業務にアースラの運行等の何時もの範囲を超えたオーバーワークによる疲労が積み重なったためである。

その重労働から開放される10分間というひと時の安らぎの時間を彼等はコーヒー片手に満喫していた。

もうすぐこの仕事も終わる。

そう考えれば、彼等の顔に少しばかり笑顔が戻ってくる。

『これが終わったら休暇申請しておいたから皆でどこかに行こうと思うんだけど、どうよ？』

と4人はこの辛い業務が終わった先の慰安旅行の計画を立てていた。

旅先で何をするか等、期待に胸を膨らましながら……

……だからだろうか、そのひと時の間の気の緩みが彼等の悲劇に繋がったのは……

「ハハッそれじゃあ……ん？」

最初に気づいたのは通路側に立ってコーヒーを飲んでいた男性局員だった。

残りの3人は自販機横のベンチに腰掛けている。

「おい？どっした？」

ベンチに座っていた局員の一人が通路側にいた同僚の様子がおかしいことに気づいて話しかける。

残りの二人も話を止めて聞きの体勢に入った。

「いや…気のせいか？なんか音が聞こえないか？」

「はあ？音お？」

同僚の言った言葉に怪訝な顔をしつつも耳を澄ませてみる。

だが、聞こえるのは傍にある自販機のコンプレッサー音だけだ。他には何も聞こえてこない。

他の二人も同じように首を傾げている。

「……なにも聞こえないぞ？空耳じゃないのか？」

だが、通路側の同僚は未だに耳に掌を当てている。

「…いや、空耳じゃない…段々大きくなって…自販機から離れてみるよ」

そう言ってくる同僚に怪訝な視線を送りつつも3人は自販機から離れてもう一度、耳を澄ませます。

すると……

……

「…本当だ…なんか聞こえる…」

残りの3人も聞こえたようで辺りを見渡すが、ソレらしい音の発生源は近くには無い。

それどころか音は近づいてくる。

……

「な、なんだよ…この音？」

「なんか…地響きみたいな音…だよな？」

遠くから聞こえるその音は、ナニカが走るような音で普段ならアースラでは聞くことが無い音だ。

緊急時に艦内をむやみやたらと走ってもこんな音は出ない。

だが、そんなことを考えてる間にも音はドンドン近づいてくる。

……トトトトトトトトトトトト

「おいおい、なんだよこの音は!？」

「お、俺がそんなこと知るかよ!？」

局員達4人は突然の事態に冷静さを欠いて、狼狽していく。

そして……………

ズトトトトトトトトトトトトトトトトト!!!

遂にその音がハッキリ聞こえるぐらいになると通路の奥からナニカが見えてくる。

そのナニカは真っ直ぐにこの自販機コーナーに向かって爆走しているようで、スピードが緩む気配は無い。

出ている速度はかなりのものだ。その証拠に後ろから白煙が上がっている。

もしこのまま直撃すれば自分達はひとたまりも無いだろう。

「お、おい!! なにか判らないがヤバイぞ!？」

「に、逃げ……」

ソレを見て焦った同輩たちは退避しようとするが、間に合わず……

「ゼー……ンッ!!どこにいるんだよ……ッ!!? 出てきておくれよ……ッ!!」

ドグワシヤアアアアアアンッ!!

「グバアアッ!!」

「ペポオッ!!」

「メギョオオッ!!」

「親父にも轢かれたことないのに……ッ!!」

あえなく、衝突、粉碎、玉砕、大喝采。

車なら間違いなく大事故である。

そのまま彼等4人は錐揉みしながらコーヒーと共に宙を舞っている。

浮遊感を感じながらも意識が朦朧とする中で、彼等がハッキリと認識できたのは……

涙を流しながら爆走する、八重歯がチャームポイントの使い魔、アルフに轢かれてブツ飛ばされた。

その事実と……

(((((ああ、俺達の休み……終わっちゃったよ……)))

申請した休暇は、病院で過ごすことになるという現実だった。

「ゼー……ゼー……ンツ!!?どこだよお……ツ!!?うわぁ……ンツ!!!」

アルフの暴走と涙は留まることを知らず、その後2時間に渡って艦内を爆走し続けた。

尚、その爆走に巻き込まれた局員もかなりの数だったそうな。

ちなみに、食堂においては……

「ぐすっ……ひっく……」ポロポロポロポロ

『……………』

食堂の席に座って、涙を流し続けるフェイトがいた。

彼女の相棒であるバルディッシュは主人の居た堪れない姿にどう声を掛けていいかわからず沈黙している。

元々、彼は寡黙なデバイスなため気の利いた言葉などは持ち合わせていなかった。

例えばどんな慰めの言葉を知っていても今の彼女には逆効果だこのデバイスは認識し、沈黙を貫いている。

フェイトの目は瞳と同じように真っ赤に染まり、目尻から枯れることなく涙が流れ続けている。

太ももに置いた手は黒いスカートをぎゅっと握り締め、必死に力を耐えているようにしか見えない。

可愛らしい顔は少々俯き、体はプルプルと震えている。

……………その様はまさに捨てられた子犬のようだった。

その悲壮感漂う少女の姿を見た同僚達は食事をする気になるはずもなく。

彼女に見つからないよう静かに食堂から退散していき、普段賑わうはずの食堂は閑散としていた。

今は職員達は入り口から少女の様子を窺っている。

「ぐすっ……ゼン……ゼンッ……」ポロポロポロポロポロ

まるで飼い主を探して鳴く甘えん坊の子犬のような声でフェイトは呼び続ける。

何も言わずに地球に帰ってしまった自身の想い人の名前を

……

そんなフェイトの可哀想過ぎる姿に艦内の職員の内は問答無用で締め付けられ続ける。

「私……嫌われちゃったのかな？……」ポロポロポロポロポロポロポロポロポロポロ

自分に何も告げずに地球に帰ってしまった原因を、彼女は自分が悪いというんでもない暴論に至る。

もし自分が本当に嫌われたんじゃないかと考えるとフェイトの涙は1速から5速へ段飛ばしに加速。

湧き出てくる涙を拭いてもせずに零し続けるその姿は、見ていた職員は保護欲を無性に掻き立てる。

男女を問わずにだ。

そして、自分達がなんと慰めの言葉をかけても彼女の涙は止められないという現実には、男性職員は怨嗟の血涙を流しながら、心の中で地球に帰ったゼンへ呪詛を吐きつつ、フェイトを見守る。

「ああっ……びゅっしたら……」オロオロ

「しっかりとッ!!プレシアッ!!あなただけが最後の希望なのよッ
!?!」

「でもリンディ……」

そんなフェイトの姿を食堂の入り口から見守る職員の中にはオロオロし続けるだけのプレシアと、それを嗜めるリンディの姿もあった。

今、このアースラの様子を一言で表すなら………

(混沌—カオス)

その一言に尽きる。

尚、このカオスはクロノがフェイトとアルフにゼンに会わせる約束を取り付けるまで続いたそうなの、まる

.....

そして、俺がジェノサイドされた恐怖の金曜日から3日たった夜、

クロノから電話が来た。

「おう、クロノか？何かあったんか？」

『夜遅くにすまない。実は、アースラは明日早朝にミッドに帰ることとなった。プレシアは戸籍の手続きがあるし、フェイトとアルフは嘱託魔導師試験を受けに管理局まで行かないといけないから、少しの間お別れになってしまっんだ。』

「そおか……だがよ、地球の戸籍のためには仕方ねえんだろ？」

『ああ、こればかりは管理局の法で決まっているからね。それで、明日の早朝に一旦地球に寄るからその時にフェイト達と話をして欲しい』

わざわざそのために連絡してきてくれたのかよ。

クロノもママだなあオイ。

………だが、『して欲しい』ってのはどゆこと？

『場所は海鳴臨海公園。なのはたちには既に連絡してある。…頼むから忘れずに来てくれ。…君が何も言わずに地球に帰るから、アルフは君を探してアースラ中をしっちゃんかめっちゃんにするし、フェイトは泣き続けて大変だったんだぞ？……ハア……おまけに、アルフに轢かれた局員の数名は病院送りになるし……ハア……』

アイツ等何してんの？クロノ君マジご苦労さん。局員の方々、ホンマにゴメス。

「……餞別だ……なんか弁当つくっちゃる……」

『ああ、ありがとう……米系ので頼めるか？君の料理を食べてから、僕も

『和食』に嵌ってね…』

「任せとけ。腕によりをかけるぜ」

『ああ、楽しみにしているよ…それじゃ…』

と、電話もそこそこに俺は明日の朝、キッチンを使う許可をお袋からいただいで、夢の中に入った…

キング・クリームゾン!!

そして早朝、用意した重箱を装備して、俺は海鳴臨海公園に到着した。

作ったのはクロノのリクエスト通りの和食系だ。

俵結びのオニギリや甘く焼いた卵焼き、肉じゃが、から揚げ、芋の煮っ転がし、ほうれん草の御浸しetc…

そして重箱を持ちながら意気揚々と公園に入った瞬間…

とんでもない勢いで号泣するアルフとフェイトがいますた。
…罪悪感が半端ないのです…：…つうか、アルフ…：…ドバカってなん
だよドバカって？馬鹿の最上級かよ？

「ゼン君ッ!!!」

と、二人に押し倒された俺に心配そうな顔で駆け寄ってくるリン
デイさんとプレシアさん…：ああ、やっぱり大人の女性は違うなあ…

と、そんなことを考え、未だに俺の上で号泣する二人の頭を撫でな
がら、駆け寄ってきた二人に大丈夫と言おうとして…：…

「お弁当は無事よッ!!!」

「その返しは予想外」

弁当よりも優先順位が低い事実にも全俺が号泣した。

肩に手を置いて慰めてくるクロノの優しさが痛いです。

ちくせう

少しして、なのはとユーノも合流してきたので、

俺はクロノに事の顛末を聞いている。

管理局の『職務怠慢』と過去の事故の際の不手際とかを摘発したことで、テストロッサー家はお咎め無し。

彼女達は時の庭園がなくなったので地球に移り住むことになった。

アリシアも地球に引っ越す前に、霊園に埋葬するそうだ。

さすがに『クレイジーダイヤモンド』でも蘇生は無理だからな……

なのはとフェイトは俺達から離れたところで話している。

「エイミィは書類作成で徹夜したから、来れなかったけど、ゼンによるしくと伝言は預かってきた」

「そうか…大変だな」

「まあ……これも仕事さ。取引材料が山ほどあるから、テスタロッサ家の罪は全く無いし、僕としてはやりがいのあるヤマだよ」

「迷惑かけるがよろしく頼む」

俺は最低限の礼として頭を下げておく。だが、顔を上げてみるとクロノは不敵な笑みを零している。

「僕とゼンは 友達ダチだろ？死線を共に潜り抜けた戦友でもあるし相棒でもある。『謝罪はいらないさ』。……だろ？」

「コイツ…俺が言ったことを……コイツァ一本とられちまったな…
へへッ」

「そうだったな。ありがとよ。 相棒バディ」

「そうだとも。 気にするな。 相棒バディ」

俺達が拳をつき合わせているとユーノが来た。

「二人共、今回はありがとっ…二人には迷惑かけちゃったね…」

話じゃジュエルシードを輸送していたのはユーノらしいからそのことについての謝罪だろおな。

「いいんじゃないね？いろいろハッピーエンドで終わったんだしよお？」

「僕はこれが仕事だからね。当然のことをしたまでだ」

俺とクロノが気にしていないと返すとユーノは苦笑していた。

「アハハ…二人らしいね…でも、なのはを巻き込んでしまったのはハッピーエンドじゃあないよ…」

そう言ってユーノは俯く。

…まあ、すぐには割り切れないよな…仕方ねえ、ちょっと励ましてやんか…

俺はジャケットのポケットからあるものを取り出す。

「ゼン？それは何だ？」

とクロノが首を傾げて聞いてきた。

まあ、これはそこそこ珍しいモンだからな。

「こいつぁタロットカードだ」

「タロットカード？」

「まあ占いのカードだよ…ユーノ、戦車(チャリオッツ)のカードを貸してくれ」

そして、ユーノからチャリオッツのカードを受け取ってシャッフルする。

ある程度混ぜたら、シャッフルを止めて裏向きにユーノに差し出す。

「どれでもいい、好きなのを一枚とりな」

そしてユーノは一枚引いてひっくり返す。引いたカードは…

「あっ……」

「これは……」

「へへハッパリなあ……」

なんと引いたのはさっき返してもらった戦車(チャリオッツ)のカードだった。

なにも仕組んじやいねえがコイツならこれを引き当てるんじやねえかって気がしたんだよな。

「男なら、巻き込んだじまったと後悔してねえで、最後まで守り抜くくらいの根性見せてやんな」

そう言っつて俺は戦車(チャリオッツ)のカードをユーノに差し出す。

「ゼン……」

そんな泣きそつな顔すんなつての……男だろ？

「そのチャリオッツのカードが示す『勇気』をもって、なのはを支えて、守ってやんな…オメエならできるぜ、ユーノ」

「……」

ユーノはそのまま無言でチャリオッツのカードを受け取るが、目は『勇気』に満ち溢れていた。

俺達はそのまま談笑してたんだが……いきなりアルフが抱きついてきた。

「ゼン〜」

「おわッ!?なんだよアルフッ!?や、やめろって!!」

「いいじゃないか〜暫く会えないんだしい、これぐらいはさせとくれよお……」

尻尾をブンブン振りながらアルフは俺に抱きついて甘い声を出してくる。

……そりゃあ俺も男ですから?このグニグニと形を変えるスイカさんが嬉しくないわけじゃないんすよ?

ただ……向こうでニヤニヤしてるプレシアさんとリンディさんの視線が……ねえ?……

「ハア……まったくよお……」 ナデナデ

俺はアルフの頭を久遠にやるように気持ちを入れて撫でてやる。手の動きに合わせて触り心地のいい髪がサラサラと流れていく。

「はふう ……ゼンの手は暖かいねえ……心がポカポカしてくるよ……」

……目尻がトロ〜ンとしてらあ……
そのまま暫くアルフの頭を撫でてたんだが……背中に伝わる感触がたまらんばい。

しかも積極的に押し付けてきやがるからもお……

俺がアルフのスイカ様に感動しているとクロノが時計を見て、リンディさんの方を向く。

リンディさんもクロノと視線を合わせて頷く。

「そろそろ時間だ……もういいか？」

「……はい」

遂にお別れの時間が来しまった。

コッチに戻ってきたのはとフェイトの2人は晴々とした表情で返事をする。

お互いに涙は浮かべたままだが……

「そんじゃ……またなフェイト、アルフ、プレシアさん」

湿っぽいのは苦手な俺はサッパリとした挨拶で終わらせる。

「またねッ!!ゼンッ!!」

アルフは何時ものように元気一杯に手を振ってくる。八重歯が見えてとても可愛いぜ!!

つつかアルフさんや？振るのは尻尾か手、どっちかにしようや？

「本当にいろいろありがとうだね。ゼン君。何かあったら言って頂戴。必ず力になるわ……だから、また……その……料理を教えてね?……」

そう言ってプレシアさんは俺に微笑を浮かべる。こんな風に笑う人だったんだな……

いくらでも教えますよ？後、気合を入れるのはいいんですがバチバチしないでください。

トラウマがあががが

「ゼン……」

最後にフェイトが来た。なのはとりボンを交換したようでピンクの可愛らしいリボンがついている。

俺の名前を呼ぶフェイトはとても悲しそうな顔をしていやがる……やれやれ……

「そんな顔すんなって。またすぐ会えるんだからよぉ」

俺はそのまま頭を撫でてやる。気持ちを含めて、ゆっくりと、優しく。

くぁ〜〜触り心地が抜群なのよこれ!!!

「う、うん／＼／＼／」

「後、これを……」

「?…あっ……」

俺が渡したのは、アースラにいたときに皆で撮った写真だ。

食堂でご飯を食べる前に記念で撮って貰ったモンで、写真の中の皆は笑顔のやつだ。

「小物入れに入れやすいように、さっき枠は切ったからよ……」

『クレイジーダイヤモンド』の手刀ってすげえわ。

メチャクチャ綺麗に切れるんだもん。

「…ありがとう、ゼン／＼／」

「くへへッびびいたしましてだ」

そしてリンディさんの魔方陣が起動する。
みんなが順々に入っていくがフェイトはまだ入っていない。
なにやら顔は俯いてお腹の辺りで組んだ手の親指同士を回してた。

…どうしたんだ？

よく見ると、リンディさんとプレシアさんが目をワクワクさせながらフェイトを見てる。

……え？なんぞ？

そう考えていたらフェイトが突然顔を上げた。その顔はフェエラの如き赤に染まっている。

「ゼン!!! / / /」

「ん？なんだフェ…むぐっ!？」チュッ

あ、ありのまま今起こったことを話すぜツ!!

『フェイトが突然目を瞑ったと思ったたら、爪先立ちで背伸びして、俺にキスを…』

な、なにを言ってるかわからんだろおが俺もよく判らん…超スピードとか催眠術だとかそんなチャチなモンじゃ断じてねえ…も、もっと恐ろしい物の片鱗を……じゃなくてツ!!?

し、しししししかも口を啄ばむようなバードキスだとおツ!?!どこで学んだこんな高等テクツ!!!?

現在進行形で俺の唇はハムハムされております。

ディ・モールド（非つつつ常に）甘美な味がするとです……

やがて、満足したのかフェイトが俺の口を離す。
俺から離れたその顔はマグマの如く沸騰していた。
俺自身も顔が赤くなってるのがよく判る。
ちなみに他の子供組も真っ赤になっております。
大人組はサムズアップを……………ってアンタ等かい!!?こんな高等テ
ク仕込んだのはッ!!?

「ちゅう……………ぷはっ……………えへへ」

「お、おおおおおま!!?／＼／＼／＼」

突如として降り掛かった甘酸っぱいイベントに俺はパニックってし
まう。

チ、チツスされた!?キスされちった!!?

俺どこでイベントフラグ回収しちまったんだ!?

「……………おお……………!!!!!!」

外野が叫ぶ。って、うるさいよ!?!お前ら!?!

「ま、またね／＼／＼……………大好きだよ……………(ぼそっ)」

フェイトは赤い顔で笑いながらそういつて魔法陣に引っ込もつと
するが……………

俺はやられっぱなしは性に合わねえんだぜえ!!?

妙な負けん気に火が点いた俺は急いでポケットからあるものを取
り出す。

……………フフフ、これ写真の『切れっ端』ね?

『クレイジーダイヤモンド』!!

グイイッ!!

「ふえッ!?

『写真』を治してええッ!!その勢いでフェイトを引き戻すッ!!そしてえッ!!

「む……」

ズギユウウウウウウンン
!!!!!!

「ん!?むー……!!?／／／／／」

そのままフェイトを抱き寄せて、同じように唇を啄ばむキスをしてやったぜ!!!へっへっへ!!!

最初はジタバタと腕を振っていたが、何度もハムハムしていく内に

……

段々と大人しくなっていくって最後は俺の首に自分から腕をまわしてしな垂れかかり俺にされるがままになっていた。

「んっ／／／…ふむっ／／／…はぁふ／／／…んっ／／／…ちゅ／／／…／／／」

しかも自分から積極的にハムハムしてきやがった。

時折その口から普段からは想像できないくらい色っぽくて甘い声が響いてくる。

ルビーのようなその赤い瞳は蕩けきって、俺しか映していない。

そのまま5分くらいキスしてたが手を離してやると腰が抜けたように、フェイトは地面へたり込む。

「くぅ~~~~~ッ!!!」

何故か俺の胡坐の上に座った途端怒り出して、俺の体のありとあらゆる所に体をこれでもかッ!!と擦り付け始めた。

素で「お前なにやってんの?」

と聞いたら頭の上に登って前足で俺の顔をベシベシしてくる。

何故だ？解せん……………

第10話 a・sへキング・クリムゾン!!

……あのジュエルシードをめぐる事件から半年ほど経った冬
……

俺こと、橘禅は平和を噛み締めていた。

…あの海鳴臨海公園でフェイト達と別れてから、俺の日常は極めて、平和でした。マジで。

学校でダチと馬鹿話をして、家に帰れば、波紋の練習とお袋に学ぶ料理教室、大好きなアーティストの音楽を聴いて眠り、休みの日は久遠と戯れ、親父の会社の従業員のおっちゃんや兄ちゃんと遊んでもらうとか、お気に入りの曲を聴きながら町を散歩するとかね。

そんな日常の繰り返し…… ああ!! ビバ!! 平穩!! イヤッ
フウーツ!!……失礼、取り乱しますた。

俺はあの事件の後にはなのは達にはこれっっぽっちも会っていません。もうほんとに、影も形も見当たりませんね。

まあ、学校が違う時点で会うことはあまりないんですが……
フェイト達にも家の住所教えていなかったの、連絡は全然きてないし……再会した時何言われるかってことを考えるとガクブルしていますた……

そんなTHE平和を満喫しながら若干先のことにはビクついて日常を過ごしていた俺は今……

正座してます。しかも『喫茶店』のド真ん中で……あっねえ？

そして俺の目の前に……

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

目の笑っていない笑顔を浮かべた喫茶「翠屋」のパティシエ、高町桃子さん、後ろのオーラが帯電してそうなプレシアさん、リンディさんがいます。はい。

ちなみにその後ろには……………」

「……………」

「大丈夫？ フェイトちゃん？」

「気にすることないわよ、フェイト。あれはアイツが悪いわ。」

「あ、あはは…さすがに…ね？…女の子的には許せないな……………」

目が赤くなつて、涙声のフェイトとそれを慰めながらも俺に非難の眼差しを向けるてくる3人の少女。

魔砲少女、なのはとその友人アリサ・バニングスと月村すずかの仲良し3人組でございます。

ちよつと離れたカウンターにはなのはの兄、恭也さんと姉の美由紀さん、父親の士郎さんがいます。

士郎さんと恭也さんは二人共、めちゃくちゃ済まなそうな、それでいて深い同情を混ぜた目で俺を見ています。

美由紀さんは面白そうなものを見る目ですね。見せモンじゃねえぞ、コラ。

あるえ？俺の平和はどこへ？

…数時間前…

今日はお袋から習ったばかりのパイを作ろうと生地作りをしていた時、家の電話が鳴りだした。

とおおるるるるるんん

「まったく、こちららパイ作りで忙しいってのに電話かよ……はいはい、どちら様だ？」

「はい、もしもし、橋ですが？」

「もしもし？ゼンか？久しぶりだな。僕だよ」

「なんかやたら懐かしい奴から電話が来たぜ……フム……」

「僕僕詐欺なら間に合ってますぜ？」

「……相変わらずそれで安心ス……」

がちやり

とりあえず切ってと……

さて、パイ作りを再開しねえとな。生地はできたし、後は焼くだけ

……

とおおおおるるるるるん

んぬ？電話か…

がちや

「もしもし？虹村ですが…」

『えっ!?ま、間違えましたッ!!すいま…ってそんなわけあるかッー

』!!

「おお!!相変わらず活きのイイ突っ込み。元氣そうじゃねえか?クロー

」ノ

『そんなことの確認に電話を切るなッ!!突っ込みで僕の体調を計るんじゃないあーっ!!』

仕方ねえよ。体が反応すんだから(笑)

しかしまあ、久しぶりだな。かれこれ半年振りってどこか?

「まあまあ、落ち着けよ。で、どっしたよ?」

『軽く流された!?…ハア…まあいい。プレシア達の手続きが終わってね。今日、地球に引越しのために海鳴市に来ているんだ。』

「お!?そっつか!!やっとフェイト達もこっちに住めるのか…てことは囁託魔導師の試験も終わったのかよ?」

『ああ。その辺の手続きも研修も終わって、今はなのはと一緒にいるよ。それと、僕とエイミィ、リンディ提…いや、母さんも地球へ引越すことになったんだ』

「おお!!そりゃあいいじゃねえか!?またオメエと遊べんのも嬉しいねえ…」

フェイト達だけでも嬉しいけどやっぱり男友達も大事だしな。

特にクロノは性格が全然違うのになんか馬が合うんだよなあ……不思議だぜ。

『ああ、僕も嬉しいぞ。…ところで…ゼン…覚悟したほうがいいぞ?』

………え?なにを?

いきなりの覚悟する発言に戸惑うが受話器越しのクロノは構わずに続きを話し始めた。

『君、フェイト達に住所教えてないだろ?…ビデオも手紙も送れないし、なのはにも君とはまったく会ってないとビデオレターで言われてフェイトもアルフも相当落ち込んでたからな……』地球に帰ってゼンと会ったらとっちめて、おもいきり甘えてやるっ!!』ってアルフが変に気合はいつてたし…それに触発されてフェイトもなんだか気合を入れていたぞ?』

予想が現実になりつつある今日この頃。

た、確かに住所を教えなかったのはまずったな。やっぱり。

………つつか、クロノがこの番号をアイツ等に教えてやってくれれば

…

『実は僕の方も仕事が忙しくてこの番号があるのをすっかり忘れててね…さっきバシテ、ボロボロにされたよ……』

…なんだろう…クロノの扱いに目から汗が…

「……フェイトとアルフは傍にいんのか？」

『いや……今はなのはの実家が経営してる喫茶店に母さんたちと一緒に行って……ロ……』

「……どした？」

『…君に伝言を預かっていてね…』今日、その喫茶店に来るよつに…と…プレシアと母さんから…』

「……ちなみに断ったら？」

聞いてみたいようで聞いてみたくないかも…

『…』君に浴びせた電撃の槍を魔力が尽きるまで何発でも浴びせる……だ、そつだ…』

やっべえ。マジでやっべえ。あんなモン何発も食らったら骨も残んねえよ。

トラウマがあばばばばばばばばばばば

ま、まだ死にたくないし、翠屋に行くことは確定だな。こりゃ。しかし面倒事は続く物のようでクロノはさらに辛い伝言を伝えてくる。

『それと、なのはからも…』前に食べたお菓子の話をお母さんにしたら一度食べてみたいって言ってたから今日何か作ってきて!!』…と』

あんにやろう。面倒ごと増やしやがって!!

まあ、なのはからだし?別にそんなもん無視しても…

『ちなみに断ったら』プレシアさんと一緒に魔力が切れるまでアクセルしてからのスターライトブレイカー』…だ、そうだ…』

さあ〜て、今作ってるパイを仕上げねえとな!!完璧に!!

なんせなのは様からのご命令だしな?俺、気合入れちまうぞ〜!!

…………ちくせう

あまりの理不尽さに目から汗が出てきた俺に受話器からクロノの悲痛な声が聞こえてくる。

『…すまない…止められなかった…僕は無力だ…………』

「…いや、クロノのせいじゃねえよ…また、なんか作ってやるよ…男だけで喋ろうぜ…」

『ああ…ありがとう…ユーノも呼んでやるか…』

「そっだな……………」

と、そんな感じで互いを慰めあって電話を切った。

半年振りの友達同士の電話がこれって…………

気分が若干落ちた俺は中断していたパイ作りを再開して、出来上がったパイを包んでジャケットを羽織っていく。

背中にはイルカが」とのマークになってる絵がプリントしてある俺のお気に入りの一着だ。

そして戸締りをしてから、喫茶店『翠屋』を目指して家を出る。途中黒猫が集団で横切ったが気にしない。ああ、気にしない。

一応翠屋の場所は知っているので、迷うことなく着いた。

着いたんだが……こう……なぜか店の入り口がああ世一直線に向かう魔界の入り口に見えます。なんで？

……入りたくないが、入らないと『電撃』と『アクセル』が雨あられと俺に降り注いじまう。

トドメはスターライトブレイカーって……それなんていじめ？

……ええい！ままよ！！

俺は覚悟を決めて（ヤケ）店の入り口を開ける。

扉を開けるとロングヘアーを三つ編みにして眼鏡を掛けた女性が俺に近づいてくる。

エプロンしてるし、店員さんだろう。

「いらっしやいませ！僕一人かな？」

まあ、店の扉一人で潜ったし、この年じゃ普通は聞かれるよな。

……お？この人は確かなのはの姉だったな。アニメで見たし、間違いないだろ。

「あーっと俺一人というか……高町なのはって子に呼ばれてきたんですが……」

向こうとは初対面だし、これが無難な返事だろ。

「え？なのはに？っということとは……君が禅君かな？」

どっちら、なのはは家族にも伝えてたみてえだな。

ちゃんと挨拶しとかねえと。

「あっはい、そうです。俺は橘禅といいます。よろしくお願いします。」

「うん、よろしくね禅君。私は高町美由紀。なのはのお姉ちゃんです。」

美由紀さんは朗らかに笑いながら自己紹介をしてくれた。

しかし、美人だよなこの人。明るいし、嫁にもらう人は幸せモンだろうな。

それで挨拶も終わったのでなのはのいる場所を聞こうとしたら

……

「あっ!? 禅君！ 久しぶりなの!!」

ちょうど俺に面倒ごとを作ったなのは様がいらっしやいやがった。

なのはが来たので美由紀さんは「それじゃ、ゆっくりして行ってね」とウインクをして仕事に戻っていった。

とりあえず俺もなのはに挨拶しようとしたところ……

「……あう……／＼／＼」オドオド

なのはの後ろから顔だけ出してオドオドしてる野生のフェイトを見つけた。

顔だけひよこつとだしてはいるんだが……俺と目が合うとなのはの背中に引込む。

そんでまた恐る恐る顔だけ出して俺を見てくる。なにこの可愛い生き物？

俺を見つめるその頬は中々に赤く染まっている。

そんなフェイトの様子になのはは苦笑いして困っているようだ。

…まあ、あんな事(キス)したからなら…恥ずかしいんだろ…俺もちよ
い恥ずしいし…

でもこのままじゃラチがあかねえな。可愛いけど。

「……………うう…／／／」

「ほーら、フェイトちゃん？」

「…う、うん…………／／／」

と、そんなことを考えていたらなのはがフェイトを背中から俺の前
へ促していた。

俺の前に来たフェイトは視線を右往左往させてる。

手を後ろに組んで沈黙してますね。はい。

その状態で2分くらい経ったので俺から声を掛けようとしたら

……

「…ゼ、ゼンツ!!…ひ、久しぶり…だね…／／／」

顔をバツと音が鳴りそうな勢いで上げて俺の名前を叫ぶ。

途中から段々と声が小さくなったけど、目線は俺にしっかりと向け
ている。

ともあれ、頑張って挨拶してくれたんだし、俺も平常運転でいきま
すか。

「よお!!フェイト?になの…は?まあ、恐らく久しぶり?」

平常運転でボケていくぜ?

「なんで疑問系なの!?…もつ、禅君、どこに住んでるか教えてくれな
かったから町でも全然会えないし…」

「私も…住所知らなかったから…」

俺が住所を伝えてなかった件でなのはは両手を腰に当てて怒ってくる。

なのはの感情にあわせてツインテールもピコピコしてやがる……生きてんの？あれ？…まさかな？

と、思ったらフェイトのツインテールはなんか犬の尻尾みたいにシユンとしてる。

……え？やっぱ生きてんの？それともそついうギミックが流行ってんの？

女体の神秘？に思考を巡らそうかと思っただが、二人に弁解すんのが先だわな。

「へへッ悪い悪い。まあ、そのお詫びにちゃんと菓子作ってきたからよ、勘弁してくれやっ。」

「むう…なら、それでいいの…」

「……………」

食いしん坊(笑)のなのはは納得してくれたがフェイトはまだ落ち込んでやがる。

「ん…じゃあフェイト。今度なんかお前んために菓子作ってやっからよ。それで機嫌、直してくれや？な？」

俺は半年振りにフェイトの頭を撫でる。

サラサラの金色の髪はとても柔らかく俺の手に引っかかることなく流れる。

ああ…ヤツパリ癒されるわ、これ…

しかし、いきなりのごとにビックリしたのか、フェイトの顔は一気に茹で上がる。

「ッ!? うん／＼ありがとう／＼…あ、あの。ゼン? …頭…その…／／／」

「んあ? 嫌だったか?」

「う、うん…嫌じゃないけど…ち、ちょっと恥ずかしい…かな…／／」

まあ、店内だし、人目もあるからな…俺はそう考えて手を離れたが…

今度は「あっ」って声を上げて寂しそうな、残念そうな顔で見てるんだけど…一体どおすりゃいいの?

…ん? 女の子が二人、近づいて来るな。

一人は金髪の勝気な顔の子でもう一人は…紫っぽい黒? の髪をした大人しそうな印象の子だ。

…ありゃ、たしか…

「なのは、こいつが話してた奴?」

「確か…ゼン君だったよね?」

アリサ・バニングスと月村すずかだったな。喋り方にも二人の性格が表れてるぜ。

…なのはが自己紹介をしてって目で語ってやがる。
仕方ねえ…

俺はまずアリサに向き直る。

「や〜べしむ、べしむ。俺の名前は橘禅だったらしいぜ?」

「なんで聞いてくるのよ!？」

「そんなのこっちが聞きてえ!!」

「逆ギレ!？」

「丁寧にキツチリ乗って、キツチリ返してくるアリサ。

つむ、こやつ。ツッコミにキラリと光るものがあるな(笑)

「あ、あはは…お、面白い人…だね?」

すずかは苦笑いしてるが、お前さんも他人事じゃねえんだぜ?

テメーはすでに俺の射程距離内ってな(笑)

俺はそのまますずかの手をとって真剣な顔を作りすずかの目を見つめる。

「え!？」

「變じてるぜ(キリッ)(」

「え!?ええッ!!?／＼／」

「」の手の言葉には耐性が無いみたいですがすずかの顔は一気に赤くなっていく。

「やっべえ、おもしろ…」

「唐突すぎるでしょうがッ!? 出会って1分経たないうちに何をやらかしてるかぁッ!?!／＼／」

何故かアリサも顔を赤くして声を荒げながら俺にツッコミを入れ

てくる。

どうやら二人共こういうのには耐性が無いみてえだな。

ヤベエ、おもしれエよ……

ひとしきりからかって満足した俺は手を離して両手を上げたままおどける。

「へっへっへー冗談だって！まあ、よろしく頼むぜい…ゼンって呼んでくれりゃいいからよ…フェイトとなのはとは半年ほど前に知り合ってたな？俺が住んでるトコ言い忘れてたから今日は半年振りに会ったってワケ」

「ハア、ハア、ハア…まったく！どーゆう神経してんのよ！…まあ、いいわ。あたしはアリサ・バニングス。アリサでいいわ」

「び、びっくりしたよ、もう！！ノノノ…つ、月村すずかです。私もすずかでいいよ…あんまりああいいうこと、しちゃダメだよ？」

息の整ったアリサは怒りながらもキツチリ自己紹介をしてくれた。すずかもちゃんと自己紹介してくれて俺の悪戯を優しく嗜めてくる。優しいね、すずかは。

アリサはすぐ元に戻ったけどすずかはまだちょっとだけ顔の赤が抜け切っていねえな。

まあ、すぐに戻んだろ。

「オーライ、よろしくな、アリサとすずか」

と、和やかに自己紹介を終えたんだが……
なんか、横にいるフェイトさんが真っ黒いオーラを出しながら俺を見ている。

俯いてるせいで口元以外見えねえけど、幻覚か、背後にはデス13が浮かんで見えます。

…そのデス13と同じように三日月の形に曲がった口がとても怖いです…

「ねえ？ゼン？…」「愛してる」って…どっいついことかな？…」

やっべえ、やりすぎた？

う、俯いて表情がわかんねえ分、本気で怖えぞ!!

「お、おおお落ち着いて下さいなフェイトさんや…あれは一種の冗談で…」

俺がそう必死に言い訳すると見えなかった顔が徐々に上がってくる。

…そのゆっくりと顔を上げる動作がメチャクチャ恐怖を煽ってくるんですけど!!

「冗談でも言っつてイイ事と悪いこと…あるよね？…ね？……」

見えるようになったお顔のその目にはハイライトが一切ございませんでした。

「あ、はい。おっしやるとおりです。マジすいませんでした。」

誠心誠意、90度に頭を下げて謝罪する。

へタレ？ええ、そうですが何か？

「うん わかってくれたらいいんだ …… わかってくれたら……」

俺を見つめるその瞳はマジ虚ろ、光？なにそれ食えんの？ってな状態だ。

あの純真なフェイトがすく…すく…すく…すく…怖いです…

「と」ろで禅？アンタ、その荷物何よ？」

アリサは俺の持ってきたパイを指差している。

「え!?!…あ、ああ…なのはに頼まれて、菓子を作ってきたんだが…」

フェイトの変貌に呆けて、返事がワントンポ遅れちまった。

つつか、おゝ人さんや？今のフェイトはスルーですかい？そうですかい。

「うん!!禅君のお料理ってすっごくおいしいの!!だからお母さんにも食べてもらおうと思って頼んだの!」

俺の意思是ガン無視ですがねえ!!?

あれって普通に脅迫じゃね?と思った俺は悪くない筈。

「じゃあお母さんと呼んでくるの　ちょっとまってて」

そういつてなのははカウンターの奥に歩いていった。

「へえ〜いいじゃない?それじゃあ後で私達にも食べさせなさいよ

「!!

「私ももらえたら嬉しいな?」

アリサ達も興味が沸いたようで俺にパイをねだってくる。

まあ、一人じゃ食いきれない大きさだしいいだろ……だが、覚悟して食べよ?」

「いいぜえ?ほっぺたが落っこちるから受け止める準備しとけよ?」

「ふーん？えらく自身満々じゃない？楽しみにしてるわ」

「ふふっ楽しみに待ってるね」

俺が挑発するように言うとアリサは不敵に笑い、すずかは微笑みながら席に戻っていく。

二人は席に戻ったし、とりあえずリンディさんとプレシアさんに挨拶しておくか…

俺はそのままフェイトと一緒にカウンターにいるプレシアさんの元に近づいていく。

二人も気づいたようで、俺に手を振ってくる。

「プレシアさん、リンディさん、お久しぶりでさあ」

「ゼン君、久しぶりねえ。元気だった？」

「お久しぶりね、ゼン君…元気そうでよかったわ…ごめんなさいね？急に呼び出して…」

いやいやいや、あんなお願い（脅し）頂いたら誰でもスツ飛んて来ますよ？まあ、そんなこと言えませんが？

久しぶりに見るプレシアさんは出会ったときとは違い、とても優しい顔つきになってた。

あんときはなかった母親としてのオーラ見てえなのがガンガン出てる。

「へへっ！気にせんでくださいや。俺もフェイトに久しぶりに会えて嬉しいんで…」

「ゼン…／／／」

俺の台詞にフェイトは嬉しそうに目を緩めてニッコリと笑う。
プレシアさん達はそんなフェイトの様子を見て微笑んでる。
だが、俺は後一人足りないことに気づいてフェイトに話しかける。

「ありゃ？…なあ、フェイト…そおいやアルフはどした？（ぼそっ）」

そう、アルフがいねんだ。

クロノが電話で言った通りならアイツもここに来てるハズなん
だが…

「ノノノえ？…あっうん…地球じゃ子犬の姿になってるよ。今は、
ユーノと一緒に辺りを歩いていると思う（ぼそっ）」

俺が小声で聞くとフェイトも小声で返してくれた。だが、アルフが
子犬になってるといふ新事実よりも…

…ユーノエ…まさかのペットポジションですかい…それでいいの
か、ユーノよ？

俺がユーノの男としての尊厳について真剣に考えているとリン
ディさんが真剣な表情で俺を見て話しかけてくる。

「後、とても大事な話があるの…また後日でいいからうちに来て欲し
いんだけど…」

その言葉で理解したのか、プレシアさんとフェイトの表情も引き締
まっっていく。

…やれやれ…まあた、面倒事かよ…まあ、この人達が関わってんな
ら、仕方ないか…

「わかりました。後日、行くときや連絡しますわ…」

と、そんな会話をしていたらなのはが両親を連れて戻ってきたんだが……
うちのお袋といい、プレシアさん達といい……どうなってんの？
この世界の女性って……なんでこんなに見た目若いの？まさか、波紋使ってるの？

「君がなのはの話していた子ね。私はなのはの母の高町桃子です。よろしくね？」

「僕はなのはの父の高町士郎だ。よろしく頼むよ。」

とりあえず食べてもらう人に切り分けて席に着いたところでなのはの両親から自己紹介がきた。

ちなみに、食べてもらう人は士郎さん、桃子さん、アリサ、すずかなのは、フェイト、プレシアさん、リンディさん、美由紀さんだ。何故か、美由紀さんはパイを見た瞬間、うな垂れてるけど……なんで？
うし、初対面だし礼儀正しく行きますか……

俺は席から立ち上がって背筋を伸ばす。

「初めまして、橘禅です。本日は俺の菓子の試食、よろしくお願いします」

「禅君が敬語で喋ってる!?ありえないの!!」

オイマてやコラ。

いくらなんでも酷過ぎやしませんかい？なのはさんや？俺だって敬語くらい……

と思ったら、なのはだけではなくリンディさんとプレシアさん、フェイトも驚いている。

そんなに意外か!?泣くぞッ!?泣いちゃっぞッ!!コラマッ!!

「ふうふ、そんなに畏まらなくてもいいわよ」

「ははは、なのはから面白い子とは聞いていたけどね。それにしても…小学3年生でこれほど綺麗にパイが作れるとは…ふむふむ、見た目は合格だね…中身はカボチャかな？」

とりあえず見た目はいいみてえだな。

「ありがとうございます。中身はカボチャを使ったパンプキンパイです…店やってる程のお人じゃ適いませんが出来る限り厳しい評価を頂ければ幸いです。…お口汚しになりやすが、皆さんもどうぞ召し上がってやってくださいー」

「ふうふ、それじゃあ、いただきます…あむっ…」

見た目の評価は終わりいざ！実食！他のみんなの評価も気になるぜい！！

「ふうふん！！、とってもおいしいのー」

「相変わらず美味しいわねえ…女としては複雑だけど…」

「ええ…私はゼン君の料理は和食しか食べてないけど…とても美味しいわ…」

「うん 久しぶりに食べたけど…ゼンの料理、やっぱり美味しい…」

は今まで俺の料理を食べた方々 は今回初。

「うわぁ…ッとっても美味しいね！アリサちゃん！」

「……………ハッ!?…え、ええ、そうね。すずか(何!?この美味しさは!?)」

「うう…完全に負けてる…なんでこんなに美味しいのが作れるのお?」

「これは…驚いたな…とても小学生のレベルとは思えない…」

「……………」

うっしやあああッ!!!!

かなり高評価じゃねえのか!?やっぱ人に喜んでもらえんのは嬉しいぜ!!

…あれ?一番肝心な桃子さんが何も言っただけで…

「あの?…お口に合いませんでしたかい?」

他の皆も桃子さんの異変に気づいたのか皆不思議な顔で見ているんだが、それでも桃子さんは動かない。

…だが少ししてからそのままの姿勢でユラリ、とでも擬音がつきそ
うな動きで立ち上がってるんですが…何?

「も、桃子?」

士郎さんが声を掛けても変化はない…そのまま、桃子さんは俺に近づいて、両肩をガツシイイイツ!!

と力強く掴んできた。皆も何事か、とオロオロしている。

桃子さんは未だ、俯いていて表情が見えない……………え?なんぞ?

「禅君……」

ようやく喋ったかと思っただらそこからおもむろに顔を上げて

……

「翠屋を継ぐ気は無い？ いや、継ぐべきよ」

「待とうか待とうか待とうか待とうか待とうか待とうか」

なんか暴走状態に入ってるっしょるよ、この人。

そのまま桃子さんは将来のために真剣に菓子作りを覚えるべきだ。

といつから来れるか？

と俺の予定を聞き始めた。これにはさすがの土郎さんも焦りなるとか桃子さんを引き剥がしてもらった。

そこから、暴走状態の桃子さんをなんとか、なんとか説得して

「偶になら、ホント偶になら、ケーキを作ります。将来云々は勘弁してください」

と言っただら目からキュピーンッとも擬音がつきそいな音と光が出て…

「じゃあシフト、組んでおくわね フッフ…」

と笑顔のオプション付きで帰ってきた。

あるえ？

いつの間にか翠屋で働くことが決まってる。おかしいなあ？

微かに残る淡い希望にすがって土郎さんを見るが苦笑いでサムズアップをもらってしまった。

そして一言

「頑張れ…」

……………あるえ？

とそんな感じでいつの間にか決まった未来に頭を捻っていたら

……………

桃子さんの説得中に外に行った筈のフェイト達が中に戻ってきた。

フェイトは両手でなにやら小包を抱えている。なんぞ？

「リンディ提と…リンディさん」

「はい。なあに？」

「…あの「ア…」」

戸惑いながらフェイトは、小包の中を俺達に見せてくる。中に入っていたのは白い制服だった。

「こりゃ、確か聖祥小学校の……」

「制服じゃねえか？」

「フフフ…転校手続き取ったから。週明けからなのはさんのクラスメイトよ」

笑顔でリンディさんが爆弾発言を言った。

フェイトだけじゃなく、アリサ達も驚いてる。

なあ〜るほどお…中々粋なことすんじゃない？リンディさんよお…
スウパーサプライズってか？

「あら素敵。フェイトに良く似合っわ」

「良かったわねフェイトちゃん」

優しく微笑みながら、桃子さんとプレシアさんが言った。

確かに、フェイトも友達と通えて嬉しそうじゃねえか。

「あの…えと…はい、ありがとうございます…！ございます／＼」

恥ずかしがりながらも、フェイトは嬉しそうに制服の入った小包を抱きしめた。

その表情はとても幸せに満ち満ちている。

うん…この笑顔、和むわぁ…これが見れただけでも今日ココに来て良かったぜ。

「良かったじゃねえか。フェイト」

俺も声を掛けておく。幸せそうな顔だなあ、オイ…

「う、うん…／＼ゼンも学校でも…その…よろしくね？／＼」

おつおつ、モチよ!!学校でも…

「そういえば…学校で禅君に会ったこと無いの。どこのクラスなの？」

なのはも笑顔で聞いてくる……いや、え？

「禅！アンタせっかく友達になったんだからどこのクラスか教えなさいよー。」

「そうだね。学校でもお話したいな？」

アリスとすずかも一緒になって聞いてくる……あっれえ？

「そうね…ゼン君…学校でもフェイトの」と、よろしくね？ゼン君ならフェイトを任せれるわ。」

いや、ちよ。待ってプレシアさん？

大人たちの小声話

「あらあら？もしかしてフェイトちゃん…」

「ええ そうなんですよ。」

「なるほど…しかし、プレシアさんはよろしいんですか？」

「ええ 私もゼン君が息子になってくれるならとても嬉しいです。」

桃子さんとプレシアさんと土郎さんが小声で話してたけど、今の俺にはソレを気にしてる余裕は一切無かった。

「そうね。ゼン君がいてくれたら安心ね。」

ありがとうございます。リンディオ……じゃなくてッ!?
何も言わない俺を嫌がってると思ったのか、フェイトの瞳がウルウルしてくる。

「ゼ、ゼンは……私と学校で会っの……嫌?」「ウルウル

その上目遣いやめてッ!!すっげえ罪悪感が……あ……これは……
そおか、知らないんだな……

「あ……その、な?…フェイト?…」

「う、うん……」

「俺のクラス、な?」

「ッ!!う、うん!!どッ!!」

「い、いせ、どッ!!か…」

「……?」

「俺、聖祥小学校には、通ってねえんだわ」

俺が『海鳴第二小学校』の生徒なのを……

スタープラチナ・ザ・ワーールドッ
!!!!!!

「……………」

誰も、何も、喋らない。否、喋れない。辺りは本当の意味で時間が止まった。

…沈黙がとても痛いです……

そしてさっきまで花が咲いた笑顔を浮かべていたフェイトは……

「……………」ブワッポタポタポタ

目尻にあった涙がボロボロと溢れて地面にポタポタと雫を……
ちよっ!?

ガッシイイイイイイッ
!!!^{x3}

いきなりの事態にテンパっていた俺はイキナリ後ろから頭と両肩を捕まれます。

俺は杉本怜美のいる『決して振り返ってはいけない道』をあえて振り返るぐらいの覚悟で後ろを振り返ると……

「……………」

「……………」

「……………」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……………」

振り返るんじゃないかと本気で、本気で後悔しました。はい。

ちよっ!? 待ってっ!? これって俺が悪いんですかいつ!? いや、ちよっ

!!!?

アツ—————!!!?

そして、冒頭に戻る。

あるえ? 俺って何かした?

後半へ続く!!

第1話「俺の意思はどー？」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」誰も、一っ言も喋ってくれねえのが、余計に恐怖を煽ってくるぜ……

現在進行形で俺の胃がブレ、ブレ、プレッシャーでマッハです。床に正座してるので、見下ろされて効果倍プッシュ。

「アイツ最低ね。女の子を泣かせるなんて……」

「うん……あれは、いくらなんでもひどいよ……」

アリサさん？すずかさん？ドンだけ理不尽なんすか？あんた等。

「ねえ？……ゼン君？私の聞き違いかしら？……今、あなたはフェイトと違う学校に通ってるって私には聞こえたんだけど？……」

「ニコニコと目以外が笑っているプレシアさんが俺に聞き返してくる……」

できればその目も笑って頂けると素敵なんですが…

「あゝその…聞き違いじゃねえですよ？俺は聖洋小学校じゃなくて海鳴第2小学校に通ってます。はい」

この場で嘘言っても仕方ないのでしっかりと答えたんですが……お三方は相変わらず沈黙してる。

その沈黙に居た堪れなくなった俺は恐る恐るプレシアさん達の後ろにいるフェイトを覗き見る。

「ッ……………」ポロポロポロ

うげえッ!?フ、フェイトの涙がヤバイことになってるし!?

涙の量、絶賛増量中でした。

あ、あんな捨てられた子犬みたいな目で見られると罪悪感がまるでハーヴェストの大軍の如く襲ってきやがる!?

……………あ、あんな目えされたら俺は何もしてねえのに俺が全部悪いって気持ちにさせられるぜえ…

フェイトの涙に比例して、俺に対する非難の眼差しもヤバくなっていく。

そして…目の前のお三人様のプレッシャーも跳ね上がっていく。

いやいやいやっ!?仕方ねえじゃんよ!?

私立なんて面倒なところには入りたくなかったんだよ!!

そもそも俺はそこに居るなんて言っただけだっどっ!!?

なんで俺が聖祥小学校に通ってる前提で話が進んでたわけさ!?

「フ、フェイトちゃんッ!!ゴ、ゴメンね？私が禅君と学校でも会えるよなんて期待させちゃって…」

よおし、なのはお前が諸悪の根源だなコノヤロオ。ぶちっ潰し

ちやうぞ？コラ。

だが、フェイトはなのはを責めることをせず、濡れた瞳で俺を横目に見ながら口を動かした。

「う、ううん…きに、しない、で…なの、はは悪く…ぐずっ…ないよ…
わた、わたしが勝手に…期待し…ちゃった…だけ、だか、ら…ひつく
…ゼン、も…ご、ごめんね？…迷惑…だよ…ね？…」ポロポロポロポ
ロポロポロ

ぎゃあああつあああつ!!

そんな涙流しながら無理した笑顔向けないでええええつええええ
えっ!!?

もう俺が悪いでいいからどうか泣き止んで下さい!!フェイト
様アーーーー!!!

そして、フェイトの涙を召喚条件に、俺の目の前にカーズ様並のプ
レッシヤーを持ったお二人が顕現された。

あ、俺死んだわ。

………つてあれ？ちよいと待て？2人？

「ハア…仕方ないわねえ…」

目の前のリンディさんは「やれやれだわ」とでも言いたげに、頬に
手を当ててるが………チョイ待てコラ。

その台詞は俺が言うべき台詞であって間違ってもアンタじゃねえ

よッ!?

そんな俺の心の叫びを意にも介さずにリンディさんはなんとも、なんとも黒い笑顔を俺に向けてくる。

…………… やつべえ。滅茶苦茶いやーな予感がするぜえ…ここ、ここは何をされても耐えなければっ!!

俺は黒い笑顔のまま喋ろうとするリンディさんを警戒心MAXで見ながら言葉を待つが…………

「ゼン君? アナタのお家の住所、教えてもらえるかしら?」

あまりにも想定外の台詞に頭が混乱してきたぜ。

何故に住所を聞くの? その笑顔の裏に一体どんな意図があんですか?

「じゅ、住所? な、なんですかい?」

とりあえず疑問を返してみたけど…………

「あら?、別にこのままo・h・a・n・a・s・h・i続けてもいいんだけど?」

「いちぢらになりますッ!!」

やつべえ!! 会話が成立してねえんだけど!?

「この場を納めてもらえんなら住所の二つや三つ、いくらでも出してやんよ!!」

俺は急いで財布から住所と電話番号の書かれた紙を取り出してリンディさんに差し出す。

傍から見たら小学生をカツアゲしてる様にしか見えません。

「はい、ありがとうございます。では、監視せん? 少しいちぢら!!…………」

俺から髪を受け取ったリンディさんは女性人を引つ張って隅このテーブルへ移動してしまった。

あ、危なかったぜ……………マジで死ぬかと思った。

とりあえず助かった命に心の中で歡喜の涙を流しながら安堵したが……………

俺はいい加減、正座を解いてもいいのか？なんか勝手に解いたらヤヴァイ気が……………

と、正座を解くか否かで迷っていると今まで避難していた恭也さんと土郎さんが近寄ってきた。

なんか二人共、本気で可哀想なものを見る目で見てくるんですけど……………美由紀さんは接客に戻っちまったし。

「大丈夫か？…大変だったな……………」

恭也さん。あなたの氣遣いに涙が出そうですたい……………でも……………

「ありがとうございます……………でも、助けてくださっても、よかったんじゃないんですかい？…えーと？」

「恭也。高町恭也だ…済まない、禅君…まだ俺も命は惜しい……………」

「まあ……………そうですよねえ……………」

恭也さんの言わんとしてる事はよく判る。俺だって逆の立場ならぜってえ避難するよ。

ぶっちゃけ、まだD.I.O様と戦って方が気が楽だわ。ありゃ、無理。

逆らった瞬間、問答無用でミキサーに掛けられてもおかしくなくぐれえのプレッシャーだったし。

「ハハハ…男としては情けない限りなんだが…僕も、さっきの状態の妻には逆らえなくて…ゴメンね？」

……そこはむしろ、惚れた弱みぐらいに言って欲しかったです。

むしろ、あの桃子さんに逆らったら自殺志願者ですぜ？土郎さん？

「俺……何かしましたかねえ？」

「いや…むしろ、被害者だと思っが…」

「女の子としては、許せなかったんだろっけど…同じ男としては…大変だったね？…今度、ケーキをサービスしてあげるよ…」

「俺も、いつでも言うてくれ…飲み物ぐらいは奢らせて欲しい…」

「……ありがとうございます…」

お二人の気遣いに目から汗が出そうだぜ……

と、そんな感じで男同士の友情を深めていたら、女性人が戻ってきた。

だが、様子が変わります。

なのは嬉しそうな顔をしているし、すずかは苦笑い、アリサに至ってはニヤニヤしてる。

………何があった？ホントに？

大人組み3人はとっっても、とっつつっても、黒いです。はい。

もうなんか、全体的に黒いです。プレッシャーがとか顔がとかじゃなくてももう存在が真っ黒です。

そしてフェイトはというと………さっきの涙はどこへやら、まるで向日葵のような笑顔を浮かべてます。

何があった？

俺がフェイト達の変貌ぶりに首を捻っていると、桃子さんから声が掛かった。

「さて、じゃあ私は店に戻るわね　…禅君？今度来るときはお店のケーキ、作ってもらおうからね？…フフフ」

桃子さんはもう一度キュピーン！って感じで目を光らせながら俺を一瞥して厨房へ入っていく。

……俺、次から来てもこのケーキ食えんのか？

…なんか永遠に作らされそうなビジョンが浮かんでくる…エピタフ持っていないのに…

って土郎さん？その可哀想な者を見る目はなんですかい？恭也さんまで…もしかせんでも見捨てられた？

……もはや俺に味方はいないのかよ？

絶望した俺がうな垂れているとアリサ達も声を掛けてくる。

「じゃあ、私とすずかは習い事があるから…またね？フェイト、なのは

…後、禅も…」

「またね フェイトちゃん、なのはちゃん…あつ後、禅君も…」

お二人さん？とつてつけた言い方すんなや。コンチキシヨオ。
そのまま二人は仲良く店を出て行った。

「じゃあ、私達も行きましょつか？」

「ええ、そうね…フェイト。お母さん、『頑張ってくる』からね？期待して待ってて」

「うんっ！ありがとっ、お母さん…」

リンディさん達もどっかに行くみてえだな。

……ん？「頑張る」って何をだ？

そんな俺の疑問を他所に、リンディさんとプレシアさんは二人で店を出て行った。

残ったのは、俺とフェイト、なのはだけだ。

土郎さん達も店に戻っている。

まあ、用事は終わつたし俺もそろそろ帰りますか。

俺もそろそろ帰るとフェイト達に声を掛けようとしたが……

フェイトが俺のジャケットの裾を親指と人差し指でチヨコンとつ

まんで、俺を見ている。

不安なのか、俺をみる赤い瞳は少々震えてた。

……滅茶苦茶可愛いんですが？

「あ、あの…ゼン？」

そんなフェイトの行動に萌えているとフェイトからちよつと戸惑い気味に呼ばれた。

「ん？なんだ？」

「そ、その…い、今から私の家に、来てくれない…かな？…」

え？今から？

店の時計を確認すると、7時を回っている。

さすがに今からじゃ、帰りが遅くなっちまうな。

そうなるとお袋からの制裁（パニッシュメント）がきちまうし…無理だな。

また、次の機会にしてもらおうか……

「いや、さすがに今からは…」

「ダメ…かな？」

「いや…な？…ダメというかですね」

「ダ、メ…かな…」

フェイトは少しずつ涙目になりながらそう呟いてくる。

……あ、あれ？デジャヴ？

だ、だがここで負けるわけにやいかねえぞ!! 橘禅!!

俺の死亡フラグを回避するためにも「コ」は心を鬼にして断るんだ

!!

「いやほら、さすがに今の時間からは…」

「ダ……………メ…かなあ……………」ウルウルウル

あつダメだ。

いや、フェイトの誘いを断るのがダメなんじゃなくて……

これ以上断ったら、マジ泣きしちまうぞ。こりゃあ……

いつの間にか、カウンターの奥から包丁をチラつかせる笑顔の桃子さんもいるし。

…覚悟、決めるか…

「……是非、一緒させて頂くぜ…ベイビー…」

「ッ!? うん ノノノ」 パアアッ

俺の返事を聞いたフェイトは一気に泣き顔から輝くような笑顔に変わっていく……女って怖い……

とりあえず、なのはに別れの挨拶をして俺達はそのまま店の入り口を開けて外に出たんだが…

そこには子犬になったアルフとユーノがいた。

初めて見たけど、子犬モードのアルフは見ていてとても癒されま

す。

やべえッ!? アルフの子犬モードがメチャ可愛いんですけどッ!!?

そのつばらな瞳が最高だぜ、ヒヤッハアッ!!

なぜか、ユーノは可哀相なものを見るような、それでいて、深い、深い同情を感じさせる目をしている。

だが、久しぶりの再会に若干テンションがハイになった俺はそのことに気づかなかっただ……

「よぉーユーノにアルフ！久しぶり……」

ガアブウウッ!!!

「あんぎゃあああああああつああつすッ
!!!!??」

「ア、アルフッ!!?」

いきなりアルフが俺の顔面に飛び掛って、髪の毛と頭皮を噛みまくってきたんだけどッ!!?

なんでっ!?俺まだ何もしてないんだけどッ!!?いきなりなんなの、コレエッ!!?

「ダメだよ!!アルフ、どうしたのッ!!?」

いきなりの事態に目が点になってたフェイトが慌てて駆け寄ってアルフを引き離そうと思いつき引っ張ってくれるんだが…
フェイトさん?今アルフの爪と牙は俺の頭と髪に食いついてんですよ?従って引っ張ったら……

グイイイイイイイッ!!!

「あだだだだだだだだだだだ
!!!!??」

俺の頭皮とかも一緒に引っ張られちまうんですがあああああ
あッ
!!!!?

痛いって!?ちよっ!?マジで離してッ!!引っ張らないでッ!!?
毛根がプチプチいってるからあああああッ
!!!!?

「ど、どっしたのアルフッ!!?…ほ、他の雌!?意味がわからないよ!」

念話の使えない俺にはアルフとフェイトがどんな会話してるかわからんが…アルフが怒ってるのは判ります。

只、何に怒ってるかは皆目検討がつきませんがね。

そのまま暫く、俺の毛根は怒れるアルフと引っ張り続けるフェイト

によって蹂躪され続けますた。

つつかよっ!?

俺はポルナレフじゃねええっええっ
!!!!

現在、まさしく翠屋の前はカオスに満ちていた。

(ゴメン……ゼン……僕が余計なことを言ったから……)

店に入っていくゼンを見て、別の動物の匂いが強く染み付いてた。
とその場に遅れて来たアルフに喋ってしまった事を後悔するユー
ノがそこにいた……

第12話〜今日はよく女の涙を見る日だなあ…俺の涙も…

「あ〜…クソツ…髪の毛がボッサボサになってら…」

「だ、大丈夫かい？」

夜の道を歩きながら俺はアルフにくちやぐちやにされた髪の毛を手櫛で整える。

だが、余りにもぐちゃぐちゃになりすぎて効果はねえ…所々跳ねてやがる……

そんな悲惨な状態の俺を肩に乗ったフェレット状態のユーノが心配してくれる。

マジ感謝ツス。

男友達って大事だね、ヤツパ。

「ああ…心配してくれんのはオメエだけだよ…ユーノ…」

「あ、はは…と、当然だよ…（言えない…僕がアルフに言ったなんて…絶対に…）」

なんか目が泳いでやがるがどうした？

「オメエはいい奴だなあ…そっれに比べてよお………」

「……………」

俺は腕の中でぶすっとしているアルフに視線を送る。

「オメエは何時まで不機嫌なんですか？アルフさんよお？」

「……………」

子犬状態のアルフは俺の声に一切耳を貸しちゃくれません。
マジで俺が何したよ？

その後、翠屋の入り口でアルフに噛まれた俺はフェイトの家に向
かって、夜道を歩いてる。

腕に子犬状態のアルフと肩にフェレットモードのユーノを装備し
て。

ちなみにアルフは『呪われた』系の装備だけだな。

翠屋の前で5分ほど俺の頭に噛み付いていたアルフはそのまま俺
の腕にしがみ付いてきたので抱っこしていたんだが

フェイトの家に向かうため腕から降ろそうとしたら……腕に思
いっきり噛み付きやがった。

それから、何度も降ろそうとする度に噛み付くので諦めて抱っこし
てます。

ホントに『呪いのアルフ』状態だよ。どっかに御祓いの呪符ねえか
な？

散々噛み捲くってくれたおかげで俺の腕とジャケットの裾は噛み
後だらけだ。

俺は噛めば噛むだけ味の出る骨ガムじゃねえんですが？コノヤ
口オめ…

ちくせう

「まったくよお……久しぶりに会ったら噛み付きて…何の罰ゲームだっつーの……」

そう愚痴を零しながら腕の中のアルフを撫でてやる。

人通りが少ないところ歩いているのにアルフは全然喋っちゃくれねえから

俺が一人で呟いてる状態だ。

「……」

未だに喋っちゃくれねえが、最初みたいに唸ることはなく俺の腕にアゴを乗せて垂れている。

普段ならスツゴイ和むような仕草だが、アルフの目はまだ不機嫌なまんまなので全然和めねえ。

マジでだめだわ。こりゃ、相当怒ってやがる。

つつか何に怒ってんのよ？アルフさん？

俺にはなんでアルフがココまで怒ってるか皆目検討がつかない。

…それと…もう一人不機嫌なのがいるんだよなあ………

俺は出そうな溜息を飲み込みながら、手を後ろに組みながら前を歩くそいつを見る。

「……」
「むすっ」

「フェイト？いい加減、機嫌直してくださいや……」

「……」
「ぷいっ」

「…………ハア……」

俺の前を歩いているのは頬袋を膨らました顔のフェイトさん。
首を反対に向けて俺から視線を逸らすその仕草は吹きだしがあれば『ポンポンしてます』って感じだ。

やってることは素晴らしく可愛らしいんだが……………さっきから俺に
一っ言も返事をしてくれません。

…視線すら合わせちゃくれませんか。この娘。

どうにも俺がアルフを抱っこしているのが気に入らねえようだが

…

降ろそうとしたら噛まれるんだから仕方なくねえか？

降ろす 噛まれる 降ろす 噛まれる 以下エンドレス……

仕方無しにアルフを抱っこすれば今度はフェイトが拗ねて怒って
くる。

フェイトの機嫌を直そうと降ろせばアルフに噛み付かれるです。

どっしろと？

あまりの理不尽さに目から汗が出そうだったぜ……

例えるなら『ギャルゲーの最後の選択肢でどっちを選んでもBAD

ENDだったときの理不尽さ』ぐらいに……

肩にいるユーノが前足でポンツと俺の肩を叩く。

俺を見つめるその目は慈愛に満ち満ちている……

その優しさが……………とても染みてきます……

そんな感じで早く着かないかと祈りながら俺達はフェイトの家を
目指して夜道を歩く……………どっしろとこっとなったよ？

.....

フェイト達が引越したのはこの近所の高級マンションだそうで
リンデイさん達アースラ組も一緒に住むそうだ。

囑託魔導師としてもそのほうが都合がいいらしい。

ちなみに教えてくれたのはユーノ君です。二人は喋っちゃくれま
せん。

それで、辛い道を歩くこと5分。やっとフェイトの住むマンション
に着いた。

感覚的には1時間はあったけどな……

目的のマンションに着いたときにはまるで砂漠にオアシスを見つ
けたときのような安堵感ができました。

そのままエントランスを潜ってエレベーターに乗る。

結構、上の階で降りてやっとここさマンションの入り口に着いた。

フェイトがポケットから鍵を出して扉を開ける。ちなみにココま
での道のり、俺達に会話は無い。

……この年で胃がやられそうだったぜ……

「ただいま」

フェイトが帰った挨拶をすると奥から半年前と余り変わって無い
クロノがでてきた。

「ああ、お帰り……ってゼンじゃないか!? 久しぶり……」

クロノはアルフに噛まれて髪がぼさぼさでジャケットの腕の部分
がボロボロの俺を見て固まっている。

まあ、そっちなっちまっ気持ちわかるけどな……

そして事態を理解したクロノの目は驚愕から同情に変わっていく

…

「…久しぶりだな…クロノ…元気そうで良かったぜ…」

「あ、ああ…ありがとう…き、君も元気そう……だな？」

疑問系かよ。

「と、とりあえず入ってくれ。お茶をだすから…」

「ああ…すまねえな…」

「ぼ、僕も手伝うよ…ゼンはゆっくりしていなよ?…」

ユーノは俺の肩から降りて変身魔法を解除して人間になる。

「そ、そうだな。ユーノも来てくれ…ゼンは、ゆっくりしてくれたらいい…」

「…すまねえな…」

そのまま二人はキッチンに向かう…

今日はとんでもなく疲れたし、お言葉に甘えますか…
と、その前に…

「フヘイト」

俺は玄関をまたぐ前に、未だにむすつとしているフヘイトに声を掛ける。

「……………何？」

俺を見る目は未だに不機嫌一色…心が…折れそうです…

「あゝその、よお……………連絡先教えてなかったりしたのは悪かったからよ……………そろそろ機嫌をなおしちゃくれねえか？…な？」

俺の手は自然とフェイトの頭を撫で始めた。

なんか吸い寄せられちまうんだよなあ……………フェイトは嫌がらずに撫でられている。

そのまま俯いて、たっぷり数十秒沈黙した後…

「……………うん…」

顔を上げて、一言だけ返事を返してくれた。

ああ!!助かった!!

マジでこのままじゃ胃がやられるところだったぜ!!

「じ、じめんね……………ずっと無視しちゃって……………」

フェイトもやり過ぎたと思ったように、ちょっとオロオロしながら謝ってくる。

「なあに、いいってことよ……………頬を膨らましてるフェイトも結構可愛かったしなあ」

俺はちよつと意地悪な感じで言ってる。

まあ、実際可愛かったしな。

なんつうか『主人に構ってもらえなくてへそ曲げてる犬』って感じで。

「ッ!? / / / …… あ、 あっう …… / / /」

再び俯くフェイトだが、頬は真っ赤になっている。

やっべえ。

滅茶苦茶可愛いんですけど!? 手が、手が止まりませえんッ!!

俺はそのまま調子にのってフェイトの頭を撫で続ける。

「うんうん、さっきのフェイトもいいがこっちのフェイトも可愛い
なあ、おい」

「あう…うう… / / /」

羞恥で顔を真っ赤にしながら声を上げるフェイトに萌えっぱなし
でテンションがハイになってた俺は……

「グルルルル……」

手元で唸り声を上げるアルフをスツカリ忘れてた。

アウチ

ガアアアアブウウウウウツ!!!

「んぎゃあああああつあああああつあああつあああつす!!!!?」

噛み跡がまた一つ、増えたぜ……

っておいッ!? まだ噛み足りねえっつかッ!?

ちよっ!?まっ!?まっ!.....

アッ-----ッ
!!!!!!!!!!

.....

「ゼン…大丈夫かい?」

「……………」ボロツボロ

「…大変だったな…」

今はリビングのソファーに全員座っているんだが…俺の状態を一言で表すなら、ボロツボロです。

ボロボロではありません。ボロツボロ。

服も顔も噛み跡だらけ、マジ痛えよ。

それで、俺をこんなにズタボロのボロ雑巾にしてくれやがった張本人は……

「ふんっ!!ゼンの馬鹿があたしを忘れるからいけないのさっ!!」

人間形態（大人）で胡坐をかいてソファーにふんぞり返り、未だに俺への愚痴がノンストップでした。

かなり、ご機嫌斜めです。

こんなときに彼女を納めてくれる筈のフェイトさんということ

.....

「ノノノ...ゼンが私のこと...か、可愛いって.....あ、あううノノノ」

頬に手を当てて煙を噴いて時折、頭を左右にふってます。

つまりはポンコツになってます。

まあ、俺がそうしたんですがねえ...噛まれ捲くってる俺の横でトリップするってどうよ?

とりあえずフェイトは置いて...今はアルフの機嫌を直すほうが先だな...

「...痛てて...わ、悪かったって...久しぶりだな、アルフ...元気そうで良かったぜ...」

痛みを波紋で和らげて立ち上がった俺は服を『クレイジーダイヤモンド』で治してアルフに声を掛ける。

俺の「悪かった」って言葉あたりでアルフの耳がピクンッと動いた。

「ッ!?そ、そう簡単には許してやんないよ!!」

だが、目を俺にちょっと向けただけで未だに顔はそっぽを向いている。

「だから悪かったつつつに。またアルフに会えたのは本当に嬉しいん

だからよ…機嫌直してくれって…頼むわ…」

俺はそう言っただけで顔を上げてみるよ…

さっきの不機嫌な表情から一転、ソファに座ってるアルフは膝を抱えて目尻に涙を溜めたまま俺を睨んでいる。

体育座りみたいな状態だ。耳もなんか、ぺたん、としてるんだが…

……何？この可愛い生き物？

「……なにさ、あたしがいない間に別の雌と楽しんでたくせに!!その雌を構ってやりやいいじゃんか…」

そう言っただけで俺から視線を外して口を尖らせてる。

胸の前で両手の人差し指をツンツンしながら…

……すみません、その反応は可愛いすぐるんですが、
ってチヨイ待て…

「ああ？別の雌だあ？」

別のって…知らないんですが？一体誰のこと言ってるんだよ？

だが、俺のその反応はお気に召さなかった様でアルフは再び涙目で俺を睨みつける。

俺を見るその目はまるで『しらばっくれるなっ!!』と言いたげな目だ。

………なんぞ？

俺が首を傾げていると、遂にアルフの目尻から溜まっていた涙が一筋零れた。

そのまま涙を拭いもせず俺を睨みつけて爆発した感情をぶつけ

てくる。

「ッ!?.....良くもまあそんなことが言えたもんだねっ!?

じゃあアンタに染み付いてるそのあたし以外の雌の匂いはなんなのさっ!?

ここにいてもブンッブン匂っつよっ!!イヤラシイ雌の匂いがねッ!!

あたしがいないのをいい事に別の雌と遊び回ってたんじゃないかッ!!

あ、あたしが...ゼンに会いたくて、会いたくて必死に...が...頑張ってる、時に.....ひっぐ.....

...アンタは...ぐすっ.....他の雌とイチャイチャしてたんだあッ!!うわああっあんっ!!!」

溜まりに溜まった感情を吐き出したアルフはそのまま傍にいたエイミィさんに泣きつく...

エイミィさんの俺を見る目は女の敵を見る目です。

.....なんで『結婚したての妻が夫に浮気を責める』みたいな感じで怒られてんの?俺?

怒りと悲しみがごっちゃんになったアルフは涙をポロポロ流しながら俺を責めたてている。

その涙と悲しみに染まった表情を見ていると罪悪感で胸がメチャクチャ締め付けられてくるよ。

.....今日はよく、女の涙に罪悪感を感じる日だなあ、おい。

そんなことを考えていると生ゴミを見るような視線にレベルアップしたエイミィさんから.....

「ゼン君っつね.....サイッターだね。」

トドメの一言が出てきた。

『ブッタ切ってやるっ!!』

エイミイさんの言葉が俺のハートを容赦無くシルバーチャリオツの如き速さで切断していく。

最初より声が1トーンぐらい下がるのが凄く効きます。

女性から言われたくない言葉、ブッチぎりのNO1を貰った俺は崩れ落ちそうになる。

なぜか今、幻聴が聞こえますた……ポルナレフェ……

クロノとユーノは俺のことを泣きそうな表情で見ている。

目は口ほどに物を言うと言うが、二人の目は『もう止めてッ!ゼンのLIFEはゼロだよッ!』と語っている。

……こいつ等みたいに思ってくれる奴がいなかったら、俺はもう立ち直れなかっただろうなあ……

俺の姿を見ていて辛くなったのか、ユーノが俺に教えてくれる。

「ゼ、ゼン……アルフが言ってるのはね?……他の動物の匂いのことなんだよ」

ユーノから貰った最大のヒントを元に俺の頭の中で検索作業が行われていく。

……他の動物だあ?……てえことは……アイツしかいねえじゃねえか……

「……久遠のことか?」

今の所、俺が愛でる動物なんか久遠しかいねえんだけどなあ……

俺の声が聞こえたアルフは顔をあげてソファァーから飛び上がって俺に掴みかかってくる。

胸元を掴まれた俺の体はアルフとの身長差と相まって、宙吊りにされ、ブランブランと揺れる。

ちよっ!? 苦しいッス!? アルフさ……

アルフはそんなのお構い無しに俺の胸倉を掴む手に力を込めて怒鳴りだす。

「そおら見るッ!! ヤッパリ他の雌と会ってたんじゃないかつ!?

『久遠』だなんてだらしなない声で呼んじゃってッ!! イヤラシイつたらありゃしないよッ!!

…アタシが居ない間に……アタシの……アタシのゼンを誑かしてやがってえええッ!!!

ギリギリギリッ!!! (手に力を込めまくって胸元を締め上げていく。反比例してゼンの顔も白くなる)

その久遠とかいう雌はこのどいつだいッ!? 白状しなっ!! 庇い立てると、容赦、しないよッ!!!」

アルフは俺を前後にガクガクとshakingしながら問いただしてくる。

も、もう既に容赦ないッス!!! 酔います酔います酔いますうッ!!!?

つつか なんてつけてねえんですけどー……ッ!!!?

振り回されて意識が彼方に飛びそうになるがなんとか意識を保ってアルフに答える。

「う、うちの近所の神、社……に住んで、でるっ!? 狐だッ!!」

そこでやっとアルフは振り回すのを止めてくれたが……その目は獐猛にキラついていただけ。

「狐っ!? 雌狐に誑かされたんだねっ!? すぐに見つけ出してブツ飛ばしてやるっ!!」

俺から手を離れたアルフはそう言葉を言い放って窓へ駆け出そうとする。

や、やべえッ!! このまま行かせたらマジで久遠がッ!! 俺の癒しが消えちまうッ!!

「ちよっ!? ま、待てっ! く、『クレイジーダイヤモンド』ッ!!」

なんとか揺さぶりから回復した俺は間一髪のところまで『クレイジーダイヤモンド』でアルフを羽交い絞めにする。

後ろから体を掴まれたアルフは動けなくなってジタバタしてる。

…フウ…あぶねえ………っておいつ!!

『クレイジーダイヤモンド』と引きずってるんですがッ!

どーゆう事っ!?

なんかパワーがとんでもないんですがっ!?! こ、こっちはフルパワーなんですけどッ!?

慌てて俺も波紋で体を強化してアルフの片足にしがみ付く。それでやっと拮抗してる状態だ。

「や、やめんかいつ!! 久遠はコッチとは関係ない普通の狐なんだからよっ!?!」

だが、俺の懇願も虚しく、アルフは目をギラつかせながら『クレイジーダイヤモンド』の拘束を振りほどこうとしている。

「関係ないねっ!! 二度とゼンに近づけないようにしなきゃあたしの気が収まらないよっ!!」

人様のオスに手え出したんだッ!!

その代償がどれだけデカイか、ミッチリと体に叩き込んでや

るッー!!」

「やめさっしっしッーッーッー!!」

久遠の、癒しの安全確保のために、俺は持てる全ての力でアルフを止めにかかる。

なんでこっとなるんだよおッ!!?ちくしょおおおッおおおッ!!!!

.....

そのまま暫く、アルフは暴れ続けたが、「何でも願いを一つ聞く」ということで矛を収めてくれた。

但し、後日、久遠に会わせることを条件に.....

なぜこっとなった?

そして、今はアルフの『お願い』を聞いてるんですが.....

「~~~~~ / / /」

「...まだやんのか?」

「あつたりまえさっ!あたしが満足するまでだよッ!! / / /」

甘えん坊と化した人間モードのアルフを膝枕して撫でてます。...

15分ほど...

「あふう〜 / / /」

そしてこんな空気の中でそんな幸せそうな顔できるアルフさん、ア
ンタすげえッス。

暫くして電話が終わったのか、フェイトが帰ってきたんだが……
なんとも素敵な笑顔で帰ってきました。

なにがあつた？

フェイトはそのまま笑顔で俺を見てくる。

さっきまで無表情で俺を見てたのに、今は輝くような笑顔です。

「ゼン。あ、あのね？… / / /」

今度は赤くなる。一体なんだ？

「き、今日の晩御飯何が食べたい？それともお、お風呂が先のほうが…
／／／」

「ちっきの電話で何があった？」

いつの間にかお泊りが決まっていますた。

あるえ？